

令和4年度

第63回 沖縄県小・中学校長研究大会

島尻大会要録



期 日：令和4年11月9日(水)・10日(木)・11日(金)

会 場：豊見城市立中央公民館 大ホール

主催 沖縄県教育委員会 沖縄県小・中学校長会

表紙画像「ニライカナイ橋からの日の出」(撮影者：佐敷小学校長 前城光告)



あ い さ つ

沖縄県中学校長会

会長 仲 盛 康 治

第63回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会を開催するにあたりご挨拶申し上げます。

皆様ご周知の通り、県校長会の重要な活動として「地区懇談会」と「研究大会」の2本柱があります。先般、1本目の柱、県校長会の活動方針、重要課題等についての共有の場である地区懇談会のとりまとめを行い、県教育委員会への要望を行いました。概要は、「コロナ禍の中子どもたちは3年間友人との交流、授業や各行事、部活動、感染者が出たときの自宅待機、リモート授業、様々制限を受けながら過ごしてきたこと」「教職員は感染症対策の対応、リモート授業の準備、自宅待機児童生徒への対応等、厳しい中にありながらも懸命に教育活動を展開していること」「教員不足、教職員の多忙化や負担感の課題」「学校に必要な人材確保のための選考試験の在り方」「臨時的任用教員の待遇改善」等です。校長は、持続可能な社会づくりを目指すと共に、児童生徒が安心して楽しく学べる「魅力ある学校づくり」を子どもや保護者、地域、一緒に働いている仲間や教職を目指す若者の思いを真摯に見つめ様々な視点から教育環境の改善を図る必要があるとの思いでの要望でした。

本日、2本目の柱、校長の研究を深め資質向上を図る研究大会が開催されます。新型コロナ禍による影響は、昨今、改善の状況にあります。しかしながら、「学校長は学校を守る」という趣旨で今年度も参集しての研究大会を断念せざるを得ない判断を6月にしました。しかしながら、次年度への思いを馳せ、今回紙上発表だけにとどまらず、オンラインやオンデマンド等の取組を駆使し、開催する運びとなりました。全小中学校長の力を結集し校長としての確固たる教育理念、学校経営の責任者としての使命感を持ち、「魅力ある学校づくり」への熱き思いは衰えることはありません。

度重なる新型コロナの影響は、これまで当たり前に行っていた教育活動が制限された一方、新しい時代へ向けた教育改革がGIGAスクール構想、また、新しく就任された半嶺満県教育長から、沖縄教育DX（デジタルトランスフォーメーション）の導入（デジタル化よりも進んだ学習、組織、業務の革新）等、新たな風が吹いております。本日は半嶺教育長から皆様への動画メッセージも準備しております。

本年度の大会主題、小学校：「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る、日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、中学校：「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を掲げ多くの分科会で研究を深めたいと思います。対面方式が望ましいですが、今回紙上発表と併せて、オンライン、オンデマンド等での取組を行う予定です。発表者として割り当てられた各地区の校長先生方には多くの時間を割いて頂きました。それぞれの分科会において、紙面や画面を通して研究を深め、地区や県の校長会で課題を共有しながら校長同士で親睦を深め研究内容の深化を図って頂ければ幸いです。

結びになりましたが、本年度は、本県の祖国復帰五十年を迎える節目にあたります。本大会に向けて各地区で実践研究を積み重ね、分科会で提案をしていただく会員、並びにご助言等を頂く関係各機関の方々、そして大会運営の準備をして頂きました島尻地区校長会の実行委員の皆様感謝と敬意を表します。我々の使命は、予測困難な社会を自ら切り拓き、逞しく生き抜く子どもたちの人材育成です。今回の経験をバネに、次年度こそ、参集しての県小・中学校長研究大会国頭大会にてお会いしましょう。



挨拶

沖縄県教育委員会

教育長 半 嶺 満

第63回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会の開催にあたり、御挨拶を申し上げます。

沖縄県小・中学校長会の皆様方には、日頃より本県教育の振興、発展に格別の御尽力を賜り、厚く御礼を申し上げます。また、今年度もコロナ禍における児童生徒の安全・安心の確保と、学びの保障に努めていただいていることに対して心より感謝申し上げます。

さて、令和3年1月の中央教育審議会による「令和の日本型学校教育」に関する答申において、「Society5.0時代」の到来や、新型コロナウイルス感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」の中で育むべき資質・能力が示されました。また、2020年代を通じて実現すべき学校教育の姿として、個別最適な学び、協働的な学びの2点も併せて示されています。そして、これらの実現には、学習指導要領の着実な実施を、ICTの活用をとおして行うことが必要となっていることも、説明されています。

そこで、本県では、今年度の重点的取組事項として、(1) 沖縄教育DXの推進、(2) キャリア教育の推進、(3) 働き方改革の推進、(4) 校種ごとの重点項目の設定（小学校：不登校児童生徒への支援、中学校：学力の向上、高等学校：進路未決定率の改善、特別支援学校：センター的機能の充実）、以上4つの柱を示し、取組を進めております。

このような折り、貴会において、小学校は「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、中学校は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を大会主題に、これからの教育課題について研究されたことは大変意義深く、各分科会の提案は、時宜を得たものであります。

これからも、子供たちの期待と保護者、地域の方々の信頼に応えられるよう、校長のリーダーシップを発揮し、より素晴らしい教育活動に発展していくことを切に願っております。

「不易を知らざれば 基立ちがたく 流行を知らざれば 風新たならず」の「不易流行」を念頭に置き、これまでの教育実践をICTと組み合わせ、さらに質の高いものとしていくことが必要であります。本県としましても、学力向上施策「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトII」の「充実期」における、2つの「重点事項」の実現を目指し、各学校の授業改善・学校改善を力強く後押しして参ります。

結びに、本大会の充実に御尽力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、沖縄県小・中学校長会の益々の御発展並びに皆様方の御健勝を祈念申し上げ、挨拶といたします。

令和4年11月10日



祝 辞

沖縄県市町村教育委員会連合会

会長 **本 仲 範 男**

第63回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会が開催されますことを心よりお喜び申し上げます。

日頃より本県の学校教育への充実発展、そして高い志を教育理念のもと、学校経営の最高責任者としてご尽力されていることに対し、心より敬意を表します。

令和3年1月中央教育審議会において取りまとめられた答申では、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められるとされています。急激に変化する社会においても、一人一人の児童生徒が、自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓くために、学校と社会が連携・協働しその実現を図る「社会に開かれた教育課程」の実現が重要視されています。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は学校現場にも多大な影響を及ぼしています。こうした状況の中、校長の職責はますます重要性を帯び、教職員や保護者からの信頼を得、教育課題の解決に向けて強くリーダーシップを発揮することが求められています。

今大会においての主題である「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す 小学校教育の推進」「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる 中学校教育」のテーマに基づき、研究協議が深まり、より充実した教育活動への展開へと道筋が開けることを期待いたします。

沖縄県市町村教育委員会連合会といたしましても、これからの社会を創り出していく子どもたちが、社会や世界に向き合い関わりあい、心身共に健全で、豊かな人間性と創造性を育めるよう、本県の教育環境づくりに向けて鋭意努力する所存でございますので、皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

結びに、新型コロナウイルス感染症の影響により、今回の大会も書面開催となりましたが、本県学校教育の一層の充実発展に、大いなる示唆を与えてくださいますことを期待するとともに、皆様のご健勝と、ますますのご活躍を祈念いたしまして、祝辞といたします。



祝 辞

一般社団法人 沖縄県PTA連合会
会長 池 間 守

本日「welcomeな思い出 ハートがつながり みんなで彩るまち」豊見城市において、第63回沖縄県小学校長研究大会島尻大会が開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。

県校長会の皆様には、平素より沖縄県PTA連合会の事業にご理解とご支援を頂き衷心より厚く御礼申し上げます。

さて、一昨年から続くコロナ禍の中、感染防止対策による社会活動の停滞、対面コミュニケーションや文化・スポーツ活動等の制限が余儀なくされ、否応なしに生活習慣をはじめとする様々な活動に大きな変化を痛感しながら、その対応に苦慮してる状況があります。

その一方で多くの不自由さを感じながら、これまでの当たり前のありがたさに気づき、そこに新たな視点や工夫が生まれ、「急激に変化する社会」「予測困難な時代」「持続可能な社会」等、子どもたちが直面する未来を見据えた新しいカタチの活動と連動させながら、歩みを止めず努力を続けることが私たち大人に求められていると感じます。

このような中、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」「新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を大会主題に掲げ、子どもたちの未来を見据え、学校、保護者、地域が理念を共有し、連携、協働するため、リーダーシップを発揮されながら研究協議を深めることは、まさに時宜を得たものであり、大変心強く思います。今回はホームページを活用し、動画を配信、視聴しながらの研究大会となりますが、このような試みも世の中の情勢に配慮した新たな大会運営の在り方として評価されるものと考えます。

沖縄県PTA連合会としましても、今年度の重点目標に青少年の健全育成と家庭教育の充実を定め、家庭・学校・地域の三者に関わる組織として、未来を担う青少年の心身の発達と豊かな人間性の育成を目指して取組を進めているところです。

学校を支える地域、保護者の責任と役割を認識し、学校と手を携えながら「教育の原点は家庭にある」ことを肝に銘じ、保護者同士の横の連携及び地域との協働、共有を深め、誰一人取り残さない、SDGsの理念にある持続可能な開発目標を意識した社会づくりを目指し、子どもたちの豊かな生活環境づくりに貢献していきます。

これからも沖縄県校長会をはじめ、関係機関や関係団体と連携して子どもたちの幸せのために取り組んで参ります。

結びにご参会の校長先生方のご健勝とご活躍、併せて沖縄県小学校長会の今後の益々のご発展を祈念申し上げます。

令和4年11月9日

記 念 講 演

演 題：「国際的な視点から考える日本の教育」
日 時：令和4年11月11日（金）15：30～17：00
場 所：ホスト局 沖縄県小・中学校長会事務局
 ゲスト局 各学校長室
講 師：しら 井 しゅん 俊 氏
 （文部科学省国際統括官付国際戦略企画官国立教育政策研
 究所フェロー、東京学芸大学客員教授を兼務）



【略 歴】

東京大学法学部卒、コロンビア大学法科大学院修士課程修了
2000年 文部省入省
2009年 徳島県教育委員会出向（学校政策課長、教職員課長、教育総務課長）
2012年 文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐
2015年 OECD教育スキル局アナリスト
2017年 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長
2019年 独立行政法人大学入試センター試験・研究統括補佐官
2021年 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室長
2022年 現職

【単著】

白井俊著『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来』（ミネルヴァ書房、2020）

【共著】

古川治・矢野裕俊編『人間教育を目指したカリキュラム創造』（ミネルヴァ書房、2020） 奈須正裕編『「少ない時数で豊かに学ぶ」授業の作り方』（ぎょうせい、2021） 田村学・佐藤真久編『探究モードへの挑戦』（人言洞、2022）

目 次

会長あいさつ、教育長あいさつ、県市町村教育委員会連合会会長あいさつ、県PTA連合会会長あいさつ

第63回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会開催要項

1	目 的	1
2	大会主題・趣旨	1
3	主 催	2
4	後 援	2
5	期 日	2
6	会 場	2
7	大会日程	3
8	運営方針	3
9	大会主題及び分科会研究主題設定の視点	3
10	研究の方向性	3
11	日程詳細	4
12	会場案内図	6
13	大会運営組織図	7
14	分科会担当者一覧	8
15	分科会の編成	10
16	「シンポジウム」「記念講演」テーマ一覧	15

分科会提案要項

小学校分科会

第1分科会	先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進	19
第2分科会	学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに学校教育充実を図る評価・改善の工夫	23
第3分科会	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント	27
第4分科会	豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント	31
第5分科会	キャリアステージに応じた資質・能力や「チーム学校」への参画意識の向上を図る研修の推進	35
第6分科会	これからの学校を担うリーダーの育成	39
第7分科会	命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な危機への対応（新型コロナウイルスへの対応）	43
第8分科会	社会形成能力を育む教育の推進	47
第9分科会	自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携	51
第10分科会	新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、校長の理念と指導性	55

中学校分科会

第1分科会	カリキュラム・マネジメントの推進	59
第2分科会	主体的・対話的で深い学びの授業実践に向かう学校体制づくり	63
第3分科会	よりよく生きるための道徳性の育成と健康で安全な生活を実現するための教育の充実	67
第4分科会	自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める生徒指導とキャリア教育の充実	71
第5分科会	多様化した教育課題に対応できる学校経営と教職員の育成	75
第6分科会	地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能強化	79

あとがき

大会宣言

大会開催要項

第63回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会開催要項

1 目 的

校長の職務並びに教育活動について研究を深め、資質の向上を図るとともに、教育課程の取組を通して沖縄の現状を直視し、小・中学校教育の本質に立って、より充実した教育活動の展開を図る。

2 大会主題・趣旨

【小学校】

(1) 大会主題

「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
～心豊かでたくましく生きる力を育み、活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性～

(2) 趣 旨

沖縄県小学校長会は、全国連合小学校長会、九州地区小学校長協議会と歩調を合わせ、研究主題を設定し、実践的な研究を積み重ねてきた。

新学習指導要領の前文では、これからの学校には、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」とあり、そのためには、学校と社会が理念を共有し、連携・協働する「社会に開かれた教育課程」の実現が重要であることが示された。

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが成人して社会で活躍する頃には我が国は、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、絶え間ない技術革新等による社会構造等の環境が大きくまた急速に変化し、予測困難な時代となっている。

このような急激な社会の変化の中では、一人一人が自らの能力や可能性を信じ、学習したことを生活や社会の中で課題解決に生かすことのできる力が求められる。

また、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越えていく生きる力の育成も課題である。

こうした状況を踏まえ、これからの教育は、学校と社会とが認識を共有化し、変化が激しく未来の予測が困難な時代に向かって、自らの力で未来を切り拓き、ともに生きる豊かな社会を創り出すことのできる人間を育成する教育を実現しなくてはならない。このような時代の要請や社会の変化に対応するため、価値観の違いや変化を前向きに受け止め、自らの力で未来を切り拓く日本人の育成を主意に設定された令和2年度からの全国連合小学校長会の新研究主題のもと、本大会の副主題を「心豊かでたくましく生きる力を育む、活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性」とし、新たな視点で研究を深めていくこととした。

「心豊かでたくましく生きる力」とは、自己肯定感を高め、未来に向かう自信と意欲に満ち、あらゆる他者など様々な価値を尊重する態度を表し、急速に変化する社会に対応し、経験のない困難に粘り強く立ち向かおうとする姿と捉える。また、「活力ある学校」とは、「夢や希望が輝く学校」「自己肯定感が高まる学校」「学び・育ちが実感できる学校」「学校・家庭・地域が一丸となって取り組む学校」と捉える。

新しい研究主題の初年度に当たり、学校教育の果たすべき役割・使命の大きさを真摯に受け止め、各分科会での研究協議を深める中で、優れた実践を共有し、活力ある学校づくりを推進する経営者として、新たな時代に求められる理念と指導性を究明していきたい。

【中学校】

(1) 大会主題

新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育

(2) 趣 旨

全九州中学校長協議会は、全日本中学校長会の研究主題を踏まえ、第70回全九中佐賀大会より「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を大会主題として研究を進めることとした。令和3年度第72回全九中沖縄大会は、新型コロナウイルスにより残念ながら書面開催となった。

現代社会は、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、絶え間のない技術革新等により、社会構造や雇用環境が急速に変化し、生徒が将来就く職業の在り方も大きく変わることが予想されている。このような変化が激しい時代を担っていく生徒は、自立した人間として、文化や伝統に立脚し、多くの人々と協働しながらよりよい社会を創造する力を確かに身に付けることが求められている。

平成29年3月には、新学習指導要領が告示された。新学習指導要領は、生徒が未来社会を切り拓いていく力をよりいっそう確実に身に付けるために、目指す資質・能力の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に培う授業改善、地域社会との連携・協働、社会に開かれた教育課程の推進などが示されている。

校長は、確固たる教育理念と学校経営の責任者としての使命感をもって、新教育課程への円滑な移行を実現し、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育を確実に進展させていかなければならない。

第63回島尻大会においては、これまでの研究成果を踏まえつつ、生徒一人一人がよりよく生きるための資質・能力を育てていくことを目指して、全中学校長の熱意と創意を結集して協議を深め、沖縄県中学校教育の一層の充実・発展に寄与するものとする。

- 3 主 催 沖縄県教育委員会 沖縄県小・中学校長会
- 4 後 援 豊見城市教育委員会 沖縄県市町村教育委員会連合会 沖縄県PTA連合会
- 5 期 日 令和4年11月9日(水)・10日(木)・11日(金)
- 6 会 場 全体会：豊見城市立中央公民館 大ホール

〈分科会会場〉

【小学校】

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 第1分科会：糸満青少年の家 大講堂 | 第2分科会：糸満青少年の家 研修室1 |
| 第3分科会：糸満青少年の家 研修室2 | 第4分科会：糸満青少年の家 研修室3 |
| 第5分科会：糸満青少年の家 研修室4 | 第6分科会：南風原町中央公民館 研修室1 |
| 第7分科会：南風原町中央公民館 研修室2 | 第8分科会：南風原町中央公民館 研修室3 |
| 第9分科会：南風原文化センター 交流研修室 | 第10分科会：島尻教育事務所 第1研修室 |

【中学校】

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 第1分科会：豊見城市立中央公民館 第1会議室 | 第2分科会：豊見城市立中央公民館 第1研修室 |
| 第3分科会：豊見城市立中央公民館 第2研修室 | 第4分科会：豊見城市立中央公民館 中ホール |
| 第5分科会：豊見城市社会福祉センター 研修室 | 第6分科会：豊見城市社会福祉センター レク室 |

7 大会日程

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
期日	30			30			30			30		
11月9日(水)								役員・ 地区会長会				
11月10日(木)	9:30		10:00	10:40	10:50	11:20	12:20	12:40	16:40 17:10		18:40 19:00	
		受 付	開 会 式	準 備	趣 旨 説 明	移 昼 準 動 食 備	打 分 合 わ せ	分 科 会 240分		会 場 移 動	教 育 懇 談 会 90分	
11月11日(金)	9:00	9:30	10:00	10:10	11:40 11:50 12:10 12:15							
	受 付	全 体 分 会 30分	準 備	記 念 講 演 90分	準 備	閉 会 式 20分	事 務 連 絡					

8 運営方針

- (1) 研究の成果が本県教育の発展、学校運営上の課題解決の重要な手がかりとなるようにする。
- (2) 研究は地区会員全員の共同研究のもとに広がりや深まりのあるものとする。
- (3) 大会運営の効率化を図るため、各部が適切な分担をして推進する。
- (4) 前年度までの反省を生かし、新しい課題を追究する。
- (5) 県小・中学校長会の主体性を堅持しつつ、他機関との連携を密にする。
- (6) 記念講演会の企画・立案は担当地区が担い、実施に当たっては、県総務部との連携を密にする。
- (7) 各分科会の研究協議内容は、大会集録にまとめる。なお、大会集録は冊子にせず、電子媒体で校長会事務局で保管する。

9 大会主題及び分科会研究主題設定の視点

- (1) 沖縄県教育の現状と課題、県民の期待と要望を把握し、その解決を目指す。
- (2) 県小・中学校長会の運営方針に基づいて設定する。
- (3) 研究大会は、令和元年度全国、九州地区の大会主題や分科会研究主題及び研究の視点を配慮し設定する。
 - ・小学校の分科会は、全連小(13分科会)・九小協の分科会(9分科会)研究主題に関連させて設定する。なお、本県の喫緊の教育課題(学力問題)に対応するため、本県研究大会においては、第10分科会(学力向上推進)を設定する。
 - ※第71回全連小京都大会より大会主題が変更される。それに関連し第71回九小協大分大会の研究主題・協議題も変更となる。
 - ・中学校の分科会は、全日中(8分科会)・全九中(6分科会)の分科会研究主題に関連させて6分科会とする。
 - ※第70回全日中群馬大会より大会主題が変更される。それに関連し第70回全九中佐賀大会の研究主題・協議題も変更となる。
- (4) 教育内容の質的転換が期待される教育課程について研究を深める。

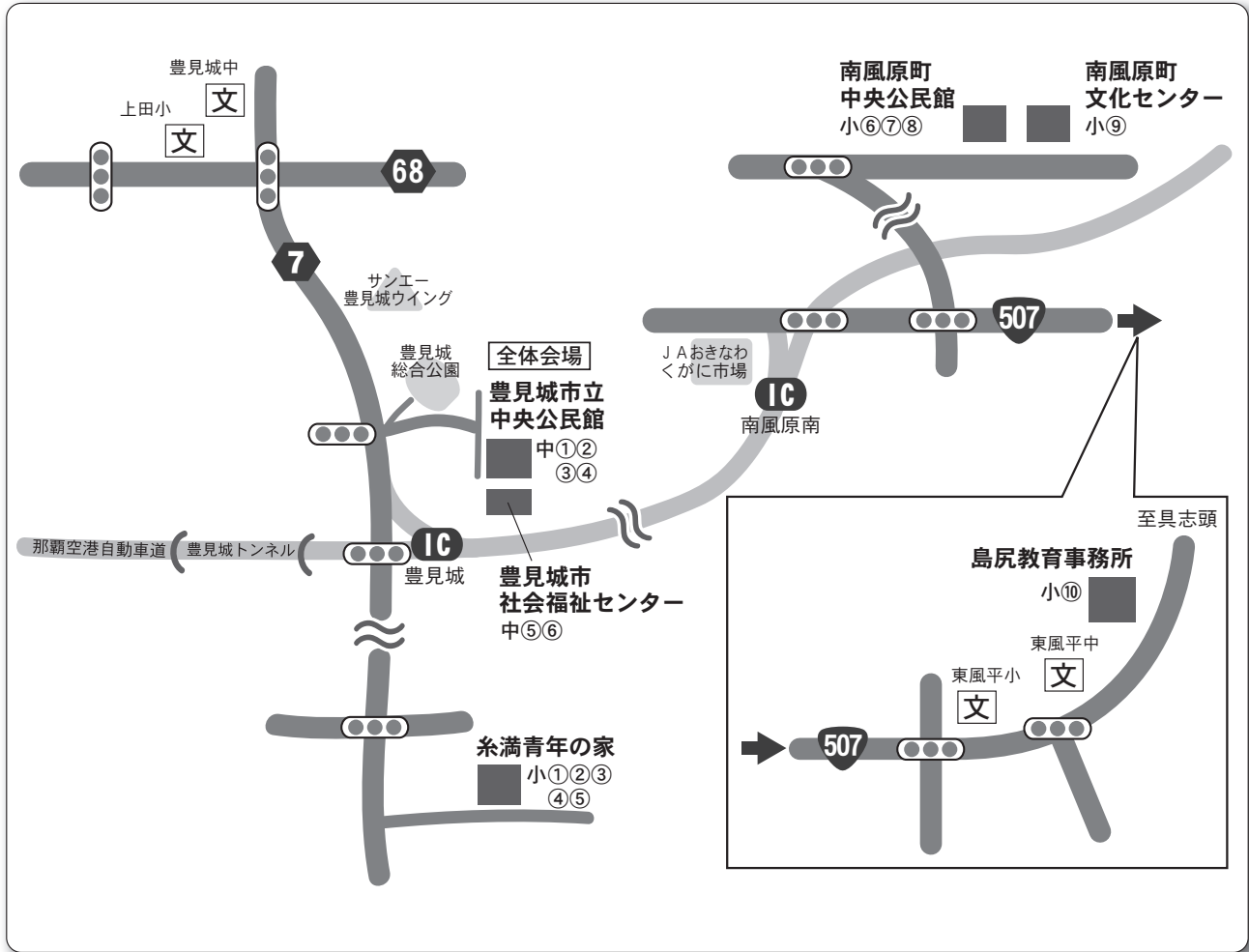
10 研究の方向性

- (1) 主題に迫る上での学校経営上の課題は何かを明確に
 - 校長としての認識
 - 校長としての課題把握
- (2) 課題を解決するために
 - 校長としての視点(戦略的リーダーシップ)
 - ・ストラテジー(戦略。長期的な課題の解決、長期的な目標の達成)として、課題をどう捉え、どう考えたか。
 - ・同時にタクティクス(戦術。個々の実践での戦術。短期的な課題の解決、短期的目標の達成)の視点から、何をなすべきであると考えたのか。
 - 課題解決の過程での課題と対応
 - ・課題解決の過程で新たに発生した課題とその対応。ここでも、校長として、どう考え、何をなすべきかの視点から記述することが大切である。
- (3) これらの取組の結果・成果及び課題は何か
 - 児童・生徒の変容 ○教師の変容 ○保護者の変容 ○学校と地域との関係の変容 ○その他
 - ・主題を踏まえ、上記の視点等から事実を通して成果及び課題を述べる。
- (4) 研究協議のまとめ
 - 校長としての課題の捉え方、認識はどうであったか。
 - 校長としての「戦略と戦術」はどうであったか。
 - ・上記2点を客観的な視点から考察する。

11 日程詳細

11月9日(水)			10月10日(木)		
時間	行事	内 容	時間	行事	内 容
9:00			9:00	諸準備	諸準備
9:30			9:30	受付	豊見城市立中央公民館 大ホール
10:00			10:00	開会式(40分)	1 開式のことば 2 国歌斉唱 3 あいさつ (大会長・県教育長) 4 祝辞 (沖縄県教育委員会連合会・県PTA会長) 5 歓迎の挨拶 (豊見城市長) 6 来賓紹介・祝電披露 7 閉式のことば
10:30			10:30		準備 (10)
11:00			10:50	趣意説明(30分)	義務教育課対応 (30分) (施策説明・協議題説明)
11:30			11:20	移動・昼食等(60分)	分科会移動・昼食 (60分)
12:00			12:00		
12:30			12:20		分科会打合せ (20分)
12:50			12:30		
13:00			12:40		
13:30			13:00	分科会Ⅰ(150分)	分科会Ⅰ (全国・九州共通課題) 【150分】 ◆各分科会場 【分科会の進行例】 ①開会通知・係紹介 (3) ②司会者あいさつ (2) ③提案発表 (25) ④質疑応答 (15) ⑤各地区発表 (3分×5地区) (15) ※各地区の取組み紹介のみとする。 ◇◇休憩 (5) ◇◇ ⑥研究協議題設定(10) ⑦研究協議 (50) ⑧指導助言 (20) ◇◇休憩 (5) ◇◇
14:00			13:20		
14:30			13:30		
15:00	役員・地区会長会(90分)	・場 所：豊見城市立中央公民館 ・参加者：県役員 (正副会長、県総務・研究部長)、各地区会長 開催地区役員 (大会実行委員長、副委員長、総務・運営・研究部長、式典担当、総合司会、来賓接待他) ・打ち合わせ事項 大会運営・役割分担の確認 ・式典進行の確認 ・来賓接遇の確認 ・開催地区からの調整 ・その他の調整	14:00		
15:30			14:30		
16:00			15:00	分科会Ⅱ(90分)	分科会Ⅱ (全分科会共通課題) 【90分】 【分科会Ⅱの進行】 ①はじめのことば (分科会司会) ②共通課題に対する協議 ◇事例 (各学校の取組み) など自由闊達な意見を出し合う。 ③共同研究者からの振り返り ④おわりのことば (分科会司会)
16:30			15:10		
17:00			16:00		
17:30			16:30		
18:00			16:40		会場移動 (25分)
18:30			17:00		
19:00			17:10	教育懇談会(90分)	教育懇談会 豊見城市立中央公民館 中ホール
			17:30		
			18:00		
			18:30		
			18:40		
			19:00		

12 会場案内図



小学校長会場

第1分科会	糸満青少年の家 大講堂 TEL 098-994-6342	第6分科会	南風原町中央公民館 研修室1 TEL 098-889-0568
第2分科会	糸満青少年の家 研修室1 TEL 098-994-6342	第7分科会	南風原町中央公民館 研修室2 TEL 098-889-0568
第3分科会	糸満青少年の家 研修室2 TEL 098-994-6342	第8分科会	南風原町中央公民館 研修室3 TEL 098-889-0568
第4分科会	糸満青少年の家 研修室3 TEL 098-994-6342	第9分科会	南風原文化センター 交流研修室 TEL 098-889-7399
第5分科会	糸満青少年の家 研修室4 TEL 098-994-6342	第10分科会	島尻教育事務所 第1研修室 TEL 098-998-4416

中学校長会場

第1分科会	豊見城市立中央公民館 第1会議室 TEL 098-850-3280	第4分科会	豊見城市立中央公民館 中ホール TEL 098-850-3280
第2分科会	豊見城市立中央公民館 第1研修室 TEL 098-850-3280	第5分科会	豊見城市社会福祉センター 研修室 TEL 098-856-2782
第3分科会	豊見城市立中央公民館 第2研修室 TEL 098-850-3280	第6分科会	豊見城市社会福祉センター レク室 TEL 098-856-2782

13 大会運営組織図



14 分科会担当者一覧

(小学校)

■協議題のゴシック体は提案内容

分科	領域/会場	主 題	協 議 題	共同研究者	提 案 者	地区共同研究者
1	経営ビジョン 糸満青少年の家 (大講堂)	先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進 (国 頭)	①未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定	金城 均 (中頭教育事務所 指導班長)	島袋ゆかり (瀬底小学校)	仲宗根勝也 (名護小学校) 大城 豊 (高江小学校) 新垣 郁代 (大宜味小学校)
			②学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進			
2	「組織・運営」 「評価・改善」 糸満青少年の家 (研修室1)	学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりととりと運営並びに学校教育の充実を図る評価・改善の推進 (那 覇)	①学校経営ビジョンの具現化に向けた活力ある組織づくりと学校運営の推進	上田 達大 (宮古教育事務所 指導班長)	前田 真利 (浦添小学校)	奥間千賀子 (当山小学校) 飛田 恭宏 (港川小学校) 金城 勝巳 (港川小学校) 宮里 晋 (牧港小学校) 中山 盛弥 (浦城小学校)
			②自ら未来を拓く力を育む教育を確かなものとする学校経営の評価・改善			
3	「知性・創造性」 糸満青少年の家 (研修室2)	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント (中 頭)	①「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組	江谷 一 (義務教育課 主任指導主事)	渡久地裕子 (諸見小学校)	松田 忠 (島袋小学校) 森山 涼子 (山内小学校) 永川 幸徳 (コザ小学校) 上門 健作 (中の町小学校)
			②しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育活動を実現するカリキュラム・マネジメント			
4	「豊かな人間性」 「健やかな体」 糸満青少年の家 (研修室3)	豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント (島 尻)	①新たな社会を見据えた人権教育と豊かな心を育てる道徳教育の推進	前川 恒久 (国頭教育事務所 主任指導主事)	佐久本広志 (豊見城小学校)	竹下 晴康 (翔南小学校) 宮里 秀樹 (与那原小学校) 川満 恵昌 (光洋小学校)
			②心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指す教育活動の推進			
5	「研究・研修」 糸満青少年の家 (研修室4)	学校の教育力を向上させる研究・研修の推進 (中 頭)	①教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実	大浜 覚 (中頭教育事務所 主任指導主事)	松尾 剛 (泡瀬小学校)	長間 清人 (比屋根小学校) 松堂 直美 (安慶田小学校) 上原 秀樹 (三川小学校) 徳村 恵子 (美東小学校) 平良その子 (高原小学校)
			②キャリアステージに応じた資質・能力や学校経営への参画意識の向上を図る研修の推進			
6	「リーダー育成」 南風原町中央公民館 (研修室1)	これからの学校を担うリーダーの育成 (八重山)	①学校教育への確かな展望をもち、行動できるミドルリーダーの育成	宮良 健 (八重山教育事務所 指導班長)	仲地 秀将 (八島小学校)	大浜 謙 (登野城小学校) 真玉橋真由美 (伊野田小学校)
			②時代の変化をとらえる能力と豊かな人間性を身に付けた管理職人材の育成			
7	「学校安全」 「危機対応」 南風原町中央公民館 (研修室2)	命を守る安全教育・防災教育の推進並びに様々な危機への対応 (宮 古)	①危機回避能力を育む安全教育・防災教育の充実と地域や関係機関との連携を図った安全教育・防災教育の推進	太田 寛 (那覇教育事務所 主任指導主事)	與那覇 修 (下地小学校)	松本 尚 (砂川小学校) 花城 修 (鏡原小学校)
			②いじめや不登校等に適切に対応できる体制の整備と高い危機管理能力をもつ組織・体制づくり			
8	「社会形成能力」 南風原町中央公民館 (研修室3)	社会形成能力を育む教育の推進 (島 尻)	①社会の発展に貢献しようとする資質・能力・態度を育む教育の推進	比嘉 幹男 (国頭教育事務所 主任指導主事)	新垣 典彦 (与那原東小学校)	具志 直哉 (座安小学校) 大村 朝彦 (阿波連小学校) 平良 正哉 (大里北小学校)
			②自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進			
9	「自立と共生」 「連携・接続」 南風原文化センター (交流研修室)	自立と共生を図り、実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携 (那 覇)	①子どもの自立を図る特別支援教育の推進	勢理客貴之 (島尻教育事務所 主任指導主事)	工藤 直也 (識名小学校)	崎山嗣一郎 (与儀小学校) 大田佳世子 (城岳小学校) 徳門 敦子 (真和志小学校)
			②家庭・地域等と連携し充実した教育活動を展開できる学校づくりの推進			
10	「学力向上推進」 島尻教育事務所 (第1研修室)	新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、校長の理念と指導性 (国 頭)	①「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」を推進する	上里 亮 (那覇教育事務所 主任指導主事)	上間 久 (東江小学校)	島川 直樹 (本部小学校) 赤嶺美奈子 (西小学校) 岸本五穂子 (安和小学校)
			②家庭・地域社会と連携した学力向上の在り方			

(中学校)

■協議題のゴシック体は提案内容

分科	領域/会場	主 題	協 議 題	共同研究者	提 案 者	地区共同研究者
1	「教育課程」 豊見城市立中央 公民館 (第1会議室)	カリキュラム・マネジ メントの推進 (八重山)	①学校教育の改善・充実に向けた、「社 会に開かれた教育課程」の実践 ②教科等横断的な視点を含めた教育 課程の編成・実施・評価・改善の 在り方	普天間英明 (中頭教育事務所 主任指導主事)	美差 淳司 (小浜中学校)	仲地みゆき (西表中学校) 與世山 操 (黒島中学校) 下地 和美 (竹富中学校)
2	「確かな学力」 北部生涯学習 センター (第1研修室)	主体的・対話的で深い 学びの実現 (島 尻)	①学習の質を一層高めるための「主体 的・対話的で深い学び」の授業実践 と学校の体制づくり ②各教科等の学習状況の把握及び授 業の評価・改善の在り方	神山 吉明 (国頭教育事務所 指導班長)	宜保 博哉 (潮平中学校)	大城 正篤 (渡嘉敷中学校) 大城 直之 (糸満中学校) 平良 真也 (座間味中学校) 當間 保 (南風原中学校)
3	「豊かな心」 「健やかな身体」 豊見城市立中央 公民館 (第2研修室)	よりよく生きるための 道徳性の育成と健康で 安全な生活を実現する ための教育の充実 (那 覇)	①全ての教育活動と「特別の教科 道徳」 との関連を図り、よりよく生きよう とする意思や能力を育む道徳教育の充実 ②健康で安全な生活と豊かなスポーツ ライフを実現するための教育の充実	新城 高広 (那覇教育事務所 指導班長)	仲間 丈二 (鏡原中学校)	與那覇 覚 (小禄中学校) 宮良 安剛 (北大東中学校) 望月 雄紀 (南大東中学校) 比嘉 清喜 (金城中学校)
4	「自らの生き方」 豊見城市立中央 公民館 (中ホール)	自己理解を促し、将来に わたって人としての生き 方を深める生徒指導と キャリア教育の充実 (中 頭)	①自他を敬愛し、他者と協働しながら 自己実現を図るための自己指導能力 を育成する生徒指導の充実 ②社会的・職業的自立に向けて必要 な「基礎的・汎用的能力」を育成 するためのキャリア教育の充実	副田健太郎 (島尻教育事務所 主任指導主事)	島袋 勝範 (あげな中学校)	仲宗根政人 (伊波中学校) 山内ひとみ (石川中学校) 大舩 勝彦 (具志川中学校) 與那嶺 剛 (具志川東中学校)
5	「人材育成」 豊見城市社会福祉 センター (研修室)	多様化した教育課題に 対応できる学校経営と 教員の育成 (宮 古)	①教職員の専門性と指導力を発揮す る研修や学校運営の在り方 ②学校経営に積極的に参画する教職 員の育成や人事評価の在り方	足立 克枝 (島尻教育事務所 指導班長)	垣花 秀明 (久松中学校)	狩俣 典昭 (下地中学校)
6	「学校経営」 豊見城市社会福祉 センター (レク室)	地域や専門機関との連携・ 協働による「チーム学校」 の実現とその機能強化 (国 頭)	①学校と地域が連携・協働する「チー ム学校」の構築の在り方 ②外部の多用な専門人材と連携し、 チームとしての組織力を高める学 校マネジメントの在り方	吉村 雅也 (義務教育課 義務教育指導班 班長)	具志堅勝司 (東江中学校)	比嘉 克章 (伊豆味中学校) 金城 健一 (久辺中学校) 新垣 博文 (国頭中学校)

15 分科会の編成

小学校部会 (◎提案者)

第1分科会「経営ビジョン」20名

共同研究者：金城 均 (中頭教育事務所 指導班長)

新垣 郁代 (大宜味小)	仲宗根 勝也 (名護小)	大城 豊 (高江小)
◎島袋 ゆかり (瀬底小)	加納 貢 (天願小)	伊良波 直子 (あげな小)
稲福 盛也 (田場小)	銘 苺 豊 (兼原小)	大里 元児 (中原小)
城間 修司 (赤道小)	横田 恵 (川崎小)	吉野 淳 (泊小)
喜久川 洋 (若狭小)	松島 良規 (那覇小)	平良 淳 (豊崎小)
嶺井 靖之 (馬天小)	奥平 美智子 (高嶺小)	天久 康 (南小)
神谷 貴子 (明石小)	仲皿 利治 (野底小)	

第2分科会「組織・運営」「評価・改善」21名

共同研究者：上田 達大 (宮古教育事務所 指導班長)

平良 智 (有銘小)	玉城 武利 (稲田小)	安慶田 正人 (金武小)
上江洲 卓越 (来小)	宮里 満男 (北美小)	伊波 みどり (美里小)
仲村 恵子 (美原小)	長尾 順子 (宮里小)	大村 朝永 (普天間第二小)
天願 直光 (志真志小)	宮里 晋 (牧港小)	奥間 千賀子 (当山小)
◎前田 真利 (浦添小)	中山 盛也 (浦城小)	金城 勝己 (港川小)
賀数 哲也 (西崎小)	赤嶺 智郎 (とよみ小)	津嘉山 博好 (真壁小)
前川 和昭 (福嶺小)	磯部 大輔 (石垣小)	金城 一石 (大本小)

第3分科会「知性・創造性」23名

共同研究者：江谷 一 (義務教育課 主任指導主事)

仲村 章吾 (奥小)	大城 勝 (羽地小)	上間 享 (久辺小)
松田 和美 (松田小)	◎渡久地 裕子 (諸見小)	松田 忠 (島袋小)
永川 幸徳 (コザ小)	森山 涼子 (山内小)	上門 健作 (中の町小)
金子 雅之 (喜名小)	金城 光明 (城東小)	石川 博基 (城北小)
仲地 千佳 (城西小)	安谷屋 正史 (城南小)	宮平 和志 (大名小)
砂川 深雪 (石嶺小)	田山 宗則 (大里南小)	黒島 佐和子 (喜屋武小)
上原 義仁 (ゆたか小)	當間 朝成 (伊良波小)	下地 辰彦 (東小)
長遠 順二 (白浜小)	真喜志 達哉 (上原小)	

第4分科会「豊かな人間性」「健やかな体」20名

共同研究者：前川 恒久 (国頭教育事務所 主任指導主事)

豊里 寿 (奥間小)	米 嵩 睦子 (漢那小)	大城 健 (伊平屋小)
幸喜 徹 (与那城小)	兼島 栄 (平敷屋小)	新垣 桂 (勝連小)
新城 剛 (南原小)	平田 治子 (高江洲小)	水流 伸夫 (具志川小)
浦崎 博美 (壺屋小)	石垣 史昭 (神原小)	武富 剛 (天妃小)
島袋 優 (開南小)	川満 恵昌 (光洋小)	◎佐久本 広志 (豊見城小)
竹下 晴康 (翔南小)	宮里 秀樹 (与那原小)	根間 正人 (城辺小)
渡口 里夏 (古見小)	石垣 永一 (大原小)	

(◎提案者)

第5分科会「研究・研修」25名

共同研究者：大浜 寛 (中頭教育事務所 主任指導主事)

大田 出(安波小)	佐藤 繁(辺土名小)	渡口 美智代(天底小)
小波津 京子(伊江小)	◎松尾 剛(泡瀬小)	長間 清人(比屋根小)
上原 秀樹(室川小)	徳村 恵子(美東小)	平良 その子(高原小)
松堂 直美(安慶田小)	伊志嶺 清(垣花小)	糸満 裕(小禄小)
上原 妙子(高良小)	平良 健治(宇栄原小)	儀間 実子(金城小)
佐久田 悟(小禄南小)	町田 祐治(さつき小)	天久 美千代(船越小)
城田 由勝(白川小)	金城 光吉(糸満小)	大城 直也(玉城小)
友利 直喜(久松小)	佐久本 聡(平良第一小)	黒島 善一(新川小)
池田 幸作(平真小)		

第6分科会「リーダー育成」25名

共同研究者：宮良 健 (八重山教育事務所 指導班長)

山川 幸宏(中川小)	比嘉 悟(大宮小)	鎌田 登志男(伊是名小)
宮城 紀士(はごろも小)	根路銘 国斗(普天間小)	山城 亨(大山小)
玉村 かおり(大謝名小)	名護 千賀子(賀数小)	甲斐 達二(宜野湾小)
上原 毅(長田小)	野原 洋子(仲里小)	山里 昌樹(美崎小)
古賀 義之(久米島小)	上間 輝代(比屋定小)	新垣 忍(大岳小)
野原 勉(清水小)	桑江 常勝(長嶺小)	與那嶺 靖(南風原小)
上原 千秋(上田小)	上江洲 学(糸満南小)	砂川 修(北小)
村由 博勝(狩俣小)	◎仲地 秀将(八島小)	真玉橋 真由美(伊野田小)
大浜 讓(登野城小)		

第7分科会「学校安全」「危機対応」25名

共同研究者：太田 寛 (那覇教育事務所 主任指導主事)

屋宜 健(真喜屋小)	宮城 敬(大北小)	崎山 和史(宜野座小)
新垣 剛志(中城南小)	玉城 有(中城南小)	松川 邦昭(坂田小)
宮城 卓司(西原東小)	與座 衛(西原南小)	大庭 真由美(西原小)
與座 里未(北中：島袋小)	石川 博久(仲西小)	内田 篤(神森小)
田島 正敏(宮城小)	伊波 竜子(沢岷小)	新川 美紀(前田小)
棚原 歩(内間小)	平良 全(潮平小)	慶田盛 元(東風平小)
瑞慶覧 長洋(津嘉山小)	大城 仁美(具志頭小)	花城 修(鏡原小)
松本 尚(北小)	與那覇 修(下地小)	比嘉 真弓(真喜良小)
大浜 公三枝(吉原小)		

第8分科会「社会形成能力」22名

共同研究者：比嘉 幹男 (国頭教育事務所 主任指導主事)

上間 久仁(兼次小)	屋良 篤(今帰仁小)	島袋 洋(嘉芸小)
平良好 光(嘉手納小)	宮城 信夫(渡慶次小)	稲嶺 盛久(読谷小)
中山 幸浩(古堅小)	新川 健次(古堅南小)	稲嶺 盛幸(屋良小)
仲間 一史(古蔵小)	宮里 寧(上間小)	金城 和也(仲井真小)
知念 澄男(真地小)	具志 直哉(座安小)	平良 正哉(大里北小)
大村 朝彦(阿波連小)	◎新垣 典彦(与那原東小)	与那覇 淳(西辺小)
砂川 義治(西城小)	友寄 兼秀(比川小)	石川 恵優(久部良小)
島袋 篤(与那国小)		

(◎提案者)

第9分科会「自立と共生」「連携・接続」18名 共同研究者：勢理客貴之（島尻教育事務所 主任指導主事）

田 仲 浩 美(安 田 小)	赤 松 啓 介(屋 部 小)	伊 波 勉(瀬 喜 田 小)
野 原 真由美(伊 波 小)	佐次田 直 人(宮 森 小)	渡慶次 安 弘(安 富 祖 小)
多和田 一 美(恩 納 小)	長 嶺 浩 也(仲 泊 小)	山 内 久 江(山 田 小)
◎工 藤 直 哉(識 名 小)	徳 門 敦 子(真 和 志 小)	崎 山 嗣一郎(与 儀 小)
大 田 佳世子(城 岳 小)	島 袋 成 良(北 丘 小)	仲 村 保(百 名 小)
下 地 操(上 野 小)	松 尾 望(白 保 小)	石 田 美喜子(川 原 小)

第10分科会「学力向上推進」25名

共同研究者：上里 亮（那覇教育事務所 主任指導主事）

◎上 間 久(東 江 小)	岸 本 五穂子(安 和 小)	赤 嶺 美奈子(西 小)
島 川 直 樹(本 部 小)	新 城 雅 文(城 前 小)	根 神 淳 子(北 谷 小)
桑 江 常 健(北 玉 小)	山 城 勝 美(浜 川 小)	知 念 哲 也(北谷第二小)
崎 濱 陽 子(北 中 城 小)	和 智 重 徳(津 波 小)	赤 嶺 栄 達(安 謝 小)
福 本 利江子(真 嘉 比 小)	吉 村 聡 子(大 道 小)	有 銘 盛 和(松 川 小)
松 岡 泰 成(松 島 小)	又 吉 元 晃(曙 小)	宮 國 義 人(銘 苅 小)
宮 里 寿 子(天 久 小)	前 城 光 告(佐 敷 小)	徳 元 清 政(新 城 小)
西 里 優 子(米 須 小)	與 座 篤(多 良 間 小)	仲 皿 涼 子(大 浜 小)
東 由美子(宮 良 小)		

中学校部会 (◎提案者)

第1分科会「教育課程」23名

共同研究者：普天間英明 (中頭教育事務所 主任指導主事)

渡具知 久 浩(羽 地 中)	平 田 修(金 武 中)	大 田 守 利(伊平屋中)
盛小根 完(与 勝 中)	與志平 洋 子(与勝第二中)	田 場 勝(津 堅 中)
松 堂 弘 政(高江洲中)	仲 村 美恵子(彩 橋 中)	照 屋 心一郎(北中城中)
金 城 孝 子(浦 添 中)	平 良 亮(仲 西 中)	東 江 功 子(神 森 中)
相 澤 敬 二(港 川 中)	神 谷 加代子(浦 西 中)	金 丸 利 康(栗 国 中)
上 原 仁(佐 敷 中)	伊 井 秀 治(伊良波中)	宮 里 豊(西 崎 中)
垣 花 正 人(多良間中)	與世山 操(黒 島 中)	◎美 差 淳 司(小 浜 中)
下 地 和 美(竹 富 中)	仲 地 みゆき(西 表 中)	

第2分科会「確かな学力」26名

共同研究者：神山 吉明 (国頭教育事務所 指導班長)

松 田 しずか(久 志 中)	根路銘 国 斗(名 護 中)	小 渡 克 彦(屋我地中)
渡久地 政 孝(本 部 中)	友 寄 ゆかり(西 原 中)	榮 洋 子(普天間中)
糸 数 昌(真志喜中)	吉 田 敬(西原東中)	由 博 文(宜野湾中)
玉 城 健 蔵(嘉 数 中)	照 屋 心一郎(北中城中)	鹿 川 義 晃(中 城 中)
喜屋武 浩 司(松 島 中)	上江洲 毅(松 城 中)	金 城 久 枝(真和志中)
比 嘉 真一郎(安 岡 中)	當 間 保(南風原中)	大 城 直 之(糸 満 中)
大 城 正 篤(渡嘉敷中)	◎宜 保 博 哉(潮 平 中)	平 良 真 也(座間味中)
前 泊 一 郎(狩 俣 中)	濱 川 成 共(鏡 原 中)	入嵩西 義 晴(石 垣 中)
與世山 淳(石垣第二中)	宮 良 貞 光(大 浜 中)	

第3分科会「豊かな心」「健やかな身体」22名

共同研究者：新城 高広 (那覇教育事務所 指導班長)

永 野 正 也(東 中)	仲 田 欣 五(屋 部 中)	松 本 優一郎(今帰仁中)
具志堅 博 昭(うんな中)	長 嶺 加恵美(嘉手納中)	比 嘉 達(古 堅 中)
與那覇 直 樹(読 谷 中)	與那覇 覚(小 禄 中)	比 嘉 清 喜(金 城 中)
◎仲 間 丈 二(鏡 原 中)	望 月 雄 紀(南大東中)	宮 良 安 剛(北大東中)
柳 井 倉 人(兼 城 中)	比 嘉 清(渡名喜中)	宮 城 弘 之(南 星 中)
糸 洲 修(久 高 中)	久 高 三 彦(北 中)	渡久山 英 徳(上 野 中)
入嵩西 義 幸(名 蔵 中)	嘉 良 寧(崎 枝 中)	比 嘉 正 樹(川 平 中)
中 山 盛 延(船 浮 中)		

第4分科会「自らの生き方」22名

共同研究者：副田健太郎 (島尻教育事務所 主任指導主事)

具志堅 仁 一(大宜味中)	宮 城 研 治(伊是名中)	玉 城 学(伊 江 中)
玉 城 史 江(上本部中)	◎島 袋 勝 範(あげな中)	仲宗根 政 人(伊 波 中)
山 内 ひとみ(石 川 中)	大 舛 勝 彦(具志川中)	與那嶺 剛(具志川東中)
知 念 泰 志(上 山 中)	大 城 美千代(神 原 中)	中 村 齐(那 覇 中)
山 里 崇(球 美 中)	垣 花 英 正(与那原中)	石 嶺 真 哉(阿 嘉 中)
仲 間 靖(東風平中)	宮 里 直 哉(三 和 中)	宮 國 幸 夫(平 良 中)
平 良 吉 嗣(池 間 中)	石 原 昌 英(大 原 中)	宮 城 裕 子(船 浦 中)
馬 上 晃(波照間中)		

(◎提案者)

第5分科会「学校経営」21名

共同研究者：足立 克枝 (島尻教育事務所 指導班長)

伊波 寿 光(宜野座中)	玉 寄 兼 明(野 甫 中)	新 里 勳(大 宮 中)
上 里 厚 (コザ中)	伊波 寛 仁(山 内 中)	仲 村 リリア(越 来 中)
宮 里 友 昭(北 谷 中)	玉 城 祥(桑 江 中)	仲 嶺 香 代(石 嶺 中)
比 嘉 俊 博(首 里 中)	仲 盛 康 治(城 北 中)	金 城 淳(久米島西中)
大 湾 悟(具 志 頭 中)	伊 敷 尚 也(玉 城 中)	與那覇 正 樹(長 嶺 中)
屋 良 直 子(大 里 中)	垣 花 秀 明(久 松 中)	狩 俣 典 昭(下 地 中)
東 濱 一 郎(与 那 国 中)	伊舍堂 用 右(久 部 良 中)	片 平 雅 明(鳩 間 中)

第6分科会「人材育成」23名

共同研究者：吉村 雅也 (義務教育課 義務教育指導班班長)

◎ 具志堅 勝 司(東 江 中)	新 垣 博 文(国 頭 中)	比 嘉 克 章(伊 豆 味 中)
金 城 健 一(久 辺 中)	島 田 毅(美 里 中)	田 港 朝 満(美 東 中)
與那嶺 哲(沖 繩 東 中)	與那嶺 律 子(安 慶 田 中)	前 幸 三(宮 里 中)
玉 城 健 蔵(嘉 数 中)	新 垣 康 史(石 田 中)	新 地 康 秀(古 蔵 中)
長 嶺 肇(仲 井 真 中)	松 田 孝(寄 宮 中)	志伊良 洋 子(知 念 中)
川 上 一(豊 見 城 中)	親 泊 正 幸(高 嶺 中)	大 城 圭(慶 留 間 中)
比 嘉 豊 樹(城 東 中)	友 利 和 宏(西 辺 中)	當 銘 武 志(伊 原 間 中)
宮 良 篤(白 保 中)	市 原 教 孝(富 野 中)	

16 「シンポジウム」「記念講演」テーマ一覧

年 度	シ ン ポ ジ ウ ム	記 念 講 演
昭和60年度 島尻大会	「学校教育に期待すること」 コーディネーター 提 言 者 儀間朝善 (県学校指導主事) 山里孝子 (元豊見城中PTA副会長) 金城弘征 (大宝証券社長) 石川清治 (琉球大学教授)	「沖縄における国際交流と沖縄国際センターの役割」 沖縄国際センター所長 小 澤 大 二
昭和61年度 小学校 単独開催 (全九中沖縄大会のため)	「学校教育に望むこと」 コーディネーター 提 言 者 新垣清徳 (義務教育課指導主事) 内田忠平 (国立沖縄青年の家所長) 宮城 豊 (県経営者協会副会長) 高良ミチ子 (前那覇市PTA連合会副会長)	「野外活動から学ぶもの」 琉球大学名誉教授 池 原 貞 雄
昭和62年度 中頭大会	「今 学校教育に望むこと」 コーディネーター 提 言 者 大樹敏彦 (義務教育課課長補佐) 島袋 哲 (琉球大学教授) 稲嶺恵一 (琉球石友株式会社社長) 島袋美佐子 (沖縄市社会教育委員)	「那覇 ワシントン ロンドン」 NHK沖縄放送局長 小八重 順一郎
昭和63年度 国頭大会	「学力向上について考える」 コーディネーター 提 言 者 金城龍生 (義務教育課課長補佐) 屋田直勝 (沖縄県PTA連合会長) 玉城勝郎 (義務教育課主任指導主事) 仲田善明 (本部小学校長)	「人間の成長について」 琉球銀行経営相談所主任調査役 吉 茂
平成元年度 宮古大会	な し	「宮古の将来を展望する」 平良市役所企画室長 砂 川 玄 徳
平成2年度 島尻大会	「学力向上対策の現状と課題」 コーディネーター 提 言 者 玉城勝郎 (義務教育課副参事) 久手堅憲仁 (高嶺中学校長) 仲田典爾 (義務教育課課長補佐) 大城恵子 (豊見城村中央公民館長)	「21世紀に向けての人づくりの協力」 沖縄国際センター所長 田 口 定 則
平成3年度 中頭大会	「生涯学習とこれからの学校教育」 コーディネーター 提 言 者 知念清雄 (社会教育課補佐) 井上講四 (琉大助教授) 幸地清祐 (義務教育課長) 真玉橋均 (県P代表)	「沖縄人の意識構造について」 琉球大学教授 東 江 平 之
平成4年度 小学校 単独開催 (全日中沖縄大会のため)	「国際化時代と沖縄の教育」 コーディネーター 提 言 者 比嘉信勝 (義務教育課主任指導主事) 宜保榮次郎 (県立博物館館長) 宮城弘岩 (県工業連合会副会長) 玉城勝郎 (大宮小学校長)	「教育の国際化を考える」 放送大学沖縄ビデオ学習センター長 元 琉球大学学長 東 江 康 治
平成5年度 国頭大会 中学校 単独開催 (全連小沖縄大会のため)	「国際化時代と沖縄の教育」 コーディネーター 提 言 者 仲西昌秀 (義務教育課副参事) 島本 巖 (前沖縄県立図書館長) 當間一朗 (沖縄県立図書館資料編集室主幹) 奥平 一 (浦添市立沢岬小学校)	「新時代に求められる人間像」 琉球大学教授 比 嘉 照 夫
平成6年度 八重山大会	「郷土文化と学校教育」 コーディネーター 提 言 者 下地節子 (義務教育課副参事) 崎山 直 (石垣市史誌編集委員) 石垣博幸 (市民会館長) 山内盛春 (久茂地小学校長)	「沖縄県経済の展望と人づくり」 沖縄電力取締役副社長 仲井真 弘 多
平成7年度 那覇大会	「思いやりとひろい心をもつ人間の育成」 コーディネーター 提 言 者 比嘉裕起 (義務教育課長補佐) 渡久地政吉 (那覇市立真地小学校長) 玉城朋彦 (琉球放送アナウンサー) 鈴木和雄 (那覇少年鑑別所長)	「国際化時代における小・中学校の在り方」 国際協力事業団企画部長 小野田 展 丈
平成8年度 島尻大会	「21世紀をたくましく『生きる力』の育成」 コーディネーター 提 言 者 伊佐常正 (那覇市教委学務課長) 浦崎修子 (沖縄県人事委員会委員) 新里里春 (琉球大学教育学部教授) 宮城弘岩 (ひろいわ学校教授)	「人間として生きる力を育む」 — 学校経営の改善 — 財団法人教育調査研究所理事長 (財)教科書研究センター副理事長 奥 田 眞 丈

年 度	シンポジウム	記念講演
平成9年度 中頭大会	「国際化時代に期待される人材の育成」 コーディネーター 提 言 者 金城三和 (義務教育課副参事) 黒島義茂 (拓南キャピタル代表取締役社長) 仲地 勇 (伊良波中学校長) 仲地 清 (名桜大学国際学部助教授)	「琉球・アジア交流史とその教訓」 琉球大学教授 高 良 倉 吉
平成10年度 国頭大会	「これからの環境教育」 コーディネーター 提 言 者 比嘉信勝 (義務教育課副参事兼課長補佐) 當間秀樹 (見文化環境部廃棄物対策) 友利哲夫 (元高校教諭) 大森 保 (琉球大学理学部教授)	「マルチメディアにおける現状について」 NTT沖縄支店副支店長 仲 本 栄 章
平成11年度 那覇大会 中学校単独 (全九小沖繩大会のため)	「完全学校週5日制とこれからの中学校教育」 コーディネーター 提 言 者 比嘉裕起 (義務教育課副参事) 遠藤庄治 (沖縄国際大学文学部教授) 幸喜徳子 (沖縄石油ガス株式会社) 高嶺朝勇 (県教育庁生涯学習振興課長)	「中学校教育の明日」 全日本中学校長会会長 安 齋 省 一
平成12年度 島尻大会	「21世紀を拓く学校教育の展望」 コーディネーター 提 言 者 古波蔵肇 (県教育庁義務教育課副参事) 芳澤 毅 (琉球大学法文学部社会学科) 教授・教育社会学 佐々木豊 (沖縄国際センター所長) 知名洋二 (沖縄県経営者協会会長)	「新しい時代が求める人材育成」 日本文化経済学院 理 事 加賀美 正 明
平成13年度 中頭大会 小学校単独 (全九中沖繩大会のため)	「基礎・基本の習得と個性を生かす教育」 コーディネーター 提 言 者 諸見里稔 (沖縄県教育庁義務教育課副参事) 又吉助好 (沖縄市教育委員会教育委員長) 高安正勝 (ベンチャー高安旬代表取締役) 大嶺實清 (沖縄県立芸術大学元教授・陶芸家)	「21世紀・新しい時代の教育の展望」 嘉手納町教育長 伊 波 勝 雄
平成14年度 国頭大会	「生きる力」をはぐくむ学びの創造 コーディネーター 提 言 者 上原敏彦 (沖縄県教育庁義務教育課課長補佐) 津留健二 (沖縄女子短期大学非常勤講師) 照屋義実 (株照正組代表取締役社長) 島袋正敏 (名護市教育委員会教育次長)	「生物学から覗いた文化現象」 生物資源利用研究所 所長 根路銘 国 昭
平成15年度 那覇大会	「組織マネジメントと校長の指導性」 コーディネーター 提 言 者 安田栄蔵 (今帰仁小学校校長) 金城三和 (前沖縄県教育庁那覇教育事務所長) 亀川 爵 (前県立高校校長 教育懇話会主幹)	「海外ウチナーンチュの現況とウチナーの心」 沖縄テレビ放送報道制作局長 前 原 信 一
平成16年度 島尻大会	「今求められる校長の指導性」 コーディネーター 提 言 者 長嶺明浩 (小禄中学校校長) 稲葉律子 (与那原町教育相談員) 照屋義実 (株照正組 代表取締役社長) 宮城能鳳 (沖縄県立芸術大学客員教授) 大城誠一 (西原町与那城汗っかき会世話人)	「IT社会の進展と沖縄」 国際電子ビジネス専門学校 校長 稲 垣 純 一
平成17年度 中頭大会	「教職員の資質向上と校長の指導性」 ～教職員評価システムを通して～ コーディネーター 提 言 者 山田 稔 (宮里小学校校長) 富村用助 (文進印刷株式会社 常務取締役) 上門清春 (沖縄大学客員教授) 吉本 勝 (仲泊小中学校校長)	「モノ作りの環境」 山 田 真 萬 (読谷山窯)
平成18年度 国頭大会	「特別支援教育の現状と今後のあり方」 コーディネーター 提 言 者 大城政之 (県立総合教育センター特殊教育課指導主事) 真謝 孝 (県立学校教育課特殊教育室主任指導主事) 識名節子 (たかえすクリニック 臨床心理士) 多和田稔 (宜野湾市立大謝名小学校校長)	「美ら海の子ら」 内 田 詮 三 (沖縄美ら海水族館 館長)
平成19年度 那覇大会 小学校単独 (全九中沖繩大会のため)	「保護者や地域に応える学校経営の在り方」 ～学校評価ガイドラインに基づいた学校経営～ コーディネーター 提 言 者 平良嘉男 (浦添市立内間小学校校長) 大城 章 (嘉手納町教育委員会学校教育課長) 長濱ミツエ (嘉手納町立嘉手納小学校) 外間香善 (前沖縄県小学校長会会長)	「ジョイント～東京と沖縄をつなぐ」 尾 関 茂 雄 (メンズセレクトショップ (WEB) Zeel ラウンジダイニングバー「西麻布 Birth」社長)
平成20年度 那覇大会 中学校単独 (全九小沖繩大会のため)	「保護者や地域の信頼に応える学校経営のあり方」 ～学校評価ガイドラインに基づいた学校経営～ コーディネーター 提 言 者 川上啓一 (宜野湾市教育委員会学校教育部長) 大城 章 (嘉手納町教育委員会学校教育課長) 大城茂一 (嘉手納町立嘉手納中学校長) 久保田暁 (学校評価委員 (文部科学省)・元県校長会副会長)	「琉球歴史の謎とロマン」 亀 島 靖 (NPO沖縄芸術観光人材育成協会 理事長、浦添市教育委員会教育委員)

年 度	シンポジウム	記 念 講 演
平成21年度 島尻大会	「子どもたちの夢と希望をはぐくみ、保護者や地域の信頼に応える学校経営」 ～学習指導要領移行期の教育課程編成の工夫と学力向上対策～ コーディネーター 上地幸市（那覇市立古蔵中学校） 提 言 者 屋比久守（県教育長義務教育課主任指導主事） 玉城きみ子（那覇市立松川小学校） 神元 勲（北谷町立桑江中学校）	「出会いは宝」 株式会社仲善 代表取締役 仲 本 勝 男
平成22年度 国頭大会	な し	「私が出会ったやんばらの生き物たち」 本部町立博物館嘱託職員 本部町カルスト公園検討委員会委員長 友 利 哲 夫
平成23年度 中頭大会	な し	「みんなに無限の可能性がある」 筑波大学名誉教授 国際科学振興財団バイオ研究所所長 全日本家庭教育研究会総裁 村 上 和 雄
平成24年度 那覇大会	「適正な部活動の在り方」 コーディネーター 上地幸市（沖縄大学教授） 提 言 者 神谷良昌（県スポーツ少年団指導者協議会運営委員） 大山 正（那覇地区PTA連合会会長） 具志堅侃（県教育委員会保健体育課課長） 石川正信（うるま市立具志川東中学校長）	「人材育成と学校におけるOJT」 福岡県教育センター所長 清 田 嘉 治
平成25年度 島尻大会	な し	「琉球に上陸したジョン万次郎 一万次郎から学ぶバイオニア精神と 使命感」 糸満市教育委員会学校教育課 参事兼課長 神 谷 良 昌
平成26年度 国頭大会 小学校単独大会 (全九中沖縄大会のため)	な し	「いん石研究者への夢を追って」 神戸大学名誉教授 中 村 昇
平成27年度 国頭大会 中学校単独大会 (九小協沖縄大会のため)	な し	「地域づくりのキーワードは夢・戦 略・信念・情熱」 沖縄県地域づくりネットワーク副会長 山 城 定 雄
平成28年度 中頭大会	な し	「子どもの心が開くとき」 前岩国市教育委員会教育委員長 佐 古 利 南
平成29年度 那覇大会	な し	「『特別の教科 道徳』の先行実施と これからの学校教育」 東京学芸大学大学院教育学研究科教授 永 田 繁 雄
平成30年度 島尻大会	な し	「学習指導要領移行期における 校長の役割」 福岡教育大学教職大学院教授 脇 田 哲 郎
令和元年度 国頭大会	な し	「社会に開かれた教育課程」 「学校運営協議会・コミュニティ・スクールの実践」 広島県府中市立明郷学園学校運営協議会会長 立 石 克 昭 広島県府中市教育委員会学校教育課主幹 宮 田 幸 治 コーディネーター 名護市教育委員会 学校教育課 学校支援係長 渡 口 裕

年 度	シ ン ポ ジ ウ ム	記 念 講 演
令和2年度 中頭大会 (中止)誌上発表とする	な し	NPOエンカレッジ沖縄 理事長 坂 晴 紀
令和3年度 那覇大会 小学校単独大会 (中止)誌上発表とする	な し	NPOエンカレッジ沖縄 理事長 坂 晴 紀
令和4年度 島尻大会 (中止)誌上発表とする	な し	「国際的な視点から考える日本の教育」 文部科学省国際統括官付国際戦略 企画官国立教育政策研究所フェロー、 東京学芸大学客員教授 白 井 俊

分科会提案事項

小学校

第1分科会	先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進……………	19
第2分科会	学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに 学校教育充実を図る評価・改善の工夫……………	23
第3分科会	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント……………	27
第4分科会	豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント……………	31
第5分科会	キャリアステージに応じた資質・能力や「チーム学校」への 参画意識の向上を図る研修の推進……………	35
第6分科会	これからの学校を担うリーダーの育成……………	39
第7分科会	命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な 危機への対応（新型コロナウイルスへの対応）……………	43
第8分科会	社会形成能力を育む教育の推進……………	47
第9分科会	自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに 家庭・地域等との連携……………	51
第10分科会	新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、 校長の理念と指導性……………	55

第1分科会

研究主題

『先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進』
～未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定～

提案者 島袋 ゆかり（瀬底小学校）
地区共同研究者 仲宗根 勝也（名護小学校）
" 大城 豊（高江小学校）
" 新垣 郁代（大宜味小学校）

1 はじめに

これまで本分科会では「学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進」の主題のもと、共同研究員個々の学校の特色を生かした経営ビジョンを策定、実践を通して得た成果や課題を考察・共有してきた。

前年度の取組を踏まえ、下記の研究の視点に沿って各学校の取組を進めながら、その成果と課題を考察・共有し、研究を深めていくこととした。

2 研究の視点

- (1) 明確なビジョンの策定
- (2) 創意ある学校経営の推進

3 研究の実際

- (1) 瀬底小学校（児童58名 職員15名）

保護者・地域に開かれ共に歩む信頼され魅力ある学校づくり

本校は本部半島西方の瀬底島に位置し風光明媚な場所にある。四方を海に囲まれ美しいサンゴ礁の海を有しているため、観光客や世界中のサンゴ礁の研究者が毎年島を訪れている。

本校児童は全体的に素直で礼儀正しく、学習や各種活動に前向きに取り組む子が多い。各学年10名前後の在籍であるため、少人数ならではの人間関係の固定化等の課題はあるが、保護者や地域の学校への関心は高く、小規模校や地域の優位性を最大限に生かす学校経営に取り組んでいる。

① 明確なビジョンの策定

学校や地域の特色を生かして「保護者や地域と共に教育活動を推進する」という学校経営ビジョンの最重要テーマを職員・保護者・地域に示し、「高め合い」「協働」を実践のキーワードとし質の高い教育を目指している。

策定にあたっては、教職員等との協議を重ねてビジョンを作り上げるのが理想と考えるが、本校では校長が赴任1年目に捉えた児童・保護者・地域・教職員の実態や、学校評価等から見えてくるそれぞれ

の思いなどを踏まえて、校長自身が経営ビジョンやキーワードを策定し、学校便り等で広く示し、保護者や地域と共に教育活動を推進している。

② 創意ある学校経営の推進

ア 「地域の中の学校」という意識を全職員で共有し、保護者や地域と共に教育活動を推進する。

イ 地域の教育資源（人・物・事）を効果的に活用するとともに情報を積極的に発信する。

ウ 外部専門機関等との連携の下、瀬底島の希少性・卓越性について学習する海洋プログラムを実施し、ふるさとに誇りと愛着を持つ児童を育む。

エ 本校の魅力ある効果的な取組を継続。（運動会・学習発表会における地域の伝統芸能継承の取組、親子で夢ファイル、スロージョギング、縦割り活動等）

③ 実践の一例

保護者や地元のダイバーの協力の下、今年度で3回目となるシュノーケリング体験学習を5・6年生対象に実施した。今年度は「海洋教育パイオニアスクール」認定2年目で、5・6年生は関係専門機関との連携の下、総合的な学習の時間の中で約25時間の海洋学習（サンゴ学習）を推進している。全幼児児童による遠足（瀬底の磯歩き）とグラスカヌー体験、3・4年生のウミガメ学習、5・6年生はシュノーケリング体験をはじめ、専門家と共にサンゴ観察会を複数回実施したり、サンゴの研究者とのZoom学習等も行ってきた。

6年生はこれまでのサンゴ学習の成果をホームページ（限定閲覧）で発信するなど新たな取組もあり、環境教育、キャリア教育、ふるさと教育、ICT教育にもつながっている。また、4年生は海の体験学習を通してSDGsへの関心が深まり、海洋ゴミからプランターを製作して町役場や地域の施設へ寄贈する取組も行った。

このように、学校教育目標の実現のために、教科横断的に教育内容を全学年で検討し、人的・物的資源等を効果的に組み合わせ、カリキュラム・マネジメントを推進している。



④ 校長の関わりと今後の方向性

本校3年目であるが、保護者や地域に開かれた学びづくりの大切さを日々実感している。

地域を知るために、区長や老人会長とのつながりを大切にし、事ある毎に公民館等に足を運ぶようにしてきたが、会話の中から地域が大事にしていることを知ることができ、効果的な教育活動のヒントを得ることができた。

今年度は情報発信の方法を工夫し、学校ホームページや保護者メールを積極的に活用して学校便りを発信している。学校便りには学校経営上校長が大事にしている想いが詰まっているため、時機を逸しないよう不定期に発信している。情報発信が新たな協働体制を構築するきっかけにもなっている。

今後も、保護者や地域社会との連携・協働の重要性を職員と共有し、本校だからこそできる教育活動を積極的に取り入れながら、持続可能で魅力的な学校経営に取り組んでいきたい。

(2) 名護小学校（児童数838 職員48名）

わかりやすく全ての教育活動の指針となるビジョンの明示と学校・家庭・地域の協働体制の構築
～認め合い共に学び合う教育活動を通して～

本校は名護市街地の中心部に位置し、創立140年目を迎える伝統校で、地域の特色を生かしたコミュニティスクールの取組を推進している。近年のコロナ禍の影響で児童の安心・安全と学習の保障が課題となっており、不登校への対応とともに主体的で対話的な深い学びに向けた授業改善が学校経営の大きな鍵となっている。

そこで、学校生活や授業において、児童や教師の共通した指針となる学校ビジョンを明確に示すとともに、家庭・地域にもビジョンを共有し、互いの特色を活かし、互いに認め合い、共に学び合う教育活動を通して、本校の課題解決に迫ることを求めている。

① 明確なビジョンの策定と共有

ア 年度当初に学年主任会を行い、学校目標の位置づけとチームの在り方について協議を行い、ベクトルを一つに方法は多様に実践できるように「チーム シップス 名護小」をスローガンに策定した

イ ビジョンのベクトルに「きくコンパス」を位置づけ、教職員や児童が全ての教育活動で「聴く」「訊く」「利く」「効く」を指針となるよう定義づけた。

ウ 学校運営協議会において学校ビジョンについて協議し承認を受けた後、PTA運営委員会でも説明を行った。

エ 校長講話で2回にわたって全児童に説明し、その内容を学校だよりで全保護者に発信し共有した。

② 創意ある学校経営の推進

ア 校内研で名護小スタンダードを見直し、「きく授業」をベースに方法のスタンダードではなく、方向性のスタンダードの構築する。

イ 主体的で対話的な深い学びと「きく授業」を連動させ、校内研で具体策を考え、授業の指針とする。

ウ 日常的な互見授業ができるよう、簡易な指導案等の廃止、補充体制の整備、児童観察を主とした日常的な互見授業体制を構築する。

エ 学級経営と授業改善アドバイザーを学校独自に招聘し、全学級の授業観察とリフレクションを実施する。「きく授業」や「きく学級」つくりに向けて全校体制で推進する。

オ 家庭や地域への情報発信と情報共有を通して、コミュニティ・スクールでの「熟議」を中心とした推進体制を構築する。

カ 体育コーディネータを活用した、一校一運動を推進する。

キ インチャイルド、結一ENを活用した特別支援教育を推進する。

③ 実践の概要

ア 職員を縦割3分割にしたプロジェクトチームと学年団の横の組織体制をつくり、縦と横の連携を活用したチーム シップス 名護小を組織する。

イ 校内授業研究会の考え方や進め方を検討し、タブレットを使った授業リフレクションなどを模索中である。

ウ 中学校区と連携し、自己肯定感を高める指導・支援の工夫と実践の交流を図る。

エ 特別支援教育の支援体制の構築とインチャイルドを活用した校内研修実施し個に応じた支援

の充実を推進する。

オ 無理なくできる1校1運動として授業前の体幹トレーニングを計画中で体幹を鍛えることで授業への集中力向上をねらっている。

カ 学校運営協議会での熟議を推進し、持続的なコミュニティ・スクールの在り方を検討している。

④ 校長の関わりと今後の方向性

ア 学校ビジョンについて校内研や学校運営協議会で協議し、校長講話や通信等で児童や保護者・地域にも共有を図るとともに協働体制で推進する。

イ 経営の重点項目の具現化を図るため、学年・学級目標や教職員評価システム、学校評価を「きく」を視点に作成させ、カリキュラムマネジメントを図る。

ウ 重点実践の振り返りや学校課題に対応した講話、週案での資料提示を行い、共有化を図る。

- ・学校教材園や水田における栽培収穫活動
- (ウ) 博物館等の外部教育機関の積極的活用等

ウ 地域・学校課題への対応

- (ア) 学校登り窯復活プロジェクトの継続推進
 - ・高江区への陶工家族移住による登り窯の復活
 - ・復活した登り窯を活用した陶芸体験活動
 - ・学校教育活動としての位置づけと取組
 - ・保護者や地域の方々との体験交流の計画実施



(3) 東村立高江小学校（児童数12名 職員11名）

地域に根ざし小規模校のよさを活かした学校づくり

本校は沖縄本島北部、東村の北端に位置する山原の豊かな自然に囲まれた海拔161mの風光明媚な高台にあり、創立114年の歴史と伝統のある1区1校の極小規模校である（平成28年度に中学校が統合のため閉校）。

本校児童は、明るく素直で何事にも前向きに取り組むことができる児童が多い反面、人間関係の固定化等、少人数故の課題がある。

そこで、「地域に根ざし小規模校のよさを活かした教育活動を推進し、互いに認め学び合い、一人一人の良さや可能性を引き出し伸ばす学校づくり」を学校経営の理念とし、課題解決に向け地域の自然・環境・人材を活かした教育活動を推進している。

① 明確なビジョンの策定

- ◇極小規模校の現状と児童の実態把握
- ◇学校、地域の課題把握（保護者、地域の願い）

② 学校経営ビジョン推進の取組、課題への対応

ア 「豊かな関わり」を育む授業づくり

(ア) 授業での地域教育資源(人材)の積極的活用。

(イ) タブレット端末を活用した授業づくり

(ウ) 合同学習や村内他小学校との集合学習

- ・修学旅行
- ・水泳学習
- ・ていーだ学校等

(エ) 豊かな感性を育む読書活動

- ・一斉読書
- ・ビブリオバトル等

(オ) 集会活動における異学年交流の工夫

- ・ゆんたくタイム
- ・体育朝会等

イ 視野を広げるキャリア教育活動の取組

(ア) 地域人材や学校職員等によるキャリア講話

(イ) ものづくりや栽培活動等の多様な体験活動

- ・保護者の職業技術を活かしたモノづくり教室

(イ) 学校情報の積極的発信

- ・学校便りの高江区全世帯への配布
- ・学校HP、新聞・TV等マスメディアの活用

③ 校長の関りとの今後の方向性

本校赴任1年目、これまでの学校経営ビジョン及び教育活動を受け継ぎ今年度をスタートした。

学校評価アンケート結果や児童をはじめ保護者、地域の実態把握と理解に努め職員及び保護者児童、地域にあらゆる機会を通して学校経営ビジョンを示しながら、地域と連携した学校行事・体験学習、生活指導等を進めることによって、子どもへの教育効果や保護者地域からの学校への信頼及び存在意義も高めていけると実感している。

今後も更に本校教育に信頼と期待を寄せる保護者・地域住民、関係機関と連携し、本校だからこそできる教育活動、カリキュラム開発等にチャレンジし、持続可能で魅力的な学校経営に取り組んでいきたい。

(4) 大宜味小学校（児童137名 職員43名）

村唯一の小学校として、村民の願い・信託に応え、魅力ある学校づくりの推進
～地域・学校の特色を生かした取組について～

本校は平成28年度に統合新設された村唯一の学校である。今年度は統合から7年目となる。本校には「人材を以て資源と為す」の村是を具現化し、将来の大宜味村を担う子ども達の成長に期待する村民の願いが詰まっている。学校経営のビジョンを『ごづくり（学びづくり・仲間づくり・健康づくり・魅力ある学校づくり・地域づくり）』として掲げ、村民の願い、信託に応

える学校づくりに努めている。

① 明確なビジョンの策定

◇地域の特色を生かした取組の推進

◇視野を広げるキャリア教育活動取組の推進

② 創意ある学校経営の推進

ア 保護者・地域・関係機関との連携

保護者・地域・関係機関と連携し目標や情報の共有に努め、取組を推進していく。

イ 地域教育資源の活用

地域教材（文化・歴史・自然）の教材や地域人材の登用等、地域教育資源を活用した魅力ある学校づくりを積極的に推進していく。

ウ 情報の発信

様々な情報手段を活用し、家庭地域へ学校情報の積極的な公開に努める。

・学校便り（紙媒体）の村民全世帯（1400）への配布と児童の作文を新聞投稿する。

③ 実践の概要

ア 地域の特色を生かした取組の推進

・地域人材の授業は登用数を年間目標として設定させ、教職員評価システムの目標値と連動させた。

・3年～6年までの「総合的な学習の時間」のテーマを「大宜味村の村づくり4つのキーワード」とし年毎にそれぞれ設定【3年＝シークワサー 4年＝芭蕉布 5年＝長寿 6年＝ブナガヤ自然・文化】内容の充実・深化を図った。

イ 視野を広げるキャリア活動取組の推進

・琉球大学と連携し、大学での体験学習（講義・博物館見学・学生食堂での食育の取組）を4年生で実施。「太陽光発電、風力発電等の再生可能エネルギー」について講義を受ける。大学での体験学習の後、社会科の学習として「新聞づくり」をして学習のまとめを行う。

④ 校長の関わりと今後の方向性

豊かな自然と文化に恵まれたこの地に生まれたことを誇りに思い、自信をもって自己表現できる子に育てるためには、学校の力だけではなく地域・関係機関等との理解と協力を得て、「地域に開かれた学校づくり」を推進することが大切であると改めて感じた。今後は教師も子供も更に地域に飛び出し、地域の歴史やよさを実感し、地域に貢献する視点を育てていきたい。

ここ、大宜味村ならではの地域教育資源を生かした教育活動をキャリア教育と合わせながら積極的に推進し、学校・家庭・地域が一体となった特色ある教育を今後も展開していく。

4 成果と課題

(1) 成果

○ 校長の経営ビジョンを職員・児童・保護者・地域に明確に示し、共有することで、学校経営参画への意識付けができ、充実した取組につなげることができた。

○ 研究員4名がそれぞれの学校や地域のよさを生かし、改善することで創意ある取り組みの充実が図られた。

(2) 課題

● 地域教育資源の積極的活用と「社会に開かれた教育課程」の推進。

● 策定した学校経営ビジョンについてカリキュラムマネジメントを推進し、持続可能で魅力ある学校経営を目指していく。

5 おわりに

本分科会では、研究テーマの「先見性のある」「未来を見据えた」ビジョンとは、どのようなビジョンだろうかと問いを持ち、4校で共同して研究に取り組んだ。そして、足元もとである地域や学校の実態等を踏まえるとともに、新学習指導要領の主旨に基づくビジョンをより開かれた形で策定することが本研究主題に迫ることになると実感した。先見性のある学校経営ビジョンとは、不易の「生きる力」の育成を基盤に、現代的な教育課題や学校・地域の課題を明確に捉え、解決に迫る方向性を教育に関わる全ての人に深く理解させ、共有することが肝要で、マネジメントサイクルを活かしながら再編する必要があると考える。

第2分科会

研究主題

学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに学校教育充実を図る評価・改善の工夫

1 はじめに

社会変化の激しい現代社会では、与えられた役割を果たすだけでなく、自ら未来を切り拓いていく力こそが大切な力となってくる。

その力を育成する上で、学校教育がどのような役割を果たしていけるのか、校長はそれに対して明確なビジョンを持って取り組む必要がある。

GIGAスクール構想をはじめとする変わりゆく教育現場において、校長が明確な学校経営のビジョンを示し、教職員がそのねらいや実現に向けた具体策を理解して、校長の学校経営のビジョンを実現するための教育課程の実施や評価・改善ができる組織づくりと運営をしていく必要がある。

ここでは、学校教育の改善を図るための児童、保護者による学校評価、教職員による評価、学校評議員による評価をうけた5校の学校改善の取り組みについて取りあげ、その成果と課題を明らかにする。

2 主題設定の理由

校長は「新しく知を拓く」教育を実現するために掲げた学校経営ビジョンの実現に向け、活力ある組織・運営体制を築いて行く必要がある。その為には、学校組織を刷新し活気ある組織づくりを行うとともに、絶えずその評価・改善に取り組み、学校教育の更なる充実に向けていく必要がある。そのためには、評価をマネジメント・サイクルの重要な観点として位置づけ改善に向けた実効性のあるものとしていかなければならない。さらには教職員評価システムも踏まえつつ、自校の教職員に対する適切な指導や助言が、個々の意識改革や資質・能力の向上、学校組織全体の成長・発展につながるようになっていかなければならない。

本分科会では、校長が示す学校経営ビジョンの具現化を図るため、組織づくりと運営及び学校経営の充実を図る評価・改善の具体的方策を明らかにする。

3 研究の視点

学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくり運営並びに学校教育充実を図る評価・改善

提案者	前田 真利	(浦添小学校)
地区共同研究者	奥間 千賀子	(当山小学校)
"	飛田 恭宏	(港川小学校)
"	宮里 晋	(牧港小学校)
"	中山 盛弥	(浦城小学校)

(1) 学校経営ビジョンの基軸

- ① 教育施策の推進
- ② 学校改善の推進

(2) 学校経営ビジョンの策定指標

- ① 学校評価
 - ア 自己評価（児童・保護者・教職員）
 - イ 学校関係者評価（学校評議員）
 - ウ その他各種調査等

② 教職員評価システム

教職員一人一人の職務上の目標と学校経営目標との繋がりを明確にし、達成すべき目標を学校全体で共有し、学校組織の活性化を図る。

(3) 学校経営（組織・運営）の実際

(4) 学校評価・改善マネジメントサイクルの確立

	時期	評価指標	学校経営計画
R	12月～	学校評価②	
P	1月～	到達度調査	最終面談
D	4月～	諸調査	学校経営方針周知
C	9・10月	学校評価①評価分析	当初面談
A	10月～	学校経営ビジョンの見直し	中間面談 次年度計画① 学校経営ビジョン作成開始
R	12月～	学校評価②	
P	1月～	到達度調査	最終面談

4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

<浦添小学校> 児童数614学級数27（特支9）

(1) 学校評価等の指標より考察

- ① 地域・人材を活用した教育活動の充実
- ② 教育活動の取組実践に学年・学級差の改善
- ③ 「魅力ある学校づくり」の成果を継続・発展
- ④ 校内研修の成果を深化・発展

(2) 学校経営ビジョンの策定

- ① 教育施策の推進
 - ア GIGAスクール構想の推進
 - イ 教科等横断的カリキュラムSDGsの推進
 - ・小中連携教育の共通実践を推進
 - ウ 「コミュニティースクール」の推進

- ② 学校改善の推進
- ア 「魅力ある学校づくり」の実践
 - ・140周年を契機とした取組
 - イ 健康・安全・人権教育の充実
 - ・体力向上に向けた取組の推進
 - ・人権の日の取組の推進
 - ウ 授業力向上を図る組織的な取組
 - ・日常的な授業改善を目指し、学力向上推進と校内研究の充実を図る。
 - エ 校内OJTの推進
- (3) 教職員評価システム（人事評価制度）の活用
- ① 学級・学年経営との連動
 - ② 浦添中学校区共通実践との連動
 - ③ 校務改善・服務規律遵守
- (4) 組織・運営の工夫
- ① 校内の人材活用
 - ア 校内授業改善リーダー配置
 - イ 体育専科を配置
 - ウ 教科担任制を導入
 - エ 校務分掌の配置（適材適所）
 - ② 学校教育目標と連動した取組重点の精選
 - ア 組織運営部の取組の明確化
 - イ 組織連携
- (5) 学校経営（組織・運営）の実際
- 令和元から2年間、沖縄県教育課程研究校に指定され、新学習指導要領全面实施により教科となった小学校外国語活動と外国語活動における「主体的、対話的で深い学び」のある授業づくりと学習評価について研究を継続している。GIGAスクール構想の推進とコロナ禍の中でオンライン授業、オンライン会議を進めてきたこともあり、オンラインでの研究発表会を開催することができた。沖縄県内離島各地からの多くの参加の中、公開授業を実施し、教科等横断的な視点を入れた授業づくりや教科となった小学校外国語の評価の仕方について発信することができた。



写真1 沖縄県指定研究・ライブ配信

- (6) 校長の関わり
- ① 学校経営ビジョンの共有
 - ② 情報発信と周知
 - ア 「校長だより」で職員への周知（毎週）

- イ 「学校だより」「校長講話」等で児童・保護者・地域との情報共有や発信
- ③ 学校経営目標の具現化に向けたRPDCAサイクルを見通した指導助言

＜牧港小学校＞ 児童数480名 学級数22（特支6）

- (1) 学校評価等の指標より考察
- ① 学習規律の定着
 - ② わかる授業の構築
 - ③ 学習意欲の向上
 - ④ 自己肯定感の向上
- (2) 学校経営ビジョンの策定
- ① 教育施策の推進
 - ア 授業改善を中心に据えた学校経営の推進
 - イ 報・連・相を踏まえた迅速な初期対応
 - ウ 小中連携教育の共通実践を推進
 - ② 学校改善の推進
 - ア 学校教育活動の積極的な発信
 - イ 授業改善による学習意欲の向上
 - ウ わかる授業の構築による基礎基本の定着
- (3) 教職員評価システム（人事評価制度）の活用
- ① 業務との関連性を整理
 - ア 学力向上推進・校内研究の取組
 - イ 学級経営の取組
 - ② 港川中学校区共通実践との連動
 - ア 学習規律の徹底
 - イ 授業実践の共有
 - ウ 授業改善の視点の共有



写真2 校内授業研究会

- ③ 業務への意欲の向上と維持
 - ア 申告書作成による目標の明確化
 - イ 面談を通して職務に対する意欲向上と継続
- (4) 組織・運営の工夫
- ① 職場環境の改善
 - ア 適時学年主任会を通じた情報共有
 - イ 年休取得や休憩時間の重視
 - ウ 定期的な資料配布による職員の感化
 - ② 運営組織の構築
 - ア 課題解決に向けた組織づくり（教育相談）
 - イ 小中連携における校内の組織づくり

(5) 校長の関り

- ① 学校経営ビジョンの整理と共有
- ② 情報発信と周知
 - ア 学校だより、学校HPによる児童・保護者・地域への情報共有
 - イ 週案コメントによる経営方針等の周知

- イ 授業力向上を図る組織的な取組
 - ・校内研修の推進を図る。
 - ・他校の実践事例等の情報提供及び伝達講習

(3) 組織・運営の工夫

- ① 校内OJTの充実

(4) 校長の関わり

- ① 学校経営ビジョンの共有
 - 一校一運動として「朝のスポーツ活動の日」を位置付け、仲間と共に主体的に運動に親しむ児童の育成を目指している。
- ② 情報発信と周知
 - ア 「学校経営だより」で職員への周知（毎週）
 - イ 「学校だより」等で保護者への情報共有

<当山小学校> 児童数992名 学級数30（特支12）

(1) 学校評価等の指標より考察

- ① 自己肯定感・学び育ちの実感の向上
- ② 学びに向かう集団づくりの充実
- ③ 質的授業改善の推進
- ④ 学習を支える力（学習規律）の定着

(2) 学校経営ビジョンの策定

① 教育施策の推進

体育COを活用した、心身ともに健康で心豊かな児童を育む体育・スポーツ活動の推進

ア 組織的・計画的カリキュラムマネジメント全学年全単元の「単元指導計画」を作成し「体育学習の進め方」の共通理解を図る。

イ 主体的に運動に親しむ児童の育成

学習中盤の「きらりタイム」の実施（写真3）や、後半の「振り返り」（写真4）を通して、技のポイントを共有する場面や、学びを深める機会を確保する。



写真3 きらりタイム



写真4 振り返り

② 学校改善の推進

ア 「魅力ある学校づくり」の実践

iPadを活用し模範となる動画や自分達の試技を撮影して、動画を見ながら技のポイントを視覚的に捉えさせ（写真5）、学び合いの充実に繋げていた。また、遊びの場（写真6）を整備し、体力の向上に努めている。



写真5 iPadの活用



写真6 「ケンパーランド」

<港川小学校> 児童数980名 学級数29（特支11）

(1) 学校評価等の指標より考察

- ① 思いやりの心の育成
- ② 自己肯定感の育成
- ③ 学習意欲の向上
- ④ 特別な支援を必要とする児童への対応

(2) 学校経営ビジョンの策定

① 教育施策の推進

- ア 学びの質を高める授業改善の推進
- イ 服務規律の徹底と業務改善の推進
- ウ 地域との連携強化の推進

② 学校改善の推進

- ア 学校教育活動の積極的な発信
- イ 授業改善による学習意欲の向上
- ウ わかる授業の構築による基礎基本の定着

(3) 教職員評価システム（人事評価制度）の活用

① 学校重点目標と自己申告書の連動

- ア 学習指導に関すること
- イ 学級経営・校務分掌に関わること
- ウ 研究・研修に関わること

② 港川中学校区共通実践との連動

- ア 学習規律の徹底
- イ 授業実践の共有
- ウ 授業改善の視点の共有

③ 校務改善・服務規律遵守



写真7 小中連携授業研究会

(4) 組織・運営の工夫

- ① 校内の人材活用
 - ア 校内OJTの推進

イ 高学年での一部教科担任制の導入

② 運営組織の構築

ア 学年主任会を核とした学校運営

イ 小中連携における校内の組織づくり

(5) 校長の関り

① 学校経営ビジョンの整理と共有

② 情報発信と周知

ア 「校長連絡」での周知（毎週）

イ 「学校だより」を活用して児童・保護者・地域への情報共有

<浦城小学校> 児童数890名 学級数38（特支10）

(1) 学校評価等の指標より考察

① 自己肯定感と学び育ちの向上

② 学校組織、協働体制の構築

③ 授業改善を重ねた校内研修の充実

(2) 学校経営ビジョンの策定

① 教育施策の推進

ア 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

イ 法令遵守、服務規律の徹底

ウ 仲西中学校区小中連携教育の推進

② 学校改善の推進

ア OJTの組織的推進による教員の指導力・授業力の向上

イ 適切なICT機器活用の充実した取組

ウ 健康・安全教育の徹底（交通安全、感染症対策）

(3) 教職員評価システム（人事評価制度）の活用

① 学校教育目標の具現化と学年経営との連動

ア 授業改善と資質能力向上

イ 学年経営、学級経営、校務分掌の充実

② 仲西中学校区共通実践の推進

ア 小中連携教育6部会の充実

イ 揃えた教育、繋ぐ教育の実践

③ 業務への意欲向上と服務規律遵守

ア 当初面談を通じた信頼関係構築

イ 申告書による目標の明確化

ウ チェックリスト、コンプライアントシート

(4) 組織・運営の工夫

① 校内の人材活用

ア エバンジェリスト4名によるICT機器活用とデジタル教材活用の共有

イ 校内研修授業研究会の充実

ウ 経年研修の充実

② 運営組織の構築

ア 学校運営委員会を通して創意工夫ある行事精選や安全指導、生活指導等の協議

イ 推進4部会の開催（学力向上、授業力向上、道徳教育、外国語教育）



写真8 研究授業（ICT機器活用） 写真9 授業観察（リモート）

ウ 仲西中学校区6部会の情報共有

(5) 校長の関わり

① 学校経営ビジョンの共有「チーム浦城」

② 情報発信と周知

ア 「校長便り」「学校便り」を通して保護者、児童、職員へ啓発と協力依頼の周知

イ 週案コメントによる学校運営方針等の周知

ウ 児童・職員へ、心に響く校長講話

エ 終礼、会議、集会における資料配付

5 成果と課題

(1) 成果

① 学校評価・学級経営案・教職員評価の共通項目を作り、視点を連動させることで指導の徹底、共通実践が図られ学校経営方針を浸透させ、学校組織として共通実践できるようになった。

② 学校経営方針の共有と具体的行動目標をあらゆる場面で情報共有、発信すること、共通実践することで、課題改善が進み成果が現れている。

③ 年間のマネジメントサイクルに乗っ取って学校評価評価、職員面談をすることで教育計画の見直し、修正ができた。

(2) 課題

① 共生社会を実現するための学校教育の充実を目指すためには、地域・社会を視野に入れた学校経営が重要であり、学校運営協議会、コミュニティー・スクール等による学校経営を進める必要がある。

② 学校の重点事項を明確にしたカリキュラムマネジメントづくりに取り組みたい。

③ 校務改善を組織的に取り組み、児童に向き合う時間の確保につとめる。

6 おわりに

今日のウイルス感染症拡大危機状況においても今後校長を中心に児童、教職員の安全確保や学びの保障に向けた組織づくり、評価改善が重要となってくる。

第3分科会

研究主題

知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント
～「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取
り組みを通して～

提案者	渡久地 裕子	(諸見小学校)
地区共同研究者	松田 忠	(島袋小学校)
”	森山 涼子	(山内小学校)
”	永川 幸徳	(コザ小学校)
”	上門 健作	(中の町小学校)

1 はじめに

加速する情報化社会や長期化する新型コロナウイルスの影響は、人と人が「つながる」機会を激減させ、「社会のつながり」の希薄化に拍車をかけている。

子どもたちは、社会のつながりの中で学ぶことで、自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感をもつことができる。

そのため、学校現場には、社会と連携・協働した柔軟なカリキュラム・マネジメントによる教育活動の充実がますます求められている。

本研究会では、校長として、どのようにリーダーシップを発揮し、「社会に開かれた教育課程」を実現し、どのようにして新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育むかについて、各校の実践を通して探求したい。

2 主題設定の理由

- (1) 自他としっかり向き合いながら、社会の変化に柔軟に対応し、自信を持って自らの夢と希望の実現に向け、たくましく生き抜く力を育成する。
- (2) 多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化に対応し乗り越えることができる柔軟な思考力や判断力、表現力を身に付けさせる。
- (3) 新しい見方や考え方で、新たな価値の創造や、多様な意見を集約して「納得解」を導き出す事ができる資質・能力を育成する。
- (4) GIGAスクール構想による児童一人一台端末の配付で、全ての教育活動において、児童一人一人の「個別・最適な学び」を推進する。

3 研究の視点

- (1) 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を社会と共有していく。
- (2) 未来社会を創り出していく子どもたちが、社会や世界に向き合い、自らの人生を切り拓くために求められる資質・能力を明確化し、育成する。
- (3) 地域の人的・物的資源の活用や、放課後等を活用した社会教育との連携を図るなど、学校教育を社会と連携・協働しながら充実させる。

4 研究の実際

〔沖縄市立中の町小学校〕児童数412人20学級

- (1) 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組
本校は、市の南西部に位置し、上地と諸見里の校区から成っている。学校の西側には広大な米軍施設があるため、外国人も多く、国際交流などにおいてよい立地条件である。そこで、「社会に開かれた教育課程」の実現に向け全職員でベクトルを揃え、以下の実践に取り組んでいる。

① 支持的風土のある学年・学級経営

- ア I・Weメッセージ、ボイスシャワーの取組
- イ 学級活動の充実
(校内OJTにて特別活動の研修を深めた)
- ウ Q-Uアンケートを活用した児童理解
- エ 校長講話にて児童の日常の学びをスライドで紹介



全校体制によるI・We
メッセージ、ボイス
シャワーの取り組み

写真1

- ② 身に付けさせたい資質能力の育成に向けた取組
 - ア 「GIGAスクール構想」に向けた取り組み
 - ・月1回職員のICT研修の時間を設定する。
 - 操作手法、事例紹介、模擬授業の実施
 - ・日々の授業観察から、モデルとなる活用方について、校長だより等で共有化する。
 - イ 「主体的・対話的で深い学び」への授業改善
 - ・身に付けさせたい力を明確にし、意図的に児童のOutput場面を設定する。
 - ・校長講話にて、児童向けに目指す授業像の具体的な学習活動を、写真を活用し講話を行う。
 - ・一人1授業を設定し、全校体制で学び合う。
 - ウ 豊かな心の育成に向けた取組
 - ・道徳科の授業改善と評価の工夫を行う。また、道徳科コーナー等を設置し、児童相互の学びの共有化を図る。



月1回の職員のICT研修を取り入れ、一人一台端末の効果的活用を図る。

写真2

(2) 「カリキュラム・マネジメント」の充実

① 中の町小学校区教育振興会の取り組み

中の町小学校区教育振興会は、青少年が地域行事へ参加することを通して、「地域愛」を育むことや青少年の健全育成を目指した取組である。教育課程外の活動であるが、青少年の健全育成とともに児童に身に付けさせたい資質・能力の育成にもつながる活動となっている。

ア 生涯学習奨励会の開催

善行者表彰や学校長による講演会、地域懇談会を行う。

イ 地域の和づくりと健康づくりに関する行事

中の町小学校区盆踊りの夕べの開催等本会の役員は、学校運営協議会の委員にも属しており学校教育活動と密接に関連している。コロナ禍により、ここ数年は中止となっているが、できる限りの感染症予防対策を行った上での開催を検討する。

〔沖縄市立コザ小学校〕児童数210名12学級

(1) 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組

今年度も前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、教育活動の一部制限はあるものの日曜授業参観、読み聞かせ（写真1）、クラブ活動における方言指導、朝の丸付けボランティア、校外学習時の保安要員等の取組を計画通り開始することができた。



写真1 読み聞かせ

また、本校では自治会ごとに割り振った「ふれあい農園」の運営を行っている。具体的には、学校の近くにあるレストランで出た生ゴミを校内に設置したコンポストに入れて、できた肥料を「ふれあい農

園」で利用し、さらに収穫した野菜を上記レストランで食材として提供するといった取組を行っている。畑の手入れや収穫等について児童と地域の方々と協力して取り組んでいるが、今後はSDGsの一環として児童が総合学習で取り上げて学習することで活動の理解を深めたり、活動を拡大させたりしたいと考えている。

(2) 「カリキュラム・マネジメント」の充実

カリキュラム・マネジメントの3つの側面のひとつである教科断的な取組において、今年度は夏期校内研修で「本校が育成を目指す資質・能力」についてグループワークを実施し次年度のグランドデザインに位置づける。今後は、各教科の配列表をもとに「本校が育成を目指す資質・能力」と各教科等の関連付けをしていく予定である。

〔沖縄市立諸見小学校〕児童数393名20学級

(1) 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組

① キャリア教育の推進：キャリアパスポート活用
家庭との連携で、時間を意識させた「自主学习」を推進する。時間管理を意識した1日の振り返り（日記）や音読、手伝い、好きなことを推奨する。

② わかる授業づくり：「脱教師主導型の授業」
ICTの利活用で、児童の主體的な学習や学び合い、プレゼンテーション力を育成する。

③ 学校の課題解決に向けた取組

ア 沖縄市コミュニティ・スクール、PTA、六者会等の充実

イ クロムブックを活用した、コロナ時代における安心で安全な集会活動や各行事の実施

ウ リモート授業やハイブリッド授業等の実施で学級閉鎖時や病休者、不登校児童等に対する学習の保障を推進する。

エ ホームページやメール等で学校の様子を積極的に発信（各種便りもホームページで発信）

オ 専門高校との連携による「職業観」の育成
地域の専門高校との異校種間交流を通して、全ての児童に、社会とつながる意欲を育む。

※令和4年度は美里工業高校・美来工科高校の生徒によるプログラミング教室等を予定



写真1 美里工業高校の生徒によるプログラミング指導

(2) 「カリキュラム・マネジメントの充実」

① 教科担任制の充実

本校では、特別免許状を申請し、免許を授与されたALTが、令和4年度より外国語活動および外国語科の授業を単独で実施している。それにより、児童の外国語教育の充実や小学3年生以上の学級担任に「空き時間」を確保した。

② 専科教師による児童のICT活用力の向上

音楽の「デジタル教科書」活用校として、ICT活用力の高い音楽専科教師が、ICT推進員と共に小学1年生以上の学年で活用を推進している。それにより、ICT活用の学級差や学年差、学級担任の負担感が改善され、各学級および各教科における、ICTの効果的な活用につながっている。

③ 「子どもの居場所づくり事業」による連携

令和2年度より、余裕教室を活用した「沖縄市こどもの居場所事業」を実施している。それにより、放課後の居場所のない困り感のある児童の支援や、こどもの福祉増進に寄与している。

④ 単独調理場閉鎖を機に地域や社会と「つながる」

令和4年7月20日に、60年近くおいしい給食を提供し続けてきた「諸見調理場」が閉鎖した。最終日には、全児童が花道を作って調理場職員を見送り、校内の関係者のみならずPTAや卒業生、地域の方々が見守り、感動的な時間を共有。（各テレビ局・各紙が取材）

※PTAを主体に「諸見調理場レシピ本」を作成し関係者に配付する。

校長として、この共通体験が、今後、世代や地域を超えて、「人」と「人」がつながる「絆」となる事を願っている。



写真2 諸見調理場職員を花道で見送る児童

〔沖縄市立山内小学校〕児童数706名、31学級

(1) 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組

本校は、主として沖縄市型コミュニティ・スクールの推進とPTAとの連携、協働で実践している。

昨今の社会状況や子どもたちを取り巻く環境が、複雑多様化していることと、国際性のある地域性が

伴う本校は、学校・地域・家庭が連携してコミュニティ・スクールに取り組む必要性や重要性が高まってきており、それを大いに活用したいと考えている。

現在は、PTA、自治会、婦人会、老人会、シルバー人材センターと連携して、また会員が重複していることもあり、ボランティア登録が85名である。コーディネーター1名で、この活動を推進している。

【主な活動】

- ① 毎朝の登下校の見守り
- ② 草刈り等の環境整備
- ③ 学習支援で水泳指導補助、個別学習指導補助
- ④ 行事の際の補助

(2) 「カリキュラム・マネジメント」の充実

- ① 学校評価アンケートの結果と学校経営方針について説明を行う。
- ② 生活科と総合的な学習にて、地域人材、資源の活用をする。
- ③ 平和学習、サイバー犯罪防止教室等の講師に地域の人材を活用している。
- ④ 今後、更に日本語指導の必要な児童のサポートや特別支援学級のサポートに、保護者や地域の人材を活用していきたい。



写真1 草刈りボランティア



写真2 地域人材による薬物乱用防止教室

写真3 地域人材による平和学習講話
写真4 地域人材による水泳指導補助

〔沖縄市立島袋小学校〕児童数134名、9学級

(1) 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組
学校運営協議会による承認

これまで学校運営協議会での承認を得ながら5月の授業参観、読み聞かせ、クラブ活動、外部機関と連携した講話や校外学習等の取り組みを計画通り実施することができた。また、本校は、1校1自治会という地域の特性を生かした地域密着型のボランティア体制が構築されており、地域の方々に朝の交通立哨や校内の緑化整備などに積極的に参加して頂いている。放課後活動も民間協力団体エディブルと協賛して、校内の教材園で野菜を育てて収穫、調理までの過程を体験する事がこれまでに行われてきた。

更に、久保田青年会には運動会に向けてエイサーの指導に携わって頂き、将来の地域を担う人材の育成に関わってもらっている。



写真1 運動会でエイサー 写真2 校内の教材園を活用した食育

(2) 「カリキュラム・マネジメント」の充実

本校の課題である学力の基礎・基本の定着を目指して共通課題である漢字や問題の読み取りを中心に朝夕の島っ子タイム（補習・個別指導）にて全職員体制で指導に当たっている。

また、日常の授業改善に取り組みながら山内中学校区の3校（山内中・山内小・島袋小）共通の課題として特別活動、主に「話し合い活動の充実」にフォーカスし、指導主事を講師に招いての校内研修を実施して、多数決による集団決定から話し合いによる合意形成に向けての指導を進めていく。



写真3 朝夕の島っ子タイム（補習・個別指導） 写真4 朝夕の島っ子タイム（補習・個別指導）

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 沖縄市型コミュニティ・スクールを充実させる事が、「社会に開かれた教育課程」の実現につながる。
- ② 総合的な学習において、身近な環境に関する活動（コンポストの取組等）に注目させることで、児童にSDGsの意識が高まる。
- ③ 目指す「資質・能力」の明確な設定で、各教科および特別活動全体を通して、各校が目指す児童の資質・能力の育成につながる。
- ④ 各校の取組を共有する事で、多くの効果的な実践を学ぶことができ、今後の学校経営の参考になった。

(2) 課題

- ① 各教育活動で育んだ児童の資質・能力を教科横断的な活動につなげる取組を充実させる必要がある。
- ② 各校の特色ある取組や日常的な取組を、児童が中心となって地域に発信する、「情報発信力」を育成する必要がある。
- ③ 各中学校区における共通の課題について明確にし、その改善に向けて、進捗状況を定期的に確認する、小中連携教育のさらなる充実に努める。

6 おわりに

長期化するコロナ禍の影響により、各校では今年度も教育活動の制限や再検討を余儀なくされている。

そのため、「社会に開かれた教育課程」の実現が、十分に実施できているとは言えない。

しかし、ICT環境の整備や、各校における教育課程の情報共有、コミュニティ・スクールや地域との連携・協働が励みとなり、困難な時代の学校経営に、光明を見る思いである。

校長として、今後はさらに、社会全体を俯瞰し、社会と連携・協働した柔軟なカリキュラム・マネジメントを推進し、新しい時代に求められる、社会の変化に柔軟に対応できる児童を、全力で育成したい。

第4分科会

研究主題

豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント

提案者 佐久本 広 志（豊見城小学校）
 地区共同研究者 竹 下 晴 康（翔南小学校）
 ” 宮 里 秀 樹（与那原小学校）
 ” 川 満 恵 昌（光洋小学校）

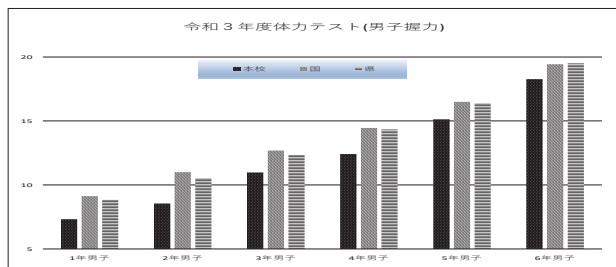
1 はじめに

本校のある豊見城市は、那覇市のベッドタウンとして高度成長期時代に人口が急増した地域であり、本校が立地する豊見城団地には当時県内外からの転入が多数あり、8,000名を超える居住者数を記録したほどであった。児童数も1,200～1,500名を推移する時代があった。20年前に村から市に昇格した後も西側の埋め立て地区に大型アウトレットモールを誘致する等、以前の農村地域から都市化が進行しつつある。市内は小学校8校、中学校3校が設置されているが、2年後に4校目の豊崎中学校が開校する予定である。

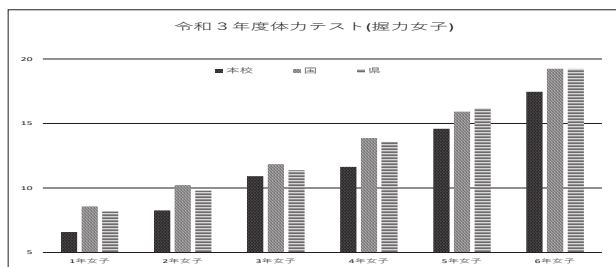
本校は豊見城団地がある住宅地に隣接しており、児童数687人（通常22学級、特別支援9学級）市内では中規模校である。

2 主題設定の理由

(1) 令和3年度体力・運動能力調査の結果から



資料① 令和3年度体力テスト（男子握力）

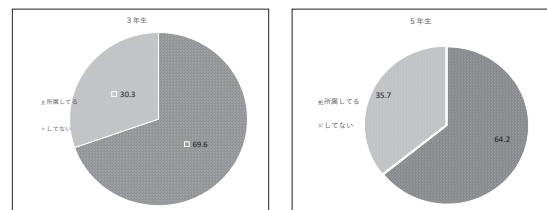


資料② 令和3年度体力テスト（女子握力）

昨年度行った体力・運動能力調査の結果から全8項目の中で長座体前屈、50m走、立ち幅跳び等で令和2年度に引き続き好水準を維持しているが、握力、反復横とびでは全国平均値、県平均値を大きく下回っている。

て、学年によってばらつきもあるが、特に握力に関しては男女とも全学年で国、県平均を下回る結果となっている。

スポーツクラブ加入率調査（令和4年）



3年生加入率

5年生加入率

スポーツクラブ参加率は3年生と5年生を調査したところ6割から7割で、野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール、バドミントン、陸上、水泳、新体操等多岐に渡っており、複数のチームに所属している児童もいる。近隣地域も熱心な指導者が多く、校長室、廊下には数々の大会優勝旗やトロフィーなどが並んでいる。数年前には本校出身の選手がプロ野球のドラフト会議で指名される等の影響を受け、ますます指導熱は盛んになっている。

ただ、スポーツクラブに所属する児童は全体的には高い運動能力があるが、項目によって数値が極端に低い点や、バランスがとれていない傾向が見られる。また、クラブに所属しない約3割から4割の児童は全体的に数値が低い傾向が見られる等、二極化傾向も見られる。

(2) 児童アンケートの結果から

同じく、3年生と5年生への調査で「運動は好きですか」というアンケートに9割の児童が「好き」と答えた。また、休日の過ごし方の中で、日中スポーツクラブ等で積極的に運動している児童と、時間を持て余して長時間テレビを視聴したり、テレビゲームやスマホなどで休日を過ごしている児童の実態が見られる。

スポーツクラブ加入率は高く、運動は好きと答えている児童が多いにも拘わらず、運動能力調査の結果に大きな偏りがあり、運動の二極化傾向も顕著である。

このような児童の実態から学校生活の中で日頃から運動に親しみ、楽しみながらバランスよく体力を高めることをねらいとして本テーマを設定した。

飼育小屋周辺にはロングスロー広場を設置した。地上から2階、3階の教室ベランダにロープを渡し、古い陸上用バトンを通して投げ上げる運動である。何度でも投げ上げることができ、互いに競い合う事で遠投力アップにつながっている。



写真② ロングスロー広場
飼育小屋周辺から教室ベランダを通して投げ上げる遊びである。

一輪車広場には大中小約30台の一輪車を保管しており、低学年から高学年まで誰でも気軽に一輪車に挑戦できるようにしている。柱を伝いながら練習できる初心者用の場所と農園の周囲をぐるっと回る上級者用コースに分け、技術に差がある児童でも互いに助けあって練習できるようにエリアを分けている。児童らは互いに声掛け合いながら練習している。



写真③ 一輪車広場
初心者用の場所と上級者用の場所を分け、誰でも挑戦しやすいようにしている。

なかよし広場は教室を囲む中庭にあり、クッション性のある素材が敷き詰められており、転んだり倒れても容易にけがをしない。ここでは縄跳びや平均台遊び、竹馬のりを低学年を中心に実施しており、教室から近いこともあって始業ギリギリまで運動に時間を使えたり、柔らかな素材の床のお陰で低学年でも思いきり動



写真④ なかよし広場
校舎の中庭にあり、教室に近い。低学年を中心に平均台や竹馬で遊んでいる。

ける等、短時間で十分な運動量を確保することができている。

1年間の体力作りの締めとして学年別持久走大会を実施している。低学年から順にスタートし、学年別に1・2年(580m) 3・4年(960m) 5・6年(1,340m)とコース設定し、授業参観日に合わせて保護者の目の前で応援を受け、最後まで勝負に全力をかける児童の姿を披露している。



写真⑤ 全校持久走大会
体力作りの締めとして全校児童学年別持久走大会を授業参観で実施している。

(3) 体育科の授業改善と指導力向上

① 授業の規律・進め方の確認

体育の授業改善と指導力の向上をねらって校内研修で授業の進め方の確認と学習規律を高める指導について資料を示した。

「豊見小っ子の体育の約束」では、体育科の学習規律について服装や行動について16の項目から示したもので「授業の進め方」では、「きらりタイム」を意識させ、互いの良さを認め合う授業構成になるよう確認した。全学年で基本的な学習の進め方を統一し、学年間、学級間で運動量や指導に差が出ないよう確認した。

豊見小っ子の体育のやくそく

- 1 体育着・赤白帽きちんとそろえる。
- 2 体育着忘れは必ず先生に理由を話す。
- 3 体育の授業には必ず水筒を持参する。
- 4 4人組の体育着をロッカーに準備しておく。
- 5 体育着の上蓋はスポコンの中に入れる。
- 6 赤白帽は体育館でもかぶる。安全のため。
- 7 教室から並んで体育館や運動場へ。黙動。
- 8 授業の前にヘアストレッチを行う。
- 9 ベルが鳴る前に授業がスタートできるように準備する。
- 10 今日がんばること(めあて)をもって授業に参加する。
- 11 友達と助け合い、みんなで授業を作る。
- 12 友達の話やプレーがうまかったらたくさんほめる。(拍手、ナイスプレー、よくできたね)
- 13 うまくいかなかったら励ます(ドンマイ、がんばろう)
- 14 けがをしないように安全に気をつけて授業をする。
- 15 集合する時は素早く行動する。
- 16 振り返りは次の授業につながるよう考える。

授業の進め方統一

- ①サーキットトレーニング
- ②整列・号令
- ③準備運動・校歌ストレッチ
- ④めあて確認
- ⑤チャレンジタイム①
- ⑥きらりタイム
- ⑦チャレンジタイム②
- ⑧振り返り・片付け

② 運動習慣の二極化への対応

地域のスポーツクラブに所属し、日頃から運動に親しんでいる児童とそうでない児童の割合が、本校では約7対3の割合である。運動能力の高い児童に体育の授業内容を合わせると3割の児童は傍観者になってしまう。やさしい運動から入ったり、ルールを工夫するなどして運動の苦手な児童も楽しめる授業内容を工夫している。

③ ICTの活用

GIGAスクール構想により一人1台のタブレット端末が授業で使用できるようになった。体育の時間は一人1台は必要ないが、グループに1台用意し、障害走のフォームの確認や走り高跳びのフォーム、踏切場所を確認したり瞬時に動作をふりかえることができ、体育の時間でもICTの需要は高まりつつある。

④ 体育授業づくりの考え方

体育の授業づくりで大切なのは教材化の工夫と場の設定の工夫である。なんとなくボール運動をさせていないか、既存のルールのままゲームをさせていないか、児童の技術力、運動能力から判断してルールを工夫したり、場の設定を考えているか、等が大切なポイントになる。

身につけさせたい力を明確にした単元構想になっているか、単元全体を見通した授業計画を持って臨まないとその場しのぎの授業になってしまう。身につけさせたい力（単元終わりの児童の姿）を明確にした単元構想を練るように確認した。

体育の授業改善を通して他の教科の教材研究、授業の考え方についてもヒントを与え、学級経営の向上につながっていけばと考えている。

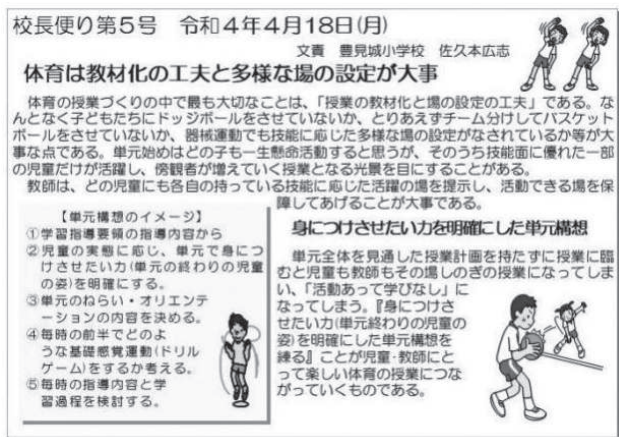
の姿が以前より多く見られるようになった。

(2) 課題

- ① 授業スタイルをそろえ、児童主体の授業展開を工夫したことで一人一人の児童の授業への参加意欲は高まったが、十分な問題解決力の向上には至っていない。今後も継続した取り組みを目指したい。
- ② コロナ禍での取り組みであり、児童の三密を回避するためには様々な行動制限があり、運動量や運動の継続の点からも十分な取り組みができたとは言えない。

6 おわりに

沖縄県は今年本土復帰50周年を迎える。学業もそうだが、スポーツ、文化、政治様々な面から他府県との大きな差を感じてきた50年であった。ただ、各方面の努力により全国レベルになった面も多く見られる。今後も九州始め全国との交流を深め、教師・児童に教育により大きな夢を与えられるような管理者として研鑽を積んでいきたい。



校長だより5号体育の授業について

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 児童は体育が好きである。教師が意識して体育の授業を工夫したり、課題に応じた場の設定を工夫することでやる気に満ちた児童の姿が見られた。
- ② 授業スタイルを統一したことで、これまで体育の授業に困っていた教師が職員室で情報交換しやすくなり、教師間のコミュニケーションも活発になった。
- ③ 今年度の児童の体カテストの結果はまだ明らかではないが、校内で活発に運動遊びに興じる児童

第5分科会

研究主題

キャリアステージに応じた資質・能力や「チーム学校」への参画意識の向上を図る研修の推進

提案者	松尾剛	(泡瀬小学校)
地区共同研究者	長間清人	(比屋根小学校)
”	松堂直美	(安慶田小学校)
”	上原秀樹	(室川小学校)
”	徳村恵子	(美東小学校)
”	平良その子	(高原小学校)

1 はじめに

社会の急激な変化に伴い、学校教育においても「持続可能な社会」を実現させるために必要な資質能力の育成や、多様な人間関係を構築していく力や習慣の育成が求められている。

本研究では、ブロック各校における「研究・研修」に係る実践の成果・課題を整理・共有するとともに教職員の資質・能力や学校経営への参画意識向上を図る実践について紹介する。

2 主題設定の理由

次代を担う子ども達の育成において、教職員一人一人が子ども達と向き合い、自己研鑽に励み自己の資質能力向上を図ることは責務である。

また、教職員が教職に対する使命感や責任感、探求心を持ち、職務やキャリアステージに応じて求められる資質能力や積極的な学校経営の参画意識をもてるような方策が必要である。

そこで、これらを高めていく研究・研修を推進していきたいと考え本主題を設定した。

3 研究の視点

- (1) キャリアステージに応じた資質・能力の向上を目指す研究・研修
- (2) 「チーム学校」への参画意識の向上を図るための実践

4 研究の実際

【泡瀬小学校（児童数690名）の取組】

(1) 学校運営と現状

本校は開校30年目。通常23、特支7学級がある。毎年2名の初任者が配置されていることで経験年数の浅い職員が多く、各主任が中心となり若い職員、臨任の職員を支えている。また、臨時的任用者も多く、キャリアステージにおいても経験年数が若い教師が多くおり、指導のあり方にも個人差があり、児童・保護者対応について課題がある。

(2) 研究・研修の概要

本校の現状を踏まえ、日常の教育活動が充実するよう以下の二つの柱で取り組んだ。

- ① キャリアステージに応じた資質・能力の向上
「学び続ける教員像」を確立するためには教員のキャリアステージに応じた資質能力の向上に向けた主体的な学びを支えていくが必要である。
教員一人ひとりがそれぞれの状況に応じて更なる向上を目指し、効果的・継続的で主体的学びに結びつけることが可能になるよう教員育成指標に基づき目標の設定を行った。
- ② 「チーム学校」への参画意識の向上
「チーム学校」の一員として自らの強み、特性、キャリアステージ等に応じて活躍し、お互いに連携・協働することが必要である。
校長として教職員同士の実践を丁寧につなげ、協働実践を続けさせ、それぞれの多様性と原動力を認めながら支援していきたいと考える。さらに子どもの成長を実感させていくような取り組みが一人一人の資質能力を伸ばすことになり、人材育成につながると考え、教員個々の間差の課題を改善していくため、全校体制のチームで関わる人材育成の取組を行うこととした。

(3) 実践事例

- ① 個別育成評価面談の実施
沖縄県教育委員会が作成した育成評価記録を活用し、マネジメントサイクルを各自で主体的に管理している。管理者は、当初・中間面談においてキャリアステージに応じた達成目標なのか、進捗状況に助言を行い、支援や必要な研修を設定する。
- ② 経年研修の示範授業と教材研究の支援
教師の経年研修として初任研だけでなく、2年目、3年目、5年目、10年目の経年研修を活用し、中堅職員による示範授業が実施され、教材研究や授業後のリフレクションを行い、管理者も指導助言を行うことでOJTを活性化した。
- ③ 若い職員が中心となった情報機器活用研修
GIGAスクール構想がスタートし、本市でも一

人一台のタブレットが配布された。情報機器の活用研修は若い職員が積極的に取り組み、その技術の中堅職員、ベテラン職員へ伝達していった。新型コロナウイルスによる休校の期間もあり、遠隔で授業を行い、授業の中で活用できる実践例を積極的に広げていった。

その中で、情報機器を活用した授業の内容の指導は中堅・ベテラン職員に助言をもらった。若手が積極的に参画することで欠席届、学校評価のアンケート、校務のデジタル、ホームページの作成等、スムーズに移行できた。

④ 組織と会議の活性化

学校教育の具現化を図るため、学校組織が効果的に機能するためにはどうしたらいいかを考え、学校改善に向けて学校組織を整理し、活性化した。会議そのものがOJTとなることからその在り方や方法を重要視して会議や研修を見直し、役割の明確化と時間の有効活用を行った。キャリアステージで指導ステージの職員に重要な校務分掌と学年主任とし、経験が浅い職員は情報教育の研究の周知や児童会・委員会活動、視聴覚教育など児童と一緒に活動する分掌に配置した。

⑤ 教師一人一人の届けたい教育

教師一人一人が月に受け持つ児童や教科の目指す姿を描いてもらう。現状とのギャップを埋めるためにどんな取り組みを行っていくのか、当初面談で校長にプレゼンをしてもらい、進捗状況を確認し、目標や手立てへの補正を助言する。職員は修正した目標に向かい、手立てを立て直しながら最終面談で自分の「届けたい想い」がどれくらい到達したのかを伝える。

一人一人が目指す姿をいつも考え、学級経営・教科経営に取り組んでいくことで「チーム学校」に参画し意識が高まったと考える。管理者がそれをいつでも近くで支援していくことでどの職員にも成長がみられ、育成評価記録書の成果にもそのことが書かれていた。

【比屋根小学校（児童数776名）の取組】

(1) 学校運営と現状

本校は開校15年目、通常25、特支8、通級2学級あり、今年度自立支援教室も設置されている。優位性としては、コミュニティスクール（以下CS）であること、オープンスペースや広場等の施設に恵まれ、体育館への動線も考慮されているので雨天時や感染等への対策も講じやすいこと等。担任・専科構成は、本務28名（採用2・基礎5・充実6・発展4・指導9・再任2）と臨任10名。毎年大学卒業後即採用の初任者が2名配置され、初めて学級担任となっ

た臨任が4名いる。

(2) 研究・研修の概要

今年度の研究主題は「評価の充実と指導法の工夫・改善～ICTの効果的な活用を通して～」である。年度当初の実態を諸検査やhyper-QUの結果をもとに把握し、授業改善やその振り返り、個の困り感に応じた支援を通して、資質・能力の向上を図っている。

職員の資質・能力の向上に関する校長の役割としては、国や県の動向、地域・本校の強み・課題を踏まえた経営ビジョンを作成し、それを具現化する組織と仕組みを整え、個に寄り添いながら指導するとともに、ワークライフバランスを見据えた配慮を行うこと。

(3) 実践事例

① 学校経営ビジョン（R4研修レポート参照）

願いや目的を叶えるために知恵の結集である学習指導要領やPPⅡ、GIGAスクール構想CSについて解説。教職員評価システムや各経営案等でマネジメントサイクルを意識づける。

② 週時程を工夫（月曜日：校内研修・OJT、金曜日：学年会）し、学びと経営の振り分け、資質・能力の向上につなげるとともに、月2回のケース会議を実施、SC、SSW、外部機関ともつながる場を設定。

③ 学校保健委員会（学校3師等）や学校運営協議会を「先を語る場」とし、CS充実させる。

④ 職員の声も生かした校務分掌一覧表を作成し、通常学級と特別支援学級で学べる機会の設定、ワークライフバランスを配慮する。

⑤ 研究主任（情報教育・評価・OJT）と学推担当（授業づくり・データの活用）の連携、経験研を支え、子どもと教師の主體的・対話的で深い学びを促す資料の提供と個別の対話。

【安慶田小学校（児童数431名）の取組】

(1) 学校運営と現状

本校は、現在通常学級14、特支7、言語1学級がある。職員同士の仲が良く、和やかな雰囲気である。しかし、教諭は5年未満の本務、臨任、指導力に個人差があるという課題がある。年齢層や経験値に幅があるので、上手くバランスをとりながら、日々、授業改善や児童理解等に努めている。

(2) 研究・研修の概要

教師経験年数の差だけでなく、学級経営や教科指導の在り方に個人差がみられる。学校教育目標を達

成するためには、校長のリーダーシップのもと個々の資質・能力の向上に力をいれていかなければならない。そこで、教師個々の特性を理解し、対策を講じていく。

(3) 実践事例

① 企画委員会における参画意識の向上

校長・教頭・教務・学年主任・特支代表で構成する企画委員会で、職員会議等の議題を協議するだけでなく、各学年の困り感や要望等を共有している。課題を明確にし、解決策を話し合うことで参画意識の向上が図られている。

② 役割を意識した部会の設定

学校課題解決を目指し、全職員を三つのプロジェクト「確かな学び・豊かな心・健やかな体」に位置付け、各主任がマネジメントしながら知恵を出し合い、職員個々の伸長に努めている。校長は各部会に参加し、情報共有と改善策について助言を行っている。

③ ミドルリーダーの育成

中堅以上の職員が中心となり、自己の研究等の成果や取り組みを「ミニ研修」として実施。お互いの交流の場にもなり、日頃の困り感を解決していく場ともなっている。校長、教頭も共に実践を行っている。

④ 校内研究の充実（授業改善）

- ・児童実態の把握（QUの分析等）
- ・児童のやる気を引き出す言語活動の工夫
- ・自己肯定感を高める授業展開での検証授業
- ・タブレット端末の有効活用

⑤ 情報発信と情報共有

「校長便り」を週1回発行し、校長の経営方針を提示しながら、課題に対しては、具体的な対策・改善を行っている。

⑥ 日常的な授業観察（認めて育てる）

毎日の校内巡視的な授業観察は、教師個々の資質・能力向上には欠かせない。授業だけでなく、児童の様子や学級経営の様子も観察し、助言を行っている。

【室川小学校（児童数187名）の取組】

(1) 学校運営と現状

本校は、若い職員も比較的多く、担当する校務を進める際に戸惑う姿も見られる。そのため、校務に関するお互いの支援や助言、研修等は重要である。他方で、小規模校故に、職員間の情報共有や協働を実践しやすいという利点を有している。このような本校の特性を踏まえながら、職員の資質能力の向上とチーム学校としての参画意識向上を通して学校経

営の充実を図りたい。

(2) 研究・研修の概要

教師の大切な資質の一つである授業力向上に向けて校内研修の充実を図る。特に指導技術に係る研修については、タブレット端末の効果的活用等を含めた取り組みを進めている。

チーム学校としての参画意識向上と協働に向けた人材育成については、担任会や職員連絡会・各種部会等を研修の場としても活用しながら、取り組みを進めている。

(3) 実践事例

校内研修では、研究主任を中心として「主体性を引き出すための技法」に重点を置いた授業研究を進めている。

共通実践の徹底及び協働体制構築のため、1～6学年による担任会を定期的実施している（写真）。



担任会の様子

この担任会では、指導上の課題解決や協働・共通実践に向けた情報共有を図ると同時に、ベテラン教師から、若手教師へ指導技術等を伝える場にもなっている。また、週1回の連絡会においては、管理職の日常の授業参観を踏まえ、特色ある授業実践等について全職員で共有化することを試みている。

ICT機器の活用による指導方法の工夫・改善については、職員間のスキルの差も大きい。そのため、お互いにその有するスキルを学び合う場として、職員間でOJTも積極的になされている。

【美東小学校（児童数862名）の取組】

(1) 学校運営と現状

職員配置の状況として、臨任が十名を超えており、各学年の担任構成に配慮が必要となる。また、本務教諭も含め、指導のあり方に個人差があり、児童・保護者対応について危機感がある。

(2) 研究・研修の概要

本校の現状を踏まえ、教育活動が充実したものと

なるように、教員個々の間差の課題を改善していくため、全校体制のチームで関わる人材育成の取組を行うこととした。

(3) 実践事例（組織力向上のための人材育成）

① 授業改善を核とした「揃える」指導の徹底

授業改善リーダーを中心とし、本校「授業スタンダード」を基にした日常的な授業改善を行っている。授業改善の視点を共有し、学校・学年・学級の指導の方向性を揃え、個々の教師の指導力向上に繋げている。

② 学年研修の時間の確保（週3日）

本校では、月・火・木曜日に学年研修の時間を設定している。日々の教育課程の量的質的管理、授業の指導のあり方・教材研究、児童理解の情報共有等、学年の諸指導について、「揃える」指導の統一と研修を行う場としている。また、先輩教師が若手教師を育成、支援する場ともなっており、若手教師が学べる場であると同時に、先輩教師が指導性を伸張できる場となるようにしている。

③ 初任者等、若手教師の育成

初任者の指導については、拠点校指導教員、校内指導教諭による育成と、校内の先輩教師全員が教科指導や児童理解のあり方の指導に関わり、育成に携わっている。その中で、先輩教師の指導性が発揮されている。

④ 核となる教職員の育成

ア 学校経営の方向性を明確化・実働化させるための五者会（校長、教頭、主幹教諭・教務主任、県事務、副園長）の開催

イ 学年主任連絡会（結会議）の設定

会議内容や組織対応の企画検討と行政研修内容の伝達等

⑤ 「校長だより」の提示（毎週の職員連絡会）

校長の経営方針・組織体制のあり方、授業改善・児童理解・児童への向き合い方等、教職員の参画意識・使命感の育成を意図している。

【高原小学校（児童数933名）の取組】

(1) 学校運営と現状

本校は、創立64年目を迎え、学級数39（特別支援学級9）の大規模校であり、力量のある教師が多く、個々の教師の更なる指導力の高まりが期待できる。

教職員（管理職を除く）は、基礎期19名・発展期16名・指導期11名と基礎期の職員が多いが、キャリアステージに応じた分掌の配置や、次のステージを意識させた分掌の配置を行った組織運営をしていることから、キャリアステージを意識した働き方や、学校経営への参画意識をもった職員も多い。

(2) 研究・研修の概要

学校経営目標の実現に向けて、学級経営、授業づくり、生徒指導力等、教師としての基礎力、情報・管理能力、学校課題解決に向けた組織推進力を焦点に、キャリアステージに応じた資質・能力と「チーム学校」への参画意識を高めていく取組。

(3) 実践事例

- ・学校経営目標・方針・めざす子供像、学校課題の共有と見える化（HP、学校便り、校長講話、校長便り、週案コメント等）
- ・目標管型評価システムを活用したキャリアステージに応じた個々の目標設定と指導助言
- ・核となる主任、ミドルリーダーへの定期的な助言
- ・学校課題改善に向けた取組内容（PDCA）の報告（家庭・地域への発信）
- ・OJTの推進（授業改善、ICT、学級経営、生徒指導、特別支援教育、キャリア教育等）
- ・授業改善ルーブリックの活用推進
- ・経年研修や授業研究（一人一授業、日常的な互観授業）等を通じた全職員への指導助言



OJTGIGA研修の様子



校内研究会の様子

5 成果と課題

- 人材育成の視点を踏まえた学年会や担任会、OJT、各種部会等の実践を通して、チーム学校への参画意識が向上した。
- 授業改善、ICTの活用、特別な支援を必要とする児童への対応等、新たな課題に積極的に対応する姿や、「チーム学校」を意識し、組織の一員として連携・分担して協働的に諸問題の解決に取り組む姿が見られるようになった。
- 研修の成果に係る具体的な評価のあり方について、研究・検討する必要がある。
- 学校経営目標に向けた参画意識をさらに高めるためのキャリアステージに応じた資質能力の観点と目指す姿の明確化。

第6分科会

研究主題

これからの学校を担うリーダーの育成
学校教育への確かな展望をもち、行動できるミドルリーダーの育成

提案者 仲地 秀将（八島小学校）

地区共同研究者 大 浜 謙（登野城小学校）

” 真玉橋 真由美（伊野田小学校）

1 はじめに

Society5.0時代を目の前にし、SDGs教育や一人一台端末のICT活用・プログラミング教育など、学校教育の担う役割は多様化している。また、新型コロナウイルスの感染拡大により、学校を取り巻く状況は劇的に変化し、日々対応を求められている。今までの経験が通用しない中、教職員一人一人の力量を高め「チーム学校」として教育力を向上させることは学校経営の重要課題である。「チーム学校」として教職員の中核となり、学校教育への確かな展望と優れた実践力・応用力を備えた行動できるミドルリーダーの育成がこれまで以上に求められている。

2 主題設定の理由

本地区のミドルリーダー育成の実態を把握するため公立小学校（33校）の校長を対象にアンケートを実施した。

ミドルリーダーの育成について	
	育成を視点とした校務分掌配置 38%
	評価面談での指導・助言、激励 37%
	三役会議等での指導・助言 20%
	その他 5%
有効な取組	学校教育の課題を俯瞰的に見て校務分掌に取り組みさせる（計画・立案）
	成功を褒め価値づけすることで自信を持たせる（承認・自信）
	次のポスト（ステージ）を意識させる（沖縄県育成指標の活用）
	意識向上を図る声かけや励ましを行う（対話・週案コメント）
	学校運営に関わる楽しさややりがいを見せる（コミュニケーション）
	全国・九州大会、中央研修へ意図的に派遣する（意識高揚）
課題	中堅教諭不足（管外交流者の増加、40代不足）
	ミドルリーダー育成に対する管理職の意識不足
	計画的・組織的な人材育成の推進
	行政・校長会等が連携したミドルリーダーの人材育成 女性ミドルリーダーの育成
必要なこと	意図的・計画的な主任級の校務分掌経験と支援
	学校経営・運営への参画意識の高揚
	働き方改革を踏まえた管理職のワークバランスの提示
	ミドルリーダーを中心とした管理職人材育成研修の実施
	行政・校長会が連携したミドルリーダー人材育成研修会の実施
	ミドルリーダー人材育成プランの確実な引き継ぎ

ほとんどの校長がミドルリーダーの育成を意識した学校経営を行い、責任ある校務分掌への配置や支援を行っている。しかし、中堅教職員の不足など、人材育成の困難さもあげられた。

本分科会では、これらの困難さを乗り越え、ミドルリーダーに必要な資質や能力を有した人材を意図的・計画的に育成する手立てについて研究していきたい。

3 研究の視点

- (1) 地区ミドルリーダー育成状況の把握
- (2) 計画的なミドルリーダー育成の工夫

4 研究の実際

- (1) 地区ミドルリーダー育成状況の把握

本地区の令和3年度本務教諭（管理職・事務職を除く）育成指標ステージ別構成、年代別構成は下図の通りである。

県育成指標ステージ別構成（管理職を除く本務教諭）

ステージ	人数	比率
採用ステージ（1年目）	20	4%
基礎ステージ（3年目前後）	167	37%
充実ステージ（8年目前後）	107	24%
発展ステージ（13年目前後）	56	12%
指導ステージ（18年目前後）	104	23%

年代別構成（管理職を除く本務教諭）

年代	人数	比率
20代	55	13%
30代	168	39%
40代	142	33%
50代	51	12%
60代（再雇用含む）	12	3%

本務教諭（管理職・事務職を除く）の平均年齢は39.6才で、20代と30代が約50%を占める。

平均経験年数は11.1年だが、経験年数10年未満の教諭が60%以上を占める。

基礎・充実ステージが突出しているが、これは他地区で初任者研修を終えた経験3～5年目の教諭が「他地区・へき地経験」のため本地区へ配置されるからである。「他地区・へき地経験」の教諭は2～5年間勤務後に生活根拠地へ戻るため、ミドルリーダーである発展ステージが極端に少なくなっている。そのため、経験の浅い教諭にリーダー的役割を担わせなければならない状況がある。しかし、「他地区・へき地経験」の教諭の中には産休や育休、慣れない離島勤務で病休をとる者もあり、学校現場では20代前半の臨時的任用教員が校務を代替するため、管理職やミドルリーダーの負担も大きくなっている。指導ステージの多くは小学校女性教諭で、ミドルリーダーとしての資質や能力を有している者も多い。しかし、多くの離島を抱える本地区では、単身で離島勤務の可能性がある管理職を家庭の事情（介護や育児）で希望しない者も多い。

このような現状から、本地区においては、採用期から基礎期・充実期・発展期・指導期の自分像を描かせ、行政や校長会が連携した長期的・意図的・計画的な人材育成研修が必要であるとする。

(2) 計画的なミドルリーダー育成の工夫

① Y小学校の取組

本校は、市街地に位置し、美崎の海を埋め立てて造成された八島町に、平成6年に登野城小学校と平真小学校から分離新設された学校である。校訓は『日々前進』、夢をもち、日々コツコツと努力を積み重ね、一步そして二歩と確実に前に向かって進んでいく姿勢を育成している。

本校の本務教諭は、管理職を除き16名、沖縄県公立学校教員等育成指標に基づいたステージ像からすると下図の通りである。

本県育成指標各ステージ	人数	比率
採用ステージ（1年目）	1	6%
基礎ステージ（3年目）前後	2	12%
充実ステージ（8年目）前後	7	44%
発展ステージ（13年目）前後	3	19%
指導ステージ（18年目）以降	3	19%

発展・指導ステージには6名の教諭がいるが、管理職を希望し、管理職試験へチャレンジしている者は一人である。また、若手、中堅、ベテラン、そし

て管理職との連携（縦のつながり）が、とても弱いことに課題がある。校長がしっかりとリーダーシップを発揮し、発展・指導ステージの教諭を中心とした校内OJTの活性化と、ミドルリーダーの育成から管理職人材育成へ繋げていく取組や、教職員一人一人が積極的に学校経営へ参画するために、「育成に視点をおいた校務分掌の配置を通して」ミドルリーダーの育成を図っていく必要があると考える。

ア A教諭の育成（教務主任）

(ア) 校務分掌での配置

教務主任は、教育計画の立案・実施・時間割の総合的調整等、教務に関する事項について教職員間の連絡調整や指導・助言に当たらなければならない。このような多岐にわたる業務を通して、積極的に学校運営へ参画し、使命感や企画力、調整力の育成を図る。

(イ) 各主任等と連携した取組を通して

学年主任との連携→学年行事への支援・助言や
日程調整等

学推担当との連携→各種調査の結果分析実施及び
学力向上の推進

研究主任との連携→機器の設定

外部との日程調整等

各主任と共同し連携した取組により、広い視野で校務を捉え積極的に学校運営へ参画する姿勢を育てる。

(ウ) 教職員評価システム面談を通して

当初面談では、学校経営目標を実現するために「学校ランドデザイン及び学力向上推進フォーカスシート」などをもとに、どのような具体的な方策を持って各主任等と連携しながら実現するのかについて助言を行う。

中間面談では、学校評価（中間）、各種調査の分析結果等を踏まえて課題を明確にし、今後の取組について支援・助言を行う。

最終面談では、自己評価の達成及び取組状況をもとに、学校運営への貢献や成長を称賛している。また、成果や課題について確認し、次年度の取組について助言を行う。

(エ) 三役会議を通して

毎週木曜日に校長、教頭、教務の三役会議を位置づけている。主に週報等を通して、その週の学校全体を見渡し、職員一人一人が計画的及び積極的に業務が遂行できるように「助言・支援に努めることを促す」ことを確認。また、前週の業務について振り返りを行い、成果や頑張った取組について「褒めて認める」ことを大切に、積極的に学校運営に参画する姿勢を育てる。

イ B教諭の育成（特別支援教育コーディネータ）

児童数の減少する中で、特別支援学級に在籍する児童は年々増えており、通常の学級に在籍しながら通級による指導を受ける児童の数も同様に増加の一途をたどっている。

学校全体での体制整備が問われるなか、特別支援教育コーディネーターを任せることにより、各学級担任と連携しながら積極的に学校運営へ参画し、学校全体を見渡した体制整備の構築に努めることにより、ミドルリーダ

ーとしての人材育成へと繋げていく。

㍑ 子ども支援「気になる子」の取組

特別な支援が必要な児童に対して、全職員で支援内容を共有し、学級担任が一人で抱え込まないように、学校全体での支援体制を構築する。取組方法として、毎月第4月曜日に全職員参加による支援会議を開催し、各学級担任から実態についての報告を行い、支援の方法について提案する。また、より良い支援の方法について協議し、年間を通して定期的に変容や成長について確認し次年度へ繋げていく。

〈支援を必要とするチェック項目（A～R）〉

A学習の遅れが目立つ B学習態度が身に付いていない
C集団活動ができない D全体への指示が通らない

〈担任が挙げる提案書等（4月）〉

名前	上記の当てはまる項目	児童の様子
石垣太郎	A.B.G.H.K.O	・かけ算九九を覚えていない ・友人とのトラブルが多い

〈経過報告（計画→実行→評価）の共有（5月～）〉

名前	計画	実行	評価
		支援・サポート内容等	変容
石垣花子	特別支援教育支援員の活用	・小さな事でも出来たことを大げさに褒めた ・書けた文字の中から「どの字がきれいか」探し花丸をつけた	・叱ることよりも褒めることを増やすことで学習に向かう姿勢が身に付いた

年間を通して「子ども支援会議」を開催し、支援の必要な児童の共有を行い、全職員が当事者意識をもって対応する学校全体とした取組体制を構築し、学校運営への参画を促す。

また、コーディネーターとして担任と関わり、通常学級と支援学級の架け橋となり、校内OJTの活性化にも繋がっている。

② T小学校の取組

本校は、明治14年12月15日に八重山島石垣南小学校として創立され、本年創立140周年を迎える八重山で最も歴史と伝統のある学校である。

平成29年4月に新校舎が完成し、素晴らしい学習環境が整ったことから、児童、教職員ともに、新たな気持ちで日々様々な活動を展開している。

本校の本務教諭は、管理職を除き27名、沖縄県公立学校教員等育成指標に基づいたステージ像からすると下図の通りである。

本県育成指標各ステージ	人数	比率
採用ステージ（1年目）	2	7%
基礎ステージ（3年目前後）	6	22%
充実ステージ（8年目前後）	7	26%
発展ステージ（13年目前後）	6	22%
指導ステージ（18年目以降）	6	22%

発展ステージ以上が半数近くを占め、経験豊富な人材が多いが将来的に管理職を希望する教諭は少ない。40代を中心に管理職を意識させた育成を図るが、地区の現状として半数は管外交渉での勤務者であり、将来的に地区にとどまる人材は少ない。

そのような事から将来的な事を考え、20代の教諭も一段階前のステップとして学校全体を意識させた視点を広げた育成も図っていく必要があると考える。

ア A教諭の育成（教務主任）

㍑ 校務分掌での配置

校長、教頭の次に学校を全般的な視野で捉え調整していく校務分掌として教務主任がある。本校においても教務主任は年間の学校行事やPTA行事の調整等、多岐に渡る業務に関わっている。この教務主任への日頃の関わりそのものが人材育成となっている。

㍑ 三役会議による学校運営への参画

週の初め月曜日に校長、教頭、教務の三役会議を位置づけている。内容は2週間を見通した細かな学校の行事、研修、会議、生徒指導及び学習面等多岐に渡る。新型コロナウイルス感染症への対応で学校行事の変更や実施の方法、これまでは問題なく実施できていた行事も常に感染症に対応した様式へと工夫が必要になった。これらの対応を校長、教頭、教務で情報を共有し対処していくことで学校全体を見渡した運営に関わっている。

(ウ) 学力向上推進担当者として

学力向上推進は沖縄県の最重要課題の一つである。A教諭は学力向上推進担当者として学校の推進計画の作成と実践の中心となる役割を果たす。学力向上推進計画の立案にあたっては、校長、教頭、教務との三者で協議を重ねながら作成していった。

本校は毎年2名の初任者が配置され、臨時的任用教諭や非常勤教諭も配置され若手も多い学校である。今年度は特に理科を初めて担当する教諭がおり、指導への不安があった。A教諭はこれまで理科を担当する事が多く、指導力があり授業研究も熱心であった。そこで、臨時的任用教諭への助言を任せることにした。指導計画や教材・教具の準備など、支援する状況が多く見られ後輩からの信頼が高まった。

イ B教諭の育成（学年主任）

(ア) 離島長期研修制度の利用

本地区の場合、離島へき地という事由から、勤務地に近い教育事務所内で長期研修を受けられる「離島長期研修制度」がある。B教諭は、この制度を利用し長期研修を受ける機会に恵まれた。長期研修を経験することで、自らの教科の専門性を高め指導に自信を持つようになった。また、関係教育機関の指導主事と関わる中で、ミドルリーダーから管理職に繋がる自分の将来像を描くようになった。

長期研修制度の活用は、将来的に管理職人材に繋げるミドルリーダー育成の手段として有効であり、積極的に活用していく事が考えられる。

(イ) 高学年主任への配置

長期研修を終えた翌年、B教諭に高学年主任としての分掌をあてることで、学年全体を経営していくという広い視野を持たせた。本人は、若手教師の指導や管理職等との連携、外部団体との調整等これまでにない業務の経験を積むことになった。また、高学年主任として、児童会担当や役員と連携を密にし、アイデアを出しながら学校全体をリードした。

学校全体の運営をする上で欠かせない企画委員会への参加は、各種教育活動の企画調整など、学校運営全般へ視野を広げる機会になり、学校運営にも積極的に関わるようになった。

② 学校運営に関わる重要な校務分掌に配置することで、広い視野で校務を捉え積極的に学校運営に参画する姿勢が育った。

③ 「任せて育てる」ことを重視することにより、積極的に学校運営へ参画する姿勢が育った。

④ ミドルリーダーとして若手教職員育成の意識が高まり、学校に活気が出た。

(2) 課題

① 本県公立学校教員育成指標に基づいたキャリアステージに応じた資質・能力の育成。

② 行政と連携したミドルリーダーの人材育成。

③ 多様な課題が山積する学校における管理職の魅力の発信と意欲の高揚。

④ 女性ミドルリーダーの積極的な育成。

6 おわりに

多くの離島・へき地を抱え地域ごとに異なる歴史や文化を持つ本地区では、教諭には地域への適応力や柔軟性も求められる。「離島・へき地経験」教諭の中には、産休や育休、慣れない離島勤務で病休をとる者もあり、管理職やミドルリーダーの負担は大きい。また、日々の業務に追われ、自分の未来像を描けていない教諭も多い。このような現状を踏まえ、校長には、教職員のキャリア教育の担い手として、各種ステージを意識した校内の人材育成や、行政や校長会と連携した長期的・意図的・計画的なミドルリーダー育成のシステムの構築を進めていきたい。

5 成果・課題

(1) 成果

①本地区教諭の育成ステージ・年代別の実数把握により、基礎期からのミドルリーダー育成の必要性が明らかになった。

第7分科会

研究主題

命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な危機への対応（新型コロナウイルスへの対応）

1 はじめに

社会の変化に対応しながら、学校が様々な要求や期待に答えていくには、基盤となる安全・安心な環境の確保が重要不可欠である。学校教育に一旦危機が発生すると、活動の停滞や中断を余儀なくされるため、未然防止の取り組みが極めて重要である。

そこで、職員の危機管理意識を高め、危機管理体制を確立するための取り組みについて、自校の実態を踏まえながら、具体的方策を明らかにする。

2 研究の視点

- (1) 危機管理を高める実践
- (2) コロナ禍に対応した学校行事等の実践

3 研究の実際

【鏡原小学校の取り組み】

本校は、令和4年に創立99周年を迎えた。平成27年には、宮原小学校が本校へ統合された経緯もある。

本校の立地は、宮古島中央部にあり、市街地から約4km、また約2kmの距離には、市役所や空港もある。もともとは農村地域で、一時は過疎化により児童数が70人台まで減少したこともあった。

近年は、団地やアパートの増加に加え、交通の便や自然環境が良いことなどで、児童数の微増傾向にある。現在の児童数は250名で、普通学級10学級、特別支援学級（知的・情緒・肢体）3学級の合わせて13学級の適正規模校である。

(1) 危機管理を高める実践

① 朝の立哨活動

一昨年の9月より、「小中連携・地域連携を推進」し、幼小中保護者の協力の下、朝の立哨活動をしている。この活動には、本校保護者OBや地域の方々（民生委員、地区防犯協会長など）も参加している。

加えて、警察署から、交通安全週間や、不審者情報があった際など、定期的な協力もある。

② 朝の検温

毎朝、児童玄関2カ所で、職員を配置し、児童の「検温ファイル」及び「健康状態」を確認している。そのような状況のなか、新型コロナウイルス感染症情報を

提案者	與那覇 修（下地小学校）
地区共同研究者	松本 尚（砂川小学校）
”	花城 修（鏡原小学校）

全職員で共有（職員室板書）し、適時、メールで保護者へ感染状況を周知している。



6年：検温カードの確認

③ 非行・安全防止教室（警察署との連携）

- *対象：4年→「サイバー犯罪防止教室」
- 5年→「薬物乱用防止教室」
- 6年→「非行防止教室」

年間指導計画に基づき、学年ごとにテーマを設定し、防犯教室を開催している。



6年：非行防止教室の様子

④ 交通安全教室（警察署との連携）

*対象：1年
年間指導計画に基づき、交通安全教室を開催している。



1年：交通安全教室の様子

⑤ 不審者対処訓練（警察署との連携）

- *対象：5・6年

年間指導計画に基づき、不審者対処訓練を実施している。その内容として、「いかのおすしの確認」、「不審者遭遇時（仮定）の対処の仕方訓練」を学んでいる。

また、ロールプレイ（一部の児童ではあるが）を通して疑似体験し、「危機対処・対応」への理解を深めている。

⑥ 右側通行・落ち着いた歩行

児童の日常生活のなかで、廊下や階段を走る実態があったため、廊下に白テープで印をつけ、安全な歩行を指導した。加えて、「ヒヤリハットの法則」を取り入れた安全指導のためのプレゼンテーションを作成（校長）し、全学級で同じ指導ができるよう配慮した。



⑦ 園児児童の送迎（保護者）

本校校区は広く、保護者等による自動車での園児

児童の送迎が多い。

その朝の送りについては、「安全面」に課題があると捉え、保護者向けに「協力依頼文」や「学校だより」を発送し、注意喚起した。

(2) コロナ禍に対応した学校行事等の実践

① 各種行事、集会等（始業式、全校集会、講話等）

コロナ感染状況が収まらない状況であったため、全校一堂に会しての集会は、すべてオンライン対応とした。

1年生を迎える会では、体育館での開催であったが、主人公の1年生を常置し、他学年の出し物を学年入れ替えで行った。平和集会放送室でオンライン



② 授業参観の延期

当初計画では、PTA総会や学級懇談会とセットにした「授業参観」を設定していたが、コロナ感染状況拡大のため延期した。感染状況が落ち着いてきた頃、開催したが、配慮したことは、一斉の参観ではなく、分散の方法をとった。（奇数学年と偶数学年に分けた）

(3) 校長の関わり・指導性

① 教職員との連携のあり方

ア 養護教諭作成の「保健日誌」で、コロナ感染等の状況、および保健室利用の情報を管理職で共有している。そのなかで、担任との連携が必要な際は、即対応する。

イ 定例の職員連絡会や会議を待たずに、緊急的な対応が必要と判断した際には、臨時的に職員集会をもち、情報共有・共通実践へ繋げる。

ウ 職員緊急連絡網も作成し、緊急時に備えている。

② 保護者との連携の在り方

ア 教頭・教務との分担で、ホームページは「校長」、保護者や職員へのメールは、「教頭・教務」としている。特に、コロナ感染状況を、教頭、または養護教諭が、適時、保護者へ周知している。

イ 「学校だより」（校長作成）でも「安全面」についての情報発信（ホームページでも）や、「保健だより」（養護教諭作成）でも「保健・安全面」

の情報（コロナや熱中症等）を発信し、保護者への理解と協力をお願いしている。

③ 関係機関等との連携の在り方

特に、コロナ状況は、日々変動が大きいのが、1学期中の学級閉鎖は、1学級で2日間であった。その際、学校医との相談を、閉鎖の判断材料とした。

【砂川小学校の取り組み】

本校は、児童数58名の小規模校であるが、近年自衛隊等の宿舍建設等、県外からの移入者も毎年のようにありまた、保護者の転勤による転校もあり、児童の入れ替わりが比較的多い学校である。

(1) 危機管理を高める実践

県道に面して正門があり、朝の登校時には車輦の往来が多い。また、通学距離が比較的に長い児童が多いため、保護者による車での登校が多い。

① 車による登校の際のきまりの設定

車輦の往来の多い県道沿いの正門での昇降を避け、周辺の交通量の少ない場所（指定）で降車し、歩道を歩いて登校するよう、保護者に依頼している。

② 交通安全教室の実施

ア 交通安全協会及び警察と連携し、幼稚園、1年生においては、「交通安全教室」を開催した。



イ 交通安全協会及び警察と連携し、3年生以上の学年において、「自転車講習会」を開催した。

また、本校は校区が広いために、3年生以上の学年に自転車通学を認めており、講習後、交通安全協会から免許状の交付により自転車通学の許可としている。



1年生：交通安全教室



自転車講習会

(2) コロナ禍に対応した学校行事等の実践

① 登校時の健康カードの提出

登校時に、健康カードを玄関で提出し、養護教諭のチェックを受ける。

② 県、市および地域の感染状況を鑑みた学校行事の運営および延期の実施

③ 休業期間中の健康チェック等

休業期間中は、毎日オンラインによる児童の健康チェックを行う。



学校だより抜粋



保健だより抜粋

④ 休業期間中の学びの保障

プリント配布およびオンライン授業を全学年毎日行った。但し、オンライン授業については、学齢に応じた時間を設定した。

⑤ 登校できない児童への対応

本人もしくは同居人の感染によって登校できない児童に対し、授業や集会等、全ての学校生活の活動をオンラインによって配信。



オンライン授業の様子

(3) 校長の関わり・指導性

① 交通安全に関する地域との連携

登校時に工事車両の通過が多いときに、通行の時間帯の変更を、保護者と連携して要請。

② 保護者に対し、メールおよび文書によるコロナに関する情報の共有と学校の方針の理解を綿密に行った。

③ 行政および関係機関との連携を密にし、必要に応じて相談を行う。

④ ICT活用に関する行政との連携及びサポートを行った。

⑤ 保護者からの感染に関する問い合わせの窓口を一つ（校長）にし、担任は、感染状況等を保護者から聞き取り、確認・報告させた。

⑥ 児童の出席停止期間等を表にまとめ、学校の感染状況等を常に把握できるようにした。

児童番号	氏名	学年	出席停止期間	理由
1	山田 太郎	3年	4/10 - 4/15	発熱
2	佐藤 花子	2年	4/12 - 4/18	発熱
3	鈴木 一郎	4年	4/15 - 4/20	発熱
4	田中 美咲	1年	4/18 - 4/22	発熱
5	高橋 健太	3年	4/20 - 4/25	発熱
6	伊藤 真由	2年	4/22 - 4/28	発熱
7	渡辺 大輔	4年	4/25 - 4/30	発熱
8	小林 千尋	1年	4/28 - 5/3	発熱
9	加藤 拓也	3年	5/1 - 5/6	発熱
10	山崎 明日香	2年	5/3 - 5/8	発熱

感染状況の把握

【下地小学校の取り組み】

本校の現在の児童数は237名で、普通学級9クラス、特別支援学級4クラスの合わせて13学級の小規模校である。学校周辺の環境は、主な通学路になる国道沿いには製糖工場があり、農繁期には大型ダンプの往来が頻繁であることや校区が広範囲に渡ることが特徴である。そのため、通学の安全確保のための学校・保護者・地域等の交通安全に対する意識は高い。

(1) 危機管理を高める実践

① 朝の子供見守り活動：PTA活動

本校の校区が広範囲に渡るため自転車通学や車による送迎が徒歩登校の割合を上回っている。そのため、児童



朝の子ども見守り活動：PTA

の登校時における交通安全確保・あいさつ運動・不審者対策を兼ねた活動を保護者の協力のもと実施している。

その他にも、下地駐在所巡査、地区民生員児童委員、地区交通支部の方々の協力を得て行われている。

② 交通少年団の活動：6年生児童

下地地区の児童生徒と地域の方の交通安全を願って交通少年団の活動が30年余り続けられている。交通少年団は、宮古交通安全協会



交通少年団の活動：6年生

の協力のもと、子供たち自身が主体となって交通ルールや交通マナーを学び、交通事故防止活動を行っている。活動は毎朝8時55分から9時10分までの15分間、6年生で交通安全活動を行っている。

この活動は子供たちが活動を通して地域のの人々に交通安全を呼びかけながら、マナーや決まりを守り思いやりのある心を持った社会人に育つことを目指している。

③ 自転車安全教室：2年生児童

本校の校区が広範囲に渡ることもあり、3年生以上で希望があれば、自転車通学を認めている。2年生の3学期に「自転車安全教室（宮古島警察署交通課）」を



自転車安全教室：2年生

実施し、交通事故に遭わないために気を付けるべきポイントを実践的に学んでいる。講習受講した2年生は、新年度4月（新3年生）に全校朝会において宮古島警察署交通課より『自転車免許証』の交付を受け、あらためて自転車通学のきまりや交通安全についての意識を高めている。

④ 自転車安全点検：PTA活動

PTA校外指導部の活動として年間2回『自転車安全点検』を実施し、児童はもとより保護者にも日常の自転車点検に関心を持ってもらうよう



自転車安全点検：PTA啓発活動にも力を入れている。

「自転車点検カード」にブレーキやタイヤの空気圧などをチェックし記入する。点検カードを基に担任が児童に点検結果を伝え、更に、保護者が点検カードを基に児童と一緒に再度点検することで安全意識の高揚・啓発に繋げている。また、下地駐在所巡査もこの点検活動に毎回参加している。

⑤ 危険箇所点検：PTA活動

児童が学校内外を問わず安全な生活を過ごすことを目的に、保護者からの危険箇所への情報提供をも

との『危険箇所点検』を実施している。危険箇所の現場点検参加者は、PTA校外指導部員を中心に、学校職員、下地駐在所巡査となっている。点検後は、各関係機関（自治会・道路管理者）へ改善依頼を行っている。



危険箇所点検：PTA

※主な危険箇所

- ・歩道に草が生い茂り歩行者を遮っている。
- ・サトウキビが歩道にはみ出て歩行者が道路に追いやられている。
- ・ガードレールが破損している。
- ・見通しの悪い通学路がある。
- ・児童が放課後多く利用する児童館前の横断歩道の設置要請など。

⑥ 安全マップづくり：4年生児童

4年生の総合的な学習の時間に地域の安全マップづくりを行っている。安全マップづくりの活動は、事故が起きやすい「危険な場所」「見通しの悪い場所」「交通量の多い場所」等を児童自身が学校周辺を探索することで発見し、その内容を地図にまとめていく活動である。ねらいは、「危険予測能力」や「危険回避能力」を身に付けることである。

⑦ サイバー犯罪防止講演会：PTA活動

SNS、オンラインゲーム、スマートフォン、パソコンを利用しての事件やそれについての相談等を具体例とし、どのようなトラブルが予想されるのか、また、それを防ぐためにはどのような注意・対策が必要なのか具体的にご講話をしていただき、「子供の問題」ではなく、「親の問題」という視点で計画・実施する。

- ・講師：ネット健康問題啓発者全国連絡協議会公式インストラクター

(2) コロナ禍に対応した学校行事等の実践

① 運動会を感染症予防対策を講じて実施

[運営方法について]

ア プログラムの精選を行い開催時間の短縮（2時間30分）

イ 参観者は密を避けるため1世帯2名

ウ 健康観察、検温、マスク着用、手指消毒保護者同士の会話の自粛等

エ PTA役員の協力（健康観察チェックシートや検温等の受付）

② 授業参観を感染症予防対策を講じて実施

[参観方法について]

ア 分割実施（2校時実施）

1校時あたり学級児童数の半分ずつ

イ 参観者は密を避けるため1世帯1名

ウ 分割実施のため、入れ替え時刻の厳守

エ 検温、マスク着用、手指消毒、上履き持参、保護者同士の会話の自粛等

③ 修学旅行を感染症予防対策を講じて実施

沖縄本島で予定していた修学旅行を、宮古島市内に変更し実施した。コロナ陽性者等、確認後における多方面での負担軽減につながった。また、テーマを「宮古島再発見」とし、私たちの住む宮古島の魅力を改めて実感できた。

(3) 校長の関わり・指導性

- ① 日常生活の中にある様々な危険についての理解、的確な判断、行動の把握と報連相の徹底に努める。
- ② 保護者や地域、関係機関と連携を深め信頼関係を構築し、学校の危機管理能力を高める。
- ③ 不審者情報等は、メーリングサービス等で児童・保護者へ周知を図る。
- ④ 保護者や地域等に、コロナ禍に対応した学校行事等の取組を的確に情報を発信し、理解と協力を得る。

4 成果と課題

(1) 成果

- ① コロナウイルス感染者発生時のマニュアル等を活用し、緊急時対応体制が整備できた。
- ② 地区感染レベルに応じて、学校行事等の見直しや工夫・改善を図り、柔軟に実施できた。
- ③ コロナウイルス感染状況による学校行事等の延期・変更等について、家庭・地域との綿密な連絡、説明により大方理解を得ることができた。
- ④ メーリングサービスを活用した保護者・地域へ発信及び連携

(2) 課題

- ① 危機管理マニュアルの社会情勢に応じた適時・適切な見直し・改善
- ② 市教育委員会との間で危機管理に関する役割分担・協力体制の確認
- ③ 状況に応じて警察・消防・医療・保健・福祉等専門機関に連絡・相談できる体制の確立
- ④ 感染症対策を踏まえた学校教育活動への保護者や地域の理解

5 おわりに

本年度も、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、行事や活動が制限され、児童は、新しい学校生活の様式の中で過ごしている。それならば、学校はできる限り創意工夫し、教育活動を実践していくことが使命である。そのため、学校が子供たち、保護者、地域の安全の核となり、これからも「家庭・地域と共にある学校」を目指し、安全教育・防災教育に全力で推進していかねばならない。

第8分科会

研究主題

社会形成能力を育む教育の推進
～社会に貢献しようとする資質・能力・態度を育む教育活動を通して～

提案者 新垣典彦（与那原東小学校）
地区共同研究者 具志直哉（座安小学校）
" 大村朝彦（阿波連小学校）
" 平良正哉（大里北小学校）

1 はじめに

私達の学校は、那覇市近郊（座安小）、本島内陸部（大里北）、東海岸（与那原東）、離島（阿波連）と多彩な環境下にある。また、児童数にも違いがあり、それぞれ地域の特色をもっている。今回は、各学校の強みとは何かを考えつつ「よりよい社会の形成に向け、主体性を持って参画し、課題解決を図る能力や態度をどのように育むか」を糸口として各学校の取組をまとめてみた。

2 主題設定の理由

社会形成能力とは、多様な他者の考え方や立場、意見を理解し、自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協働して積極的に社会に参画し、社会を形成していく力である。

具体的には、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーションスキル、チームワーク、リーダーシップ等の力を育成する必要がある。又、子供達に将来、社会や職業で必要となる資質・能力を育むためには学校で学ぶ事と社会との接続を意識させることも重要である。

昨年度は、コロナ禍の中、キャリアパスポートの活用・充実及び地域教育資源の活用に課題が残った。そこで今年度は、昨年度の課題を解決していくことに加え、社会形成能力を育む授業改善の創意工夫、ゲストティーチャーや地域資源との関わりを通じた実践等、各学校の実態に合わせた特色ある取り組みを、つなぎ合わせ、総合的に社会形成能力を育成できる方策を探ってきた。

3 研究の視点

- (1) 各学校の特色を活かした教育活動の推進
- (2) 総合的に社会形成能力を育成するための校長の関わり

4 研究の実際

「与那原東小学校（児童数680名）」

- (1) 校内研を柱とした社会形成能力の育成

「主体的に課題に向かい、学び合う児童の育成」
～数学的な見方・考え方を働かせる
数学的活動の工夫を通して～

本校の児童は、互いのよさを認め合い協働して取り組むことに課題がある。そこで、校内研では、学び合いを通じた他者理解や働きかけを含めたコミュニケーション能力等の育成を目指している。

◇共通実践事項

- ① ノート指導の充実

数学的活動を取り入れた学びの足跡が見えるよう、発達の段階に応じた学年（授業）マイノートの活用・評価・改善

- ② 表現方法の工夫

学び合いの充実のため、式や言葉、図などを活用し、自分の考えを表出させる手立て

- ③ 「振り返り」の充実

学びの過程を価値付け、次の学びに繋げるため、振り返る視点の明示や書き方等の例示

◇具体的な手立ての例

- ①-1 つまづきや見方・考え方を根拠に問題を焦点化し、教材提示の工夫をする。
- ①-2 目的に応じた問い返し、発問等で思考を広げ、深める。
- ② 学び合いの充実にプチ自力・プチペア学習を取りられる。
- ③ 2つのまとめを意識した振り返り活動を行う。
〔知識・技能〕〔見方・考え方〕

- (2) 校長としての関り

校内研修においては、ミドルリーダーである校内研主任が担当する。また、校内研部会も活発でその意思を尊重する立場をとっている。私からは「見方・考え方」とは何か。「主体的、対話的で深い学び」との関係は何か。「指導と評価の一体化」を主眼に、子供の姿を

見取る姿勢について理論研の実施をお願いした。合わせて、子供のよさや可能性についても触れ、「自己肯定感の高まり」や「学び・育ちの実感」を「組織的な関わり」で支援することが「子供の自立」を促し、本校が目指す子供像の具現化につながることを様々な場面で共有した。

(3) 成果○と課題●

- 校内研テーマ・学力向上推進などを柱に学校における諸活動のねらいと学校教育目標（目指す子供像）を結びつけることによって、コミュニケーション能力への意識の共有が図られた。
- 地域や保護者を巻き込んだ学校経営の工夫により、持続可能な環境づくりを通じた社会形成能力の育成に取り組む必要がある。

「座安小学校（児童数500名）」

(1) めざす子供像と達成のための手立て

【本校がめざす「社会形成能力」の明確化】

見出しのことを目的としたワークショップ研修を開催した。

校内研の目的は、全教職員で育成する「関わる力」を焦点化するためだ。以下、1～2位は「生徒指導部会」、3位は「学推・校内研部会」が中心となり推進している。

【本校がめざす「社会形成能力」(関わる力)】

1位：【あいさつできる子(進んで、元気よく等)】

2位：【人の話を聞くことができる子(最後まで等)】

3位：【自分の思いや考えを伝えることができる子】

成果はまだまだであるが取組が具体的になった。

【児童アンケートの結果】

1位の項目：【81% (R 3) →82% (R 4 / 7)】

2位の項目：【87% (R 3) →93% (R 4 / 7)】

3位の項目：【51% (R 3) →58% (R 4 / 7)】

【地域等の人材活用で「関わる力」の育成を目指す】

本校の地域コーディネーターの尽力もあり、4～7月で延べ121名の人材活用が実現した。特にクラブ活動にはプロのダンサー等25名が関わり、ワクワクする活動となった。



【児童が展開する座安スタンダードの授業づくり】

本校では児童が輪番で学習リーダーとして教師役を務め、児童だけで学習展開していく授業づくりを行っています。極端に言うと、教師の出番は5～10分、残りの40～35分は児童が思考し対話し協議しまとめていく時間となります。本授業の充実を通して、子ども達の聞く力、自分の考えを伝え合う力などを育てています。(本授業は「県校長会研究紀要21」に掲載されています)

(2) 校長としての関わり

【CSの運営と充実】

今年度、以下の人材を学校運営協議会員とした。

地域コーディネーター】【市商工会青年部長】	
【生徒指導等に関する有識者】	【PTA会長】
【各自治会の代表者】	現在合計7名

校長の職務の1つに学校運営協議会の運営がある。喫緊の課題は「生徒指導の充実」と「地域人材等の活用」。【生徒指導等に関する有識者】は、生徒指導主任や教育相談担当と協働して生徒指導の安定につなげている。地域人材の活用は【地域コーディネーター】が活躍している。

【主体的協働的に運営できる組織改編】

本校の3つの部会の運営方針は以下の2つである。

○各部会の長へ各部会で協議する実践事項等への決定権を与え、推進力を高める。(校長へ伺い無し)

○企画委員会の前に「拡大教務会」を開き、校長等との報連相確を図る。

本校の取組の工夫改善は、この部会の中で、主体的協働的に計画、実践されている。

(3) 成果○と課題●

- 「社会形成能力」育成への具体的取組を共有でき、地域人材等と連携した関わる力の育成
- 教職員の組織内で主体的協働的な業務遂行
- 【関わる力】を児童会主導の創意工夫の中で育めるよう取組のさらなる工夫改善
- キャリアパスポートを活用した【関わる力】の育成

「阿波連小学校（児童数14名）」

(1) 授業改善と地域資源の活用

「全児童が楽しく通える学校」にしていくために、「緊張したけど発表し認められた喜び」「友達から称賛を受けた喜び」「分かる喜び」「できなかったことができるようになった喜び」「喧嘩したけど、また仲良くな

れた喜び」が実感できる学校経営、授業づくりを目指している。

【授業改善】

- ◇人間関係形成・社会形成能力
(他者との協力・協働・コミュニケーション力)
・人と関わりながら学ぶ。対話を通して学ぶ。
- ◇自己理解・自己管理能力
(自らの感情や思考を律し、主体的に進んで学ぶ力)
・学習規律・学習に臨む姿勢・規範意識・自分の役割・自分のよさ
- ◇課題対応能力
(課題を発見し、処理・解決する能力)
・問題解決的学習「課題把握・自力解決・比較検討・まとめ」・既習事項の想起・協働学習・声かけ
- ◇キャリアプランニング能力
(様々な情報を取捨選択し、目標達成に向けて努力、計画する力)
・学習や課題解決のための計画を立て、努力する。

- ① 上記の具現化に向けて、キャリア教育における4つの基礎的・汎用的能力と日々の授業実践とは密接な関連があることを全職員に周知し、授業改善を行う。
 - ② 1・2年、3・4年、5・6年の完全複式学級で対話を大切に授業づくりに努め「ガイド学習」を取り入れ「指導過程の工夫：ずらし」を行う中で、主体的に学習に参加する態度や対話から学びを深めている。
- ※「ずらし」とは、2つの学年の指導が重ならないように教育課程を学年別にずらして実施すること。

複式授業の工夫			
【ずらし】			
2つの学年の直接指導が重ならないように指導過程をずらすこと			
	下学年	教師の動き	上学年
指導過程のずらし	課題把握		適用・発展
	課題追求・解決	↓	課題把握
	まとめ	←	課題追求・解決
	適用・発展	↑	まとめ

※「ガイド学習」とは、教師が直接指導できないときにガイド役の児童が学習を進めていくスタイル。



【地域資源の活用】

身に付けさせたい基礎的汎用的能力の重点

- ① 本校の校訓である「愛郷」にもあるように、地域に誇りと愛着を持ち、感謝する心をもつ。
 - ② 相手の目を見てしっかり話を聞くこと。
 - ③ 自分の言葉で場に合った発言ができること。(お礼や感謝の言葉)
- 身に付けさせたい力の重点(基礎的汎用的能力)を体験活動等を通して、身に付けることを目指すこと。



写真1 ハナリ島遠泳

写真2 シーカヤック教室



写真3 地域の伝統エイサ

写真4 和太鼓

- 三線○職場体験○平和学習の講話
- 避難訓練○交通安全教室や非行防止教室等

(2) 校長としての関わり

授業改善においては、日々の授業実践とキャリア教育における4つの基礎的汎用的能力は、密接に関連しており、自己肯定感の高まりや授業改善につながることを、様々な場面で全職員に伝えている。

地域資源活用においては、ねらいをしっかりと児童と共有し、振り返りまでを一連の流れで行うことを大切にしよう、職員に伝え、児童に対しては校長講話や学期終業の校長の話の中で触れている。

(3) 成果○と課題●

- キャリア教育と日々の授業との関連を確認し、校内研を進める中で、他者と関わることで基礎的汎用的能力が育まれることについて、意識の共有

を図ることができた。

- 年間を通し一貫して、身に付けさせたい基礎的汎用的能力の重点について意識を持たせること。

「大里北小学校（児童数337名）」

(1) コミュニティスクールの充実

昨年度の課題に加え、他者と協働して積極的に社会に参画し、社会を形成していく力に注目した。今年度開始したコミュニティスクールについて考えてみたい。南城市では、学校を核に地域力が高まることにより「第2次南城市総合計画」に示すまちづくりの基本方針「ひとが育つ」「ひとが活きる」「くらしの質が高まる」「地域が元気になる」「まちが整う」の将来都市像委の実現を目指している。

① コミュニティスクールの目的

市内では、学校と地域が連携・協働して、南城市全体で未来を担う子供たちの成長を支えるネットワークを形成し、地域の力を生かした学校運営を図ることにより、学校や地域が抱える課題を解決するとともに、地域を担う人材育成のため当事者意識をもって子供の成長を支えていく地域・社会総がかりによる「地域とともにある学校づくり」を目的としている。

② 本校のコミュニティスクールへの取組

校歌にも謳われ、地域のシンボリックな存在であるあまごい森の名称にちなんで、学校運営協議会は「あまごいネットワーク」と名付けた。

③ 既存組織とリンクさせる

CSの取り組みとして新たに組織を立ち上げるよりPTA等既存の組織と連携して活動を広げるほうが現実的であり、実効性も高まると考えた。

組織をシンプルに役割分担として、次の3つに構成した。すなわち、学習、安全、環境整備3つのしま（グループ）をつくり、PTAの既存の委員会はCSの3つの島のいずれかに紐づけ、連携して活動できるように確認した。

④ 学校の教育活動を支援する3つの役割を意識しながら、取り組みを検討する。

あまごいネットワークのメンバーが集う日を奇数月の15日の午後2時（本校）とし、都合のつかない場合はご遠慮なくお休みくださいとした。

必要に応じて臨時に関係する方と話し合いを持つこともあり、授業の進捗や行事の持ち方に小回りが利くような活動にしている。

(2) 校長の関わり

2カ月に一度、学校運営協議会を開催し、必要に応じて授業参観や児童の学校での様子を見ていただいている。2～3カ月先を見通して外部からの協力をいた

だきたい活動について話し合っている。例えば、遠足や校外探検にあたっての見守りや移動時の随行などの他、地域ガイドなどもお願いしている。

校内における野菜栽培や受水走水（南城市にある稲の発祥地）の体験農場での田植えや稲刈りの補助、平和学習講師、マイクロバスの運転手など多岐にわたって学校の学習活動を支えていただいている。突発的な依頼にも応えていただいております、多くの場面で児童の安全確保や学習内容の充実に役立っている。

校長から依頼して後に各学年主任から活動の詳細について説明し連携を深める。急なスケジュール変更などにも対応できるようにしている。

課題としては、学校長が人材バンクの連絡窓口担っている状態であり、学校運営協議会に連絡を担える人材の確保が望まれる。また、コロナ禍で地域の行事や児童が参加できそうな取り組みが少ない中、CSの本来の設置目標のひとつである「地域のために何ができるか」を積極的に考えていきたい。

(3) 成果○と課題●

- 地域との関りにより起爆剤となり、地域に開かれた学校としての活力が出た。
- 地域人材も学校職員も個人的な関りに温度差があり、活動の広がりが十分ではない。

5 おわりに

どの学校においても諸活動を社会形成能力の育成に向けて教職員間の意識の共有を図ることによる成果をあげている。その中で「関わる力」の育成を意識した取組を紹介したが、個々の意識の継続や温度差には課題が残る。今後も各学校の強みを生かしつつ、創意工夫を積み重ねることを通して、社会形成能力の育成に関する取組を学校や地域に広げていく必要がある。

第9分科会

研究主題

自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携
～家庭・地域等と連携し充実した教育活動を展開できる学校づくりの推進～

提案者 工藤直也（識名小学校）
地区共同研究者 崎山嗣一郎（与儀小学校）
" 大田佳世子（城岳小学校）
" 徳門敦子（真和志小学校）

1 はじめに

2020年からの新学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有し社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を重視し、その理念を前文に明示している。この理念の実現に向けて、組織的・継続的に地域と学校が連携・協働していくことが大変重要であるといえる。

2 主題設定の理由

「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念の実現に向けて、文部科学省は、具体的な取組として、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）や地域学校協働活動の一体的推進の重要性を唱え、コミュニティ・スクール（以下CS）導入については努力義務とした。沖縄県内においても各市町村においてCS導入が進められている。

那覇市では、市内全校のCS導入の具体的な動きはないが、第3次那覇市教育振興基本計画において、生涯学習を推進し、地域の教育力を向上させるまちづくりのための施策として「学校が学びや育ちの拠点となるまちをつくる」ことを打ち出している。また、平成28年度には「小学校区コミュニティ推進基本方針」を策定、「校区まちづくり協議会支援事業」を展開し小学校区におけるコミュニティを推進しており、令和4年4月には14校区で協議会が設立されている。

それぞれの取組は、前者が教育委員会、後者は市民文化部長まちづくり協働推進課が打ち出しているものではあるが、組織的・継続的に地域と学校が連携・協働していく部分があるという点では相違はない。そこで、「学校が学びや育ちの拠点となるまちをつくる」実践、「校区まちづくり協議会」の実践、それぞれが、「社会に開かれた教育課程」の実現にどのようにつながっているのかを明らかにし、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」ことの本質に迫りたいと考え本主題を設定した。

3 研究の視点

家庭・地域等と連携し充実した教育活動を展開できる学校づくりの推進を以下の2つの実践に焦点をあて研究

する。

- (1) 学校が学びや育ちの拠点となるまちづくり（識名小学校の実践）
- (2) 校区まちづくり協議会（真和志小学校の実践）

4 研究の実際

【那覇市立識名小学校】

(1) 学校の実態

児童の在籍は627名であり、25学級そのうち5学級が特別支援学級である。本校区においては、以前より公民館、自治会等と連携した教育活動が展開されており、多くの地域の方々の協力を得ている。その中で、それらを継続、発展させ児童の学びを充実させるとともに、地域の児童が将来にわたって地域づくりにどのように関わっていけるのかを考えながら実践したことを紹介する。

(2) 研究の取組

＜公民館と連携した取組＞

校区内に那覇市立繁多川公民館があり、その運営は、NPO法人1万人井戸端会議が那覇市から業務委託を受け行っており、社会教育の視点で地域と学校でまちづくりを推進している。地域文化と歴史を掘り起し誇りと生きがいを高めながら、世代を結びつけることなどを通して、識名地域の1万人規模の生活圏で教育や福祉の課題を解決するしくみづくりを行っている。

① 地域顔合わせ会

4月に繁多川公民館において、中学校区青少協会会長をはじめ、自治会長、地域の民生委員・児童委員、補導員、教育相談員、地域サポーター、識名児童館、地域包括センター繁多川、繁多川公民館、繁多川図書館、地域のこども園、幼稚園、保育所、放課後児童クラブ、その他多くの皆さんと学校職員との顔合わせ会を実施し、各機関等が連携して学校、地域、家庭を支えている現状が確認できた。実施に至る経緯は、識名小校長として赴任の挨拶のため公民館を訪ねた際、公民館長より、早い時期に地域の顔合わせ会を実施したいとの話があり、ぜひお願いしたい旨を伝え実現した。新

年度スタートにあたり、年間の活動を見通して連携を図っていくためのよい機会となった。



② 学習支援

本校の総合的な学習の時間等で公民館職員等を講師に招いて授業を行ったり、体験活動の支援を仰いだりしている。また、公民館がコーディネーター役となり県外から講師を招聘する連携事業も実施した。

5年生の平和学習では、4回にわたり、オンラインで公民館とつなぎ、公民館長や地域の方々から沖縄戦の概要や体験談等について話をしてもらった。また、6年生は平和学習で作成したリーフレットを公民館に展示し、公民館利用者にも見ってもらう場を提供してもらった。

3年生の地域学習では、公民館職員が来校し、各クラスで地域の様子や歴史、史跡等を紹介する取組を行っている。さらに、地域で古くから盛んであった豆腐づくりについて掘り下げ、児童の体験学習へと繋げている。本学習で連携した公民館職員は、本校の出身であり、小中学校時代から公民館の活動に参加し、ジュニアリーダー等を経て、現在公民館職員として働き、本校の学習支援を行っている。学校を拠点としたまちづくりの理想的モデルともいえる。



公民館がコーディネーター役となり、学習支援を行った例として、低学年、高学年での性教育の授業がある。県外から講師を招聘し、性に関する情報が氾濫する中で、幼いうちから正しい知識を身につける重要性について確認する良い取組と

なった。講師は、県内数か所における学校での授業や公民館等におけるワークショップの講師として来県した。本校における授業の内容や日程については公民館の担当者がコーディネーター役を担った。また、授業内容を間接的に保護者にも伝えるなど保護者の学びの場としても設定した。

③ 子どもの居場所づくり

繁多川公民館が識名小放課後子ども総合プラン会議の事務局となり会議を主催。識名小の全ての児童の放課後の安心、安全の確保と居場所づくりを目指し、地域の学童クラブ、児童館、民生委員等が定期的に意見交換を行う。また、放課後だけでなく、土、日や学校の長期休業中の児童の居場所として公民館広場をプレーパークとして開放し、遊びや学習を行える場として提供している。児童の活動の様子を公民館と共有することで、児童理解にもつながっている。

＜地域サポーターと連携した取組＞

石田中・識名小サポーターとして地域の方々約30名が活動している。主な活動は、朝の交通立哨や地域の環境美化、環境整備で、クラブ活動の外部講師も担っていただいている。サポーターの支援の様子を朝会で児童に伝えたり、学校だよりや学校ホームページで保護者等に伝えたりして、地域に支えられ学校生活を送ることができていることを共有している。

① 児童・生徒の登下校を見守る支援

識名小児童と石田中生徒の通学路はほぼ共通であるため、小中共通のサポーターが、大通りを横断するポイントをはじめ、住宅街の狭い道で車の往来が激しいポイントなどで立哨を行っている。立哨個所については4月に学校長を中心に校区内を見て回り、サポーターの方々と調整した。また、定期的に立哨個所を回りサポーターの方々への声掛けや、情報交換を行っている。さらに、下校時の見守りについても必要に応じてお願いしている。また、途中で登校を渋る児童に声掛けをして登校を促したり、学校まで付き添ってくれたりするなど登校の支援も行っていたりしている。



② クラブ活動等における支援

児童のクラブ活動では、華道・茶道クラブ、三線クラブ、うちなーぐちクラブでサポーターのみなさんにお世話になっている。それぞれのサポーターのみなさんは、各分野の普及活動も行っているため、児童の活動の支援をすることで、華道・茶道、三線、うちなーぐちを広めることにつながるとして、児童、サポーター双方にとってプラスとなる支援になっている。また、華道のサポーターは、週に1回程度、校内の生け花コーナーに花を生けていただき、校内の環境整備にも尽力いただいている。三線のサポーターには、毎週水曜日にお昼の放送を担当していただき、沖縄の黄金くとうばを紹介してもらい、関連する歌を三線の生演奏で披露していただいている。

サポーターによるクラブ活動支援



＜地域自治会との連携＞

本校校区には繁多川自治会と識名自治会の二つの自治会があり、学校長は定期的に自治会を訪ねたり連絡をとったりして情報交換を行い、さまざまな場面で連携を図っている。

① 学校評議員会

繁多川、識名両自治会の会長には学校評議員をお願いし、学校運営に関して意見を伺うと同時に、地域と連携して児童を育てていくうえでの成果や課題を共有し、学校づくり、地域づくりに生かしている。

② 学校の情報を共有

毎月発行している学校だよりを自治会にも配布するとともに、両自治会の掲示板にも掲示してもらい保護者だけでなく、地域住民へも学校の様子を伝えている。

③ 自治会行事、地域行事における連携

夏祭りや盆踊り、旗頭等の地域行事の際に、児童の様々な活動の場を設け、地域行事継続の担い手として育てるとともに、地域を愛する心を育むことにつなげている。学校が那覇市の旗頭フェスティバルに参加する際には自治会の青年会と連携し練習を実施している。

④ 地域課題の共有

通学路の危険箇所等について自治会と情報を共

有することで、自治会で対応可能な危険箇所等の修繕を行ってもらうなどの連携を図っている。また、自治会等の協力の下、本校の地域連携室において、生活困窮家庭の児童の食料等の支援を行っている。

【那覇市立真和志小学校】

(1) 学校の実態

児童の在籍は442名、23学級、内7学級が特別支援学級である。本校は明治13年に開校し、創立143年を迎える歴史ある小学校である。那覇の中心部に位置しているが、長年にわたり地域に住んでいる世帯が多く、祖父母、両親、児童、と三代以上にわたって本校に通っているという家庭も少なくないのが大きな特徴である。それ故に地域に誇りを持ち、母校に愛着を持っており、地域みんなで子ども達を見守る温かい雰囲気を持っている。その一方で高齢化が進み、自治会の活動が停滞している状況も見られる。

(2) 研究の取組

＜真和志小学校区まちづくり協議会の取組＞

① 概要

真和志小学校区では那覇市の提唱する「協働によるまちづくり」に基づき、市の支援のもと、令和2年度「真和志小学校区まちづくり協議会」が設置され、3年度より本格的に活動を開始している。

② 目的

- ・子どもたちとお年寄りが繋がる取組み
(登下校見守り・一緒に楽しめる活動)
- ・地域の環境美化
(花いっぱい運動・美化清掃)
- ・防災・減災の取組
(防災訓練・マップ作成等)

③ 構成メンバー

真和志小学校区在住者、在勤者すべてが対象となっている。(自治会、PTA、学校、企業、事業所、民生員等)

R4年度4月末会員数：48人(団体)

- ・那覇市協働大使(会長)・真和志小学校校長(副会長)・真和志小学校PTA・自治会長・公民館館長・社会福祉協議会・地域企業・団体・個人

④ 活動の実態

校内の地域連携室において、役員会と定例会を毎月交互に行い、活動報告や各種団体からの告知、情報交換を行っている。



定例会の様子

ア 新1年生に交通安全のお守り贈呈
交通安全の願いと真和志小みんなが「輪」になって繋がれるようにという願いを込めた手作りのお守りを贈呈していただいている。



1年生へのお守り贈呈の様子

イ 花いっぱい運動（常時）
学校正門付近・周辺歩道にプランターを設置。花植え、灌水作業を栽培委員と一緒にやっている。週末は会員が灌水を行っている。

ウ フードドライブ
家庭で余剰になった食品や日用品を寄贈していただき、真和志地区で支援を必要とされている家庭に届ける取り組み。地域のコンビニエンスストア駐車場に会場を設置。校長（副会長）、本校PTAもスタッフとして参加。昨年度は2回実施、職員や児童、家庭からの多数寄贈があった。今年度は3回実施予定。

エ 防災・減災の取組
設立当初から予定していたが、コロナ禍の影響で未実施。今年度は防災・減災の取り組みの実施を予定している。手始めに防災講話を計画している。災害時に学校が避難所になることを想定し、学校と連携した防災訓練、安全マップ作成を行う予定である。

＜真和志小学校放課後子ども教室の取組＞

- ① 概要
真和志小学内地域連携室を活用して放課後の子どもの居場所作りを行っている。講師（世話役）は真和志小の地域の方が担っている
 - ア 学習支援（毎日）主に低学年の児童が利用している。内容は補習や折り紙、工作等

イ 各種教室（踊り・琴・三線・キンボール）

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 公民館と連携することで、公民館で活動する団体や指導者に学校支援ボランティアとして活動してもらうことができ、地域学習等の学校の授業の充実、地域に愛着をもつ児童の育成につながる。
- ② 自治会や地域の方々と連携することで、安全面、環境整備の側面、生活困窮家庭の支援等、学校だけでは解決できない課題も解決の方向へ導くことができる。
- ③ 学校、PTA、地域が一体となった組織（校区まちづくり協議会）が設立されたことにより、学校と地域の連携が取りやすくなった。
- ④ 子ども達を地域で育む意識が高まりつつある。

(2) 課題

- ① より多くの、より幅広い地域住民、団体等との連携を図る。
- ② 学校を拠点としたコミュニティの活性化
- ③ コロナ禍での連携、活動の工夫
- ④ コロナ禍での対面の活動の工夫
- ⑤ 活動の幅を広げるための工夫

6 おわりに

「社会に開かれた教育課程」の実現には学校と地域の連携・協働が欠かせない。この点においては、学校が学びや育ちの拠点となるまちづくりの実践においても、校区まちづくり協議会の実践においても、それぞれの地域の団体や機関、施設と連携・協働している。そして、そのことで小学校区を単位とした規模での地域づくりに向かっていく取組になっている。しかし、学校が地域に支援してもらっているだけの一方向の関係だけでは、その目標は達成できない。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るためには、地域と学校がパートナーシップに基づき連携して課題解決に取り組む双方向の関係を築くことが、これまで以上に重要になってくる。

学校評議員会の持ち方の工夫や学校と地域をコーディネートする機能をどこに見出すか等、地域を俯瞰した大きな視点を持って学校運営に臨みたい。

コロナ禍の影響を大きく受けている昨今、学校と地域が物理的にも心理的にも遠くなっているのも現状である。感染状況の収束が見られずしばらくこの状況が続くことが予想される。収束を待つことで取り組みを先延ばしにするのではなく、今、できることを最大限に取り組んでいきたい。

第10分科会

研究主題

新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、校長の理念と指導性

提案者	上間 久	(東江小学校)
地区共同研究者	島川 直樹	(本部小学校)
"	赤嶺 美奈子	(西小学校)
"	岸本 五穂子	(安和小学校)

1 はじめに

現代社会は、グローバル化、急速な情報化や技術革新、少子高齢化の更なる進行等、きわめて変化が激しく、予測困難な時代を迎えている。今後子どもたちにとっても、先行き不透明な時代を迎えることから、様々な変化において積極的に向きあい、他者と協働し課題を解決する資質・能力の育成等「生きる力」を育む教育活動の充実が重要である。

2 主題設定の理由

そこで、沖縄県教育委員会が進める「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」の「方策5」から、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校連携、地域連携を通して「確かな学力の向上」を推進し、これまでの歩みを通して培ってきた、学校や家庭・地域及び関係機関との連携をさらに進め、子どもたちに必要とされる資質・能力を見据えた、効果的な取り組みが展開できるよう、より具体的な教育実践の在り方について、校長の理念と指導性を究明する。

3 研究の視点

協議②の「家庭・地域社会と連携した学力向上のあり方」を明らかにするため、次の研究の視点を設定した。

- (1) 学校経営ビジョンの共有を図る校長の指導性
- (2) キャリア教育・体験活動の充実を図る支援体制の構築
- (3) 関係機関等と連携した実践と校長の役割

4 研究の実際

- (1) 本部町立本部小学校の実践事例（児童数516名）

① 実践内容

ア 子供の学習状況を「揃える」

- 4月「学級組織づくり」支持的風土づくり
- 5月「安心安全づくり」脳の引き出し授業「脳の引き出し特設授業」を行う事により、各学年・学級に居る「困り感」を持つ子供を理解すると共に、その子の気づいていない脳の引き出しを開けてあげる「ふわふわ言葉」を創りあげていく。

- 6月「本小授業づくり」教師間のOJT（校内研修、提案授業、互見授業、検証授業）等を進め、授業改善による『教師力』UPこそ、チームとしての『学校力』UPに繋がり、学力向上を推進する上で必要不可欠だと考える。

イ 学校評価と教職員評価。

- 学校評価は「開かれた学校づくり」。

学校関係者評価を、学校・家庭・地域間のコミュニケーション・ツールとして活用。学校経営をあるべき姿へ動かすエンジン（推進力）の一つが「学校評価」である。

ウ 「グッジョブ連携協議会」との連携。

- 本部町グッジョブ連携協議会のご協力を頂き、キャリア教育にとって不可欠リアルなロールモデル（お手本）となる体験活動を実践。地域を支える産業や企業の魅力について知り本部町民としての誇りを持ち、地元の活性化・発展を担う人材育成の機会とする。

② 校長の指導性

ア 校長の経営ビジョンと組織づくり。

- 本校の教育目標『強く、豊かに、賢く』を具現化する為に、「本小の揃える」に力を入れる。
- 若い教師層へは、「授業力向上・学級経営」を、中堅教師層へは、「授業構成力・職能技術」を、ベテラン教師層へは、「学校運営への参画力」等を通して組織づくりを行う。

イ 「開かれた学校づくり」と「評価管理」。

- 「開かれた学校づくり」を進めるには、「学校評価」と「教職員評価」を両輪とし、「学校経営ビジョン」実現化の為のマネジメントサイクルに取り組んでいく。

ウ キャリア教育の視点を明確にする。

- 夢や希望を育む体験学習を実施。「ふるさと学習」を軸にした地域学習を意識し、地域の人材・施設などを活用し「出会い・交流」を多く設定し、地域に目を向けさせるようにする。

(2) 名護市立安和小学校の実践事例（児童数90名）

① 実践内容

ア 学校経営ビジョンの共有

本校の教育目標、地域を愛し、未来を切り拓く安和っ子（心豊かな子・自ら進んで学習する子・健康で明るい子）を具現化するため、国・県・市の教育施策や本校の課題等を踏まえ学校経営ビジョンを作成し、年度当初に職員と共有し実践中である。

また、保護者に配布、学校運営協議会の中で説明をし理解を図った。

今年度、学校課題（児童・教師含めた）を踏まえ実践していることを紹介する。

○ 一事徹底、本校の課題「進んであいさつ、場に応じた言葉遣い」をあげ、全職員で共通理解を図り、実践。校長として、校長講話で児童にあいさつの大切さや言葉を大事にすること、相手を尊重することなどを話し、全職員・全児童で取り組むことの一つとした。

○ 授業改善の一つとして互見授業週間（年2回予定）を設定。6月に一人一回の授業公開をし先輩・後輩教師がお互いの良さや課題など学び合える時間となった。管理者も授業参観を行い、授業参観シートに感想やアドバイスなどを記入し、授業者に配付。時間が設定できる場合は一緒にふり返る。また、児童にも良い刺激となった。

○ 家庭学習（課題学習・自主学習）の取組は学習時間のめやすや家庭の役割、学校の役割を確認し、資料を作成。家庭に配布し、協力を得る。家庭学習の取組状況は、ほとんどの児童が毎日取り組んでいる。（約8割）今後、質を重視した家庭学習、自学自習力の育成に向けて取り組んでいく。

イ キャリア教育・体験活動の充実

本校はシークワサーの里・勝山の麓にある。地域の生産者が有限会社勝山シークワサーを立ち上げ、商品を製造・販売している。本校で地域の自然環境や特産品のよさを知る上でもシークワサー作りを通して、キャリア教育・体験活動の充実を図っている。

学校の周囲にはシークワサーの木が24本あり、全児童で手入れを行う。11月に収穫・出荷する。収穫後、どのように商品になっていくのか、調べたり、実際に工場見学をしたりする。ジュース瓶やジュレ瓶のラベル作り、ジュレ作り、シークワサーの商品紹介、商品販売と工場の方の協力を得ながら、6か年間を通して学ぶプログラムになっている。

ウ 関係機関等と連携

本校では地域の方（駐在所の方や区長さん含む）や保護者による読み聞かせボランティア「あわきりん」が週一回金曜日の朝活躍している。コロナ禍、5月からスタートし、子どもたちにとっても心豊かな時間になっている。ボランティアの方は、図書室にて、始まる前に読む本の準備、終わってからは読んだ本や今日の感想などを記録する。その際、校長も参加し取組の激励を行いながらコミュニケーションを図りより良い関係性を築いている。

② 校長の指導性

ア 明確な学校経営ビジョンを示し、全職員共通理解、ベクトルを揃え共通実践を行う。常に状況を確認し、校内研主任・学力向上担当と連携しながら改善していく。

イ 地域のよさを生かしたキャリア教育・体験活動の充実をより一層図っていく。また、実践する上での外部講師の招聘や予算確保など行政・地域・家庭との連携を図る。

ウ 学校評価の効果的活用と学校だよりやホームページ等を通して、家庭・地域へ学校の取組の理解や支援等の周知を図る。

(3) 伊江村立西小学校の実践事例（児童数140名）

本校は、隣接する幼稚園と幼少連携を密に学校運営にあたっている。園児58名を含めると全児童・園児は198名で村内3学校の中では在籍数が一番多い学校である。

本村では、伊江村学力向上推進委員会を中心に学校・家庭・地域・行政の連携を強化し村ぐるみの教育を推進している。キャリア教育においては伊江村型就業意識向上支援事業を展開し、小学校から中学校までの横断的な伊江村型キャリア教育を行い、将来島を建てる人材の育成に繋がる教育活動を通して学力向上を推進している。

本校においては、これからの時代に必要な力を「自律」と「創造」にまとめ、生きる力の育成を次の通り実践した。

① 実践内容

ア キャリア教育の推進

6年生が外部人材を活用しキャリア教育を実施している。各班がレストラン経営を行いマーケティング、から集客までの構想を描き実社会に結び付けた取り組みを通してキャリア教育を深めている。社会を構成する多くの企業や人を学校教育に介入させることでキャリアの視点が広がる。

他学年においても、これからの時代に必要な

能力を身に付けるための学習を進めるうえで、外部講師などの招聘、予算の確保など校長としてヒト・コト・モノを揃え効果的な学びに繋がる体制を整える。

イ ビジョンの共有と教育課程への位置づけ

これからの時代に必要とされる資質能力を「自律」「創造」として捉え、学校教育ビジョンに示し、取り組みの方向性を地域、保護者、児童、職員へ示し、教育活動全般でビジョンの実現を念頭に実施する。

ウ P T A 3 役定期情報交換会

学校現状や課題の共有、それらを踏まえ保護者に協力を依頼。学習指導に係る教材購入や講師紹介などの情報を得る。

エ 校内研修の工夫

前年度に作成されている年間指導計画は、新年度の職員の資質能力を踏まえ適宜変更し学校教育ビジョンの実現に向けた授業作りや学級体制作りのために研修に置き換える。特に理念を踏まえた各学年の授業作りでは、校長が45分張り付き授業参観を通して、あるいは、OJTを推進する上で校長による授業を通して、学習指導要領の目指す主体的・対話的で深い学びを示す。

② 校長の指導性

実践内容に示してある通り校長の学校教育ビジョンの共有化、ビジョンの具現化、具体策を、職員、地域、児童、保護者へ示し導くことが校長としての責務である。

教職員のポテンシャルを引き出し最大限に生かす場面の設定も校長の役割。

(4) 名護市立東江小学校の実践事例（児童数399名）

① 実践内容

ア 学校経営ビジョンの共有

- 学校教育目標を実現するためには、校長が学校経営ビジョンを具体的かつ明確に示すことが前提となる。そこで、教職員には一人一人が積極的に学校運営へ参画できるよう、年度当初の職員会議で、取り組みの方向性の共有を図った。更にその進捗状況については教職員評価システム面談を利用して、個別に指導助言している。保護者・地域には、学校評価で「細かすぎて分かりづらい」との声があったことから、その内容を見直し、シンプルな構成にして、伝わりやすさを優先した。更にその取り組み内容・状況について、学校便りで数回に分けて説明し共有を図っている。
- 本校の特色ある教育活動「インクルーシブ教育の視点に立った学習環境づくり」（3つ

の大丈夫・3つのお隣さん、ふわふわ言葉、脳の引き出し等）について、保護者・地域に積極的に授業公開をしている。更に、学校便りやHP等で情報を発信し、学校運営への理解と協力に努める。

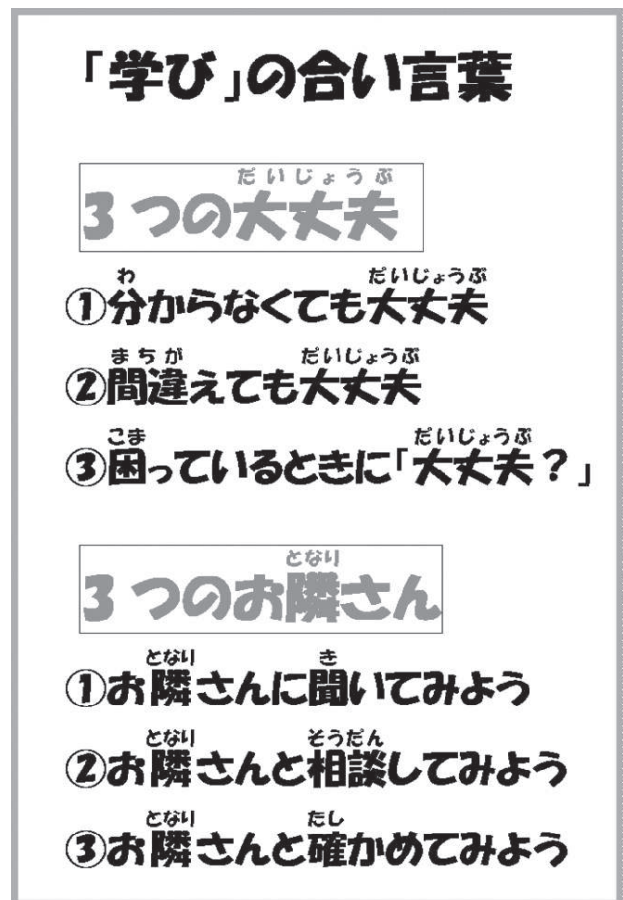


図1 3つの大丈夫・お隣さん

イ キャリア教育・体験活動の充実を図る支援体制の構築

- 今年度はコロナ対策を講じながら地域人材や資源を躊躇なく活用していくよう職員へ周知している。これまで教育課程に位置づけられていた、ジョブシャドウイング、NIE授業、昔遊び体験等の他、今後、新たに位置づけられそうな、魚さばき体験、英語劇鑑賞、ふれあいコンサート等は、地域の方から声かけがあり実現した活動である。これらの活動は、子ども達の興味関心を刺激し、探究心の育成や主体的な学びの姿勢を引き出すことができると捉えられる。CS地域学校協働活動として、新たに支援体制を構築し、キャリア教育の充実を図る。

ウ 関係機関等と連携した実践と校長の役割

- 本校の最重要課題である学力向上を目指し、市「授業を中心とした学校づくり研究事業」に申請して、村瀬公胤氏（麻布教育研究所）に指導を仰いでいる。校長は御教授頂いたことを教職員に周知し、児童の学習感・教職員の指導観の転換を図る授業改善に取り組んでいる。
- 昨年度より中学校区CSがスタートとし、地域、学校の実情に応じた組織的・継続的な体制の構築と目標・ビジョンを共有した「連携・協働」活動を推進している。校長はCS導入期「つなぐ」ことを意識して、教職員、保護者、地域の理解と協力を得るため、情報発信と相互連携に努める

② 校長の指導性

- ア 学校経営ビジョンをもとに、児童、保護者、地域の実情に沿った「魅力ある学校づくり」について、教職員・保護者・地域へ共通理解を図る。
- イ 教育委員会や各関連機関と情報を共有し、協同的な関係を構築して、学校マネジメントに努める。
- ウ 学校便りやHP、報道機関等を通して、家庭、地域への情報を発信に努め、今後の連携・協働活動体制の構築に努める。

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 学校経営ビジョンの情報共有、発信を工夫することにより、教職員・保護者・地域に浸透し、学校課題の改善に繋がっている。
- ② 関係機関等との連携により、充実したキャリア教育を実践。児童自ら意欲的に活動し、学びを深めると共に、地元に対する理解が深まった。

(2) 課題

- ① コロナ禍における新しい形の保護者、地域の学校教育への参画。学力向上（キャリア教育、未来に生きる力）の定義を共有した上で家庭、地域との協働活動を推進したい。
- ② 現在のキャリア教育の実践内容を継続する上で、教育課程や週時程を更に見直し、質的・量的な時間を確保する必要がある。

6 おわりに

主題設定の理由「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校連携、地域連携による「確かな学力」の向上を推進するためには、児童が「持続可能な社会」の創り手となることが出来るように取り組むことが求められて

いる。そのためにも市町村の特色を生かした施策推進による学校作りや、キャリア教育の視点を踏まえた校種間の連携強化及び、学校・家庭・地域の互惠関係の構築を図ることが求められる。学校での「学び」がよりよい社会を創る等、実生活と関連した取組を推進する必要があるからこそ、改めて「社会に開かれた教育課程」の実現が重要である。子どもたちに「確かな学力」を確実に身に付けさせる為にも、保護者や地域住民等による、学校運営や教育活動への参画が日常的に実践され、そのためにも校長は理念をもってリーダーシップを発揮し、さまざまな取組を仕掛け、学校経営にあたらなければならない。

分科会提案事項

中学校

第1分科会	カリキュラム・マネジメントの推進……………	59
第2分科会	主体的・対話的で深い学びの授業実践に向かう学校体制づくり……………	63
第3分科会	よりよく生きるための道徳性の育成と健康で安全な生活を 実現するための教育の充実……………	67
第4分科会	自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める 生徒指導とキャリア教育の充実……………	71
第5分科会	多様化した教育課題に対応できる学校経営と教職員の育成……………	75
第6分科会	地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能強化	79

第1分科会

研究主題

「カリキュラム・マネジメントの推進」
～学校教育の改善・充実に向けた、「社会に開かれた教育課程」の実践～

提案者 美 差 淳 司（小浜小中学校）
地区共同研究者 仲 地 みゆき（西表小中学校）
" 與世山 操（黒島小中学校）
" 下 地 和 美（竹富小中学校）

1 はじめに

学習指導要領の前文に「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という理念がある。それぞれの学校が学びの意義や身に付ける資質・能力を明確にしなが社会との連携及び協働によりその実現を図っていくとう、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。また、児童生徒が将来において、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることが求められている。

各学校においては校長の方針の下、各学校の特色を生かした教育課程を編成し、その基本的な方針を家庭や地域と共有しながら実施、改善していくカリキュラムマネジメントに努めなければならない。

2 主題設定の理由

竹富町には、小中併置校7校、小学校4校、中学校2校が設置され、本研究員の勤務校は竹富町内の離島僻地にあり、複式学級を編成する極小規模校である。各島それぞれ地域行事が盛んで学校と地域との関わりも密接である。また、竹富町は令和元年度から町内の全学校において海洋教育を推進しており、その取組においても地域社会との関わりによるものが大きい。そこでその海洋教育を含め、各学校の実態に応じた特色ある教育課程を編成・実践し、まとめることで研究主題に迫ることとした。

3 研究の視点

- (1) 学校のカリキュラム・マネジメントの実践及び教育活動の活性化
- (2) 学校教育の改善・充実に向けた、「社会に開かれた教育課程」の実践

4 研究の実際

■竹富町立小浜小中学校（児童36名、生徒21名）

(1) はじめに

本校が所在する小浜島は、石垣島から船で約30分の場所にあり、色濃く八重山の昔ながらの風習が漂い、今でも数々の伝統行事が行われている。特に国の「重要無形文化財」にも指定されている「結願祭」（五穀豊穡を祈り芸能を神に捧げる祭り）は、島の

行事の中でも盛大に行われる祭祀の一つで、若い世代へと脈々と伝承され続けている。島民は、暮らしや様々な営みの中で海洋と密接にかかわり、多大な恩恵を受けながら、先人たちから受け継いだ豊かな知識や技術を活用して生活し続けている。

(2) 社会に開かれた教育課程の実践

本校は、地域と連携しながら周囲を取り巻く海洋や自然環境、伝統行事等を扱った多種多様な子ども達の学びを計画・実践している。現行学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手」の育成が求められており、本校においては、海洋教育の実践がその大きな推進力となると考えている。本校の海洋教育のテーマは「美しい小浜を守ろう～より豊かな海へ～」と設定し、児童生徒の発達段階に応じた取組を、生活科や総合的な学習の時間を中心として、生きる力を育みながら海洋教育を推進している。

(3) 実践例

① 小学校低学年

小浜島の自然の中でも、生き物に焦点をあて、生き物への気づきを学びにしている（小浜島に自生しているマングローブやそこに自生している様々な生き物とその環境について等）。

② 小学校中学年

生き物どうしのつながりや関係性に目を向ける学習活動を行っている（小浜島の川「フヤヌカー」で、川の特徴やそこに生息する生き物の観察等）。

③ 小学校高学年

小浜島の農業に目をむけ、自然と産業、歴史と文化との関わりについて学んでいる（地域青年会の協力による稲刈り体験等）。

④ 中学校

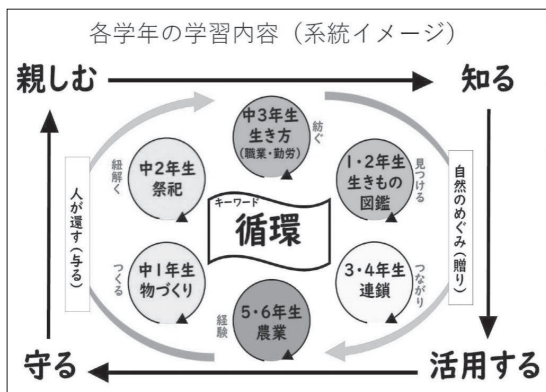
中学1年生では、島の自然を活かした物づくりを中心とした体験的な活動（地域の方を講師にクバの葉を使った「アブル（うちわ）」作りや横笛作り等）、中学2年生では、島の祭祀について学び（小浜島の結願祭や旧盆などの祭祀を海との関わりからの視点から考える等）、中学3年生では、これまでの学びを基にした島の職業調べ等を行いこ

れからの生き方について学びを深めている（小浜島で働く方々を取材し、島内で働く理由や仕事に対する思いについて等）。

(4) 校長の関わりとリーダーシップ

① 連続した学びの意識化

学年の発達段階に応じた教育活動を通して、キャリア教育とも関連付けながら、次学年へつなげている。これらの一連した学び（キーワード：循環）には、小浜島の豊かな自然の恩恵を受けるだけではなく、人として自然にも何かしら還していくという考えを持って欲しいという願いも込められている。



② 地域の良さの意識化

本校の海洋教育は、SDGsの視点にもある自然との共生を含めた「持続可能な開発目標」にもつながると考える。子ども達が島の良さを発見することだけではなく、島の生活と海洋とのつながりが、これまでの自分の生活とこれからの自分の未来に関係していることを自覚し、彼らが小浜島の持続可能な未来の創り手となることを意識して実践している。

③ 校庭の稲作活動

小浜島はかつて湧き水が豊富で、稲作が盛んな島であった。当時の多くの水田は現在サトウキビ畑や牧草地などに変わりつつあるが、「島の稲作を絶やしてはならない」と地域人材の協力を得て、校庭に水田を作った（令和4年3月）。水源は井戸水を利用。校庭の田んぼは、日常的に稲の生長を観察できるだけではなく、子ども達がトンボやバッタ、オタマジャクシなどの様々な生き物が田んぼの生態系になっていることを知ることができた。田踏み、苗の植え付け、稲刈り、足踏み脱穀までの一連の過程を経験し、約10升の稲穂を収穫した（令和4年7月）。



④ 異学年間の「つながり」の意識化

全学年で行ったもずく採り（4月実施）は、異学年交流として取り組んだ。小1から中3までの縦割り班を編制し、班の中で上級生が下級生に採り方や砂の落とし方、洗い方を教える等の異学年交流が行われ、上の世代から下の世代に引き継がれる場面も見られた。



■竹富町立西表小中学校（児童17名、生徒18名）

(1) はじめに

本校は、西表西部の祖納・干立・白浜（中学校）の集落を校区とし、祖納地域に位置している。古来より西表島の行政・産業・文化の中心地であった。今でも稲作文化が色濃く残り、「豊年祭」「節祭」等の祭祀が年中厳かに執り行われている。また、本校の三大体験学習である「稲作」「和紙づくり」「海の体験」は、「ふるさと学習」として、地域や保護者の協力を得て40年近く続いており、地域住民の学校教育への関心は高く、地域の次代を担う人材育成への期待は大きい。

(2) 社会に開かれた教育課程の実践

本校の特色を生かした教育課程を編成し、それに基づく教育活動を通して、児童生徒の目指す資質・能力を3つの柱にそって整理した。また、伝統の「ふるさと学習」の改善、充実を図り、社会に開かれた教育課程の実現を推進する。

(3) 実践例

① 目指す資質・能力の明確化

- ア 自ら学び、考えを伝え合う力
- イ 主体的、協働的に課題解決する力
- ウ 課題に向かい粘り強く行動する力

PTA総会や学校だより、学校HP等で保護者

や地域と共有を図った。

② ふるさと学習の充実

年間の三大体験学習をそれぞれ以下を基本に体系化し、体験と学びをつなぐ工夫を行い学習の充実、持続化を図る。

ア 総合的な学習の時間を核としたカリキュラム作成と体験学習のマニュアル化

イ 小学生から中学生まで発達段階に応じた学習内容や目標の設定

ウ 地域人材、地域資源の継続的な活用

③ 海洋教育の取組

「海の体験学習」は、サバニ体験、刺し網漁、シュノーケリング・ダイビング体験を3年サイクルで実施している。小中合同で行うこの体験活動を中心に、それぞれ教科横断的なカリキュラムを作成し、全体での学習と学年ごとの探究学習を進め、地域の一員として今できることや未来に行動する力を育む。今年度は、昨年度の成果と課題を基に年間カリキュラムを整理し、各学部のテーマを設定し取組を進めている。

「西表のすてきなつながりを見つけよう」(小)

「きれいな海を守り未来へ繋いでいくために」(中)

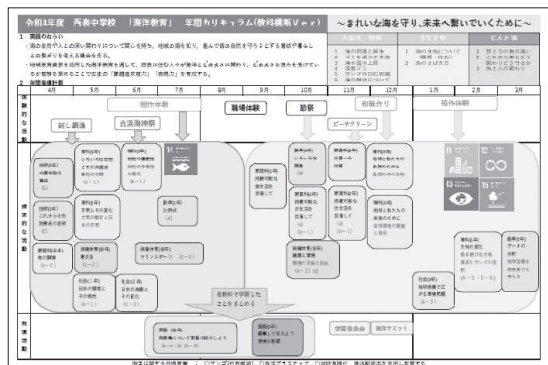


図1 年間カリキュラム（中学校）

(4) 校長の指導性

- ① 学校経営方針・指導の重点の確認（校長だより）
- ② 児童生徒と身に付けさせたい資質・能力の共有（校長講話、集会等）
- ③ 学校評価や、各行事、各種調査等PDCAサイクルの確立と指導助言

■竹富町立黒島小中学校（児童16名、生徒6名）

(1) はじめに

本校は黒島の中央部に位置し、児童・生徒22名の一島一校の小・中学校併置校である。地域の基幹産業は畜産業で、民宿やダイビング等の観光業が多い。地域と学校の結びつきは強く学校行事や地域行事で交流し関わりながら共に島の宝の子どもたちの育成に協力・支援する思いに溢れている。

(2) 社会に開かれた教育課程の実践

学校教育目標の実現に向けて、学校ランドデザインの共通理解を図り、社会に開かれた教育課程を編成・実施・評価・改善するサイクルを確立していく取り組みを行う。

(3) 実践例

① 資質・能力の育成

- ・学んだ知識・技能を活用し課題を解決する力
- ・自尊心をもち、他者と協働的に学ぶ力
- ・心身共に健康でねばり強くやり遂げる力

② 地域連携、交流学习の取組

ア 黒島保育所との合同地震・津波避難訓練

イ 保護者との合同通学路点検の実施

ウ 交流学习（石垣市内大規模校等）

エ 職場体験学習（黒島及び石垣市内事業所等）

オ 社会科見学（牧場・ごみ処理場）

カ 平和講演会（「笑いティサロン」との連携）

③ 海洋教育の取組（総合的な学習の時間等）

R3年度は小・中の共通テーマを「サンゴ」として、合同体験活動を入れつつ地域素材・地域人材を活用、地域教育施設と連携してSDGsの目標達成を目指す視点を持たせた探求的な学習に取り組んだ。R4年度は起業教育を導入し、児童・生徒が2社を設立した。海洋プラを活用したアクセサリー等を生産・販売する活動を通して海を守り、活用する学習に取り組んでいる。

ア 「サンゴと黒島の生活」講話（小）

イ 「ウミガメ・島の自然環境」講話（小・中）

ウ サンゴ染め、シュノーケリング体験（小・中）

エ アーサ採り体験（学校行事）

オ サンゴランプシェード作り（中）

カ ビーチクリーン〔伊古海岸〕（小・中）

キ 漂着物活用アート作品づくり（中）

ク 海洋プラ商品の生産・販売事業（小・中）

④ 地域の芸能・文化の継承に向けた取組

ア 豊年祭奉納五穀栽培、地域行事への参加

イ 三線・棒術・舞踊の学習

運動会、学習発表会、中文祭舞台発表、「黒島節」、「黒島口説」、「棒術」等

保護者・地域の方々の指導・支援を受けて島の伝統芸能の継承と発展に向けた意識の向上と技能の習得を図っている。

(4) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① 学校経営方針に基づく小・中連携した教育実践の推進（学校だよりの発行、HP運用）
- ② PTAと連携した行事、人材活用の推進
- ③ 学校評価、各種テスト・調査、教育活動等のPDCAサイクルの確立と実効性を持たせる実践の推進



■竹富町立竹富小中学校（児童27名、生徒7名）

(1) はじめに

本校は、竹富島の3集落の中央に移置する小中併置の極小規模校である。竹富島の主な産業は観光業で、年間約60万人が訪れる。また国指定の重要無形民俗文化財の種子取祭を始めとする地域行事が盛んで、島民は年中行事を軸に生活を営んでおり、児童生徒も伝統文化に対する思いや郷土愛が強い。

(2) 社会に開かれた教育課程の実践

本校の特色を活かしながら、主に総合的な学習を軸として道徳、特活、各教科を関連づけた教育課程を編成する。校内組織体制と地域との協働体制づくりを図ることで、社会に開かれた教育活動の実践を推進する。

(3) 育成する資質・能力の明確化

- ① 「何を理解しているか、何ができるか」（「知識・技能」の習得）
 - ② 「理解していること、できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」の育成
 - ③ 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」（「学びに向かう力・人間性等」の涵養）
- 以上の3つを踏まえ、小中一貫の教育の中で15の春（島立ち）に向けて児童生徒に育みたい資質・能力を明確にする。

(4) 実践例

① 主な海洋教育の取組

学年ごとの海洋教育目標を設定し全体活動と個人テーマの探求学習を合わせた取組を行う。小学校低学年では地域の自然や伝統文化との触れ合いを通して地域の良さに気づき、中学年ではその気づきをもとに課題解決に向けて学んだことをまとめる。高学年では探求活動を通して身に付けた知識・技能を実生活に役立てる。中学校においては、学びを活用し、よりよい生活のために行動したり他者と情報共有することを目指す。今年度はSDGsをさらに意識し環境に良い商品開発や販売を行い発信していく。

全ての学年で学習デザインを作成し、事前学習、探求活動、事後学習、未来のための力・行動へとつなげ「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す。

- ア 海の子集会（もずく・アーサ採り）
- イ 春の遠足（環境に良い商品開発事前学習）
- ウ シュノーケリング・スキューバ体験
- エ ゴミ焼却場見学、ビーチクリーン活動
- オ 珊瑚マップづくりとエコガイド活動

② 種子取祭の取組

ア 事前学習

- (ア) 由布島での稲作講話（地域人材）R 3
- (イ) 神司に学ぶ御読めぐりR 3
- (ウ) 芋・粟・ごま・大豆栽培とイーヤチ作り



イ 学びの発信と事後指導

- (ア) オンライン学習会の定期開催
 - (イ) 総合的な学習発表会のプレゼンテーション
 - (ウ) 個人テーマの探求学習
 - (エ) キャリア教育との関連
- 事前事後指導での「かふやみ」メタ認知

③ 方言の継承

- ア てーどうんむに（竹富方言）による朝の放送
- イ てーどうんむに大会

(5) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① PDCAサイクルの確立と助言
- ② 学校経営方針や指導の重点との関連、活動のねらいや目指す児童生徒像の明確化
- ③ 学校だよりによる家庭・地域への情報発信と共有、協働意識の向上
- ④ 地域人材（素材）バンクの作成と海洋教育サポーターの配置

5 まとめ（全体の成果と課題）

【成果】

- (1) 本地区のそれぞれの地域や学校の実態に応じた特色ある教育課程を編成し、小中連携して共通実践することができた。
- (2) 家庭や地域と連携し、各教育活動で地域人材や地域資源を有効に活用し、取組を進めることができた。
- (3) 海洋教育を通して、地域の人々と関わり島の文化や自然環境を学び体験することで、物事を多様な視点から捉える力をつけることができた。さらに、地域の未来について関心を持ち、自分たちが未来の創り手であることへの自覚が高まっている。

【課題】

海洋教育に関する教科等横断的な視点を取入れた持続可能で実効性のあるカリキュラム・マネジメントを構築し、適宜見直しを図る必要がある。

第2分科会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの授業実践に向かう学校体制づくり

提案者	宜保博哉	(潮平中学校)
地区共同研究者	大城正篤	(渡嘉敷中学校)
"	大城直之	(糸満中学校)
"	平良真也	(座間味中学校)
"	當間保	(南風原中学校)

1 はじめに

学習指導要領では、学校教育において児童生徒に育成することを旨とする資質・能力を3つの柱に整理し、その資質・能力を児童生徒一人一人にしっかりと育むためには、授業改善を通して授業の質を高めていくことが必要となる。そのために求められているのが「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を推進しなければならない。そこで本研究部会では、昨年度に引き続き、共同研究者が自校の成果と課題をもとにした具体的な取組を紹介することで研究の推進を行った。

2 研究の視点

主体的・対話的で深い学びの授業実践に向かう学校体制づくりについて、各校とも校内研修のテーマを設定して実践を積み重ねる。各学校の研究テーマは、以下の内容である。

糸満市立糸満中学校
『確かな学力を身につけ、主体的に学び合い高め合う生徒の育成』 ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～
南風原町立南風原中学校
『持続可能な社会の実現を目指して、学び続ける生徒の育成』 ～学びに向かう力の見取りを通して～
渡嘉敷村立渡嘉敷中学校
『主体的・対話的で深い学びの創造』 ～各教科における見方・考え方を意識した授業づくりを通して～
座間味村立座間味中学校
『思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業改善』 ～(幼)多様性を認め合う集団づくり～ ～(小中)よりよい交流を通して～
糸満市立潮平中学校
『主体的・対話的で深い学び』の視点に基づく授業改善の構築 ～学びの自立に向けた学習指導を通して～

3 各学校の取組み

(1) 糸満中学校【生徒数537名】

① 研究のねらい

ア 組織的・計画的に推進し、本校の教育課題の解決や学校教育目標・重点目標の具現化を図る。

- イ 教師の資質や指導力の向上を図り、学校の教育効果を高める。
- ウ 職員相互の共通理解・共同研修の場とし、その充実を図る。
- エ 『沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ～学びの質を高める授業改善・学校改善～』を全職員共通理解・共通実践し、特に【方策1・2・3】に焦点をあて取り組み、授業改善の推進力を高めていく。
- オ 『問いが生まれる授業サポートガイド』を活用し「主体的・対話的で深い学び」の授業改善に努める。
- カ NIEの視点を取り入れた授業改善に取り組み、教科で指導案を検討し、全職員1回公開授業を行う。
- キ SDGsの視点（「6つの視点」「7つの能力・態度」）を取り入れた授業改善に取り組み。

② 研究内容

- ア 学力向上推進プロジェクトⅡ【方策1・2・3】を中核に取り組み
 - 【方策1】日常化する（質的授業改善）めざす
 - 自己肯定感を高める個人内評価等の積極的取組。
 - 生徒指導の3つのポイント（自己存在感・共感的な人間関係・自己決定）を生かした授業。
 - 単元を通して、資質・能力を育む授業改善を推進する校内研究体制の充実。
 - 【方策2】そろえる（組織的共通実践）
 - アセスメントによる実態認識を揃える。
 - みとる視点・観点を揃える。（共有する）
 - ガイダンスとカウンセリング機能の充実。
 - 【方策3】支える（発達の支援）
 - 確かな児童・生徒理解。
 - 支持的な風土をつくる学級経営の充実（ガイダンスとカウンセリング）
 - 学びに向かう集団づくり。
- イ 学年会での取組
 - 学年の課題を明確にし、焦点化・重点化した具体的な実践項目を設定する。
 - 学年の生徒指導（生徒理解）に関する共通理解を図り授業改善に生かす。

ウ 教科会での取組

- 各教科領域において指導主事を招聘しての研究授業を行い、授業研究会で研究内容を深める。
- 各教科や領域とも、『問い』が生まれる授業サポートガイドの活用や「NIE」の視点を踏まえた授業改善に努める。

エ 12月までに公開授業指導略案を作成し1人1授業を行なう。また、3つ以上の公開授業を参観する。（1人1授業3参観）

オ 学年公開授業を2学期の9月～11月中に期間を決めて学年職員全員が公開授業を行なう。

カ 生徒主体の学び合い高め合う授業づくり推進

- ペア・グループ学習を取り入れた学び合いを学校全体として行なう。
- 各学級とも意図的な座席配置を行なう。

キ 日常的な学習を支える力の育成を図る取組（糸満中学校学習の規律10項目）

- ①ベル前着席 ②授業の開始 ③授業中の返事・音読 ④聞く姿勢 ⑤授業での学習活動 ⑥授業中の発言・発表 ⑦学び合い高め合う姿勢 ⑧認め合い支え合う姿勢 ⑨授業の終了 ⑩次の授業の準備

ク 地域とともにある学校づくりの推進（コミュニティースクールの推進、地域行事への参画）

ケ 海洋教育（海人科）の推進

③ 校長の関わり

ア 日々の授業観察等を通して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてチームの取組を支援する。

イ 教職員評価システムを効果的に活用し、授業改善の視点を揃える。

ウ 職員を育てること、職員の良さを見つけることを意識して学校経営を行う。

(2) 南風原中学校【生徒数832名】

① 今年度重点的に取り組んでいる内容

ア 質的授業改善

○キャリアの視点「か・ふ・や・み」（かかわる力）（ふり返る力）（やりぬく力）（みとおす力）を意識した授業の実践

○生徒指導3つの視点（自己存在感・共感的な人間関係・自己決定）を生かした授業の実践

○ICT、一人一台タブレットを活用した授業改善の充実

○一人一台タブレットを活用した家庭学習の充実

イ 組織的授業改善

○全校体制での「はえばるセブン」7つをそろえる実践の徹底

○学びを実感し自己肯定感を高める「ふり返りシート」の共通実践

ウ 組織マネジメント

○諸学力調査や学習評価等を活用したカリキュラムマネジメント

○授業改善に向けた教科会及び校内研究体制の充実

○効果的取り組みや好事例の紹介

② 校長の関わり

ア 目指すべき方向性を示し、思いを共有

○年度初めの職員会議で、学校経営方針・目指す学校・目指す授業の方向性等を明示

○夏休みや冬休みの長期休業時の校内研修で校長による毎学期の成果と課題、目指す授業の方向性について再確認

○教職員評価システムとの連動

イ 教職員相互の学び合いを通じた授業改善への関わり

○「一人一公開授業」バディ制による授業観察
○授業観察後の授業リフレクションやメモ等による助言

○校長だよりによる授業の共有と公開

○効果的取り組みや好事例の紹介

(3) 渡嘉敷村立渡嘉敷中学校【生徒数34名】

① 研究のねらい

離島へき地校ということで、各クラスの人数が少ない実状から、多様な考えが出にくく、強い意見にながされやすいところがあり、多角的・多面的に思考する機会が乏しい点があげられる。

そこで、授業の中で自らの考えをまとめ、互いの考えを交流させ、生徒が多様な方法で課題を解決する授業を推進する。

② 研究の内容

ア 同一歩調の授業づくり
授業の望ましい展開を共通のスタンダードとした授業改善

イ 「授業観る研」の実施
学び続ける教師集団として、小中職員が校種の壁を取り除き、お互いの授業を自由参観し、授業後のリフレクションを行う。

ウ 「一人一公開授業」の実施

全職員が「指導略案(板書計画記載)」を作成し、年1回の公開授業を実施する。授業後は、管理職との授業リフレクションを行う。

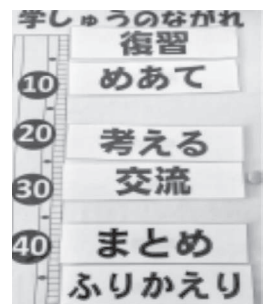


写真1 同一歩調の授業づくり



写真2 一人一公開授業

エ 物的、人的地域資源の活用

本村は恵まれた自然環境を有するとともに国立の青少年教育施設が近隣する。教科指導や総合的な学習、学校行事等にお



写真3 人的地域資源の活用
いて、地域資源や青少年教育施設の専門職員を活用することによって、生徒が主体的に意欲を高めて学習活動を行うことができている。

オ 継続的な外部講師招聘研究会

毎年、琉球大学及び県立総合教育センターから講師を招聘して、授業研究会や理論研究会を実施している。

③ 校長の関わり

ア 学習指導要領の完全実施に伴い、「育てたい生徒像」「めざす授業」についての共通理解を図る。

イ 「県学力向上推進P・PⅡ」を踏まえた授業改善の推進と、チームとしての取組を支援する。

ウ 個別最適な学び・協働的な学びの重要性や必要性についての共通理解を図る。

エ 教職員評価システム、授業参観後の授業リフレクション、週案メモ等を通して、職員への助言・激励を図り次への意識喚起を行う。

(4) 座間味村立座間味中学校【生徒数36名】

① 研究のねらい：授業改善に向けた学校体制づくり

2020年の学習指導要領の改訂を受けて、本校では昨年度より研究主題を「思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業改善」とし、その中でもICTを活用した授業展開について研究を進めてきた。児童生徒におこなったアンケートからは、ICTを活用した実践に関して、肯定的に捉えている回答が多く、一定の成果を上げることができたと考えられる。しかし、諸調査の結果からも、自分の考えや意見をまとめ、記述で答えるといった設問では依然として、無回答の児童生徒もおり、題意を捉えられていない解答になっていることも多く見られる。

そうした現状を踏まえ、今年度は以下の2つを中心とした座間味校スタイルを全職員で共通実践していくことにより、思考力・判断力・表現力の育成に繋げていきたい。

ア 【個人で考え、自分の考えを書く時間の確保～自分自身との対話～】

○既習事項を活用して自力解決に向かう力

○題意をとらえて、粘り強く課題に取り組む態度を育む

○「問い」が生まれる発問の工夫

イ 【自分の考えを他者に伝え、他者の考えを傾聴する交流の場の設定～他者との対話～】

○根拠を明確にして説明する力を育む（話型の提示証明や考察の仕方）

○ICTを活用した交流場面の設定（Jamboard、スライド、ドキュメント、コメント機能の活用）

○他者の意見を否定せず受け止め、その良さや自身との違いを認め合う力を育む

○他者の意見を理解し、反復説明する力を育む

② 研究の内容：全職員体制による共同研究

ア 一人一授業（五年研を兼ねる）

○一人最低1回の公開授業を行う。学部間でバディをつくり、公開授業を行う際、相方の教職員が授業を記録・撮影し、授業の感想、リフレクションを行う。

※授業前に単元プランシートを作成し、授業後振り返りシートを作成する。

イ 三参観

○教職員の授業を最低3回以上観に行くことを基本とし、自身の授業改善・授業力向上を図る。

○参観者は、授業後、授業者に感謝の気持ちをもって、感想やアドバイスを参観シートに記入し、自分が学んだこと等を伝える。

ウ 主事招聘授業

○小中各1回、研究主題に基づいた研究授業を行う。

エ 共同研究

○幼少中の職員が共同で教材研究、授業研究を行い、授業改善に繋げている。



写真4 共同研究 其の一

写真5 共同研究 其の二

③ 校長として大事にしていること

ア 日々の全職員との関わり

イ 授業参観、一人一公開授業を通じた指導助言

ウ 目指す生徒像、教師像、学校像の共有

エ 「気づき考え行動するために何が必要か」ともに考える雰囲気醸成と日々の会話

オ 職員室の支持的風土の構築に係る取組の強化

(5) 潮平中学校（生徒数313名）

① 研究のねらい

ア 学校の課題解決を目指した研究・取り組みを行う職能成長を図る場とする。

イ 教職員の資質向上と課題解決のための共通理解・共通実践を図る場とする。

② 研究の内容

ア 三つの柱

- 主題研究：学力向上推進と関連させながら、課題解決の取り組みを、全職員・全教科・領域で実施する。
- 授業研究：授業実践と授業研究会を実施する。
- 職員研修：教師の資質向上等を目指した研修を実施する。

イ 主題研究の進め方

- 学習指導の工夫・改善

ウ 授業研究の実践（指導主事招聘を含む）

- 一人一授業では、お互いの授業を公開し、授業改善に活かす。→一人一授業三参観の実践

エ 「授業の見取り方」に関する教科ごと及び自己研鑽の一環で動画を視聴して、共通理解を行う

オ 職員研修

- 職員の資質向上及び共通理解が必要な事項について計画的に実施する。
- 自己研鑽の充実ならびに職能成長を図るため研究会等の参加を推奨する。

③ 校長の関わり

- ア 日々の授業観察および研究授業を参観して、日々かつ機会を通したOJTで育成する。
- イ 教職員評価システムを効果的に活用し、授業改善の視点を揃える。

4 おわりに

各調査研究校の○成果及び●課題を一覧にすると、表記の通りとなっている。

糸満市立糸満中学校
○1年間の研究を通して、研究のねらいで意図する変容が見られた。○各教師が授業改善に努めており、学校評価での生徒の授業に対する評価が高くなっている。 ●「学力向上推進プラン・プロジェクトII」の更なる推進を図る。●下位の生徒や配慮を要する生徒に対する個に応じた支援を推進する。
南風原町立南風原中学校
○学力向上について、継続して「そろえる実践南風原セブン」を全校体制で取り組み、落ち着いた学習環境をつくり、安定した学力を維持することができた。○授業改善について、校内研修や学力向上推進担当に主体的な企画運営をさせ適宜助言を行う事で、教職員の同僚性や研修への意識が高まった。○キャリア教育の視点を重点的に取り組む事で、自分で考え、計画して、行動に移す事を意識する生徒が増えた。 ●下位層の生徒や不登校生徒等の丁寧な分析と個々の生徒に応じた適切な支援についての組織的な取り組み。●各教科充実した実践を行っているが、教科横断的な内容について、組織的実践に向けた体系化した計画づくり

渡嘉敷村立渡嘉敷中学校
○「小中職員が同僚生を發揮し、日常の授業公開や校内OJT等の活用により、学び続ける職員集団として、お互いの授業改善に結びつけることができた。○生徒学校評価では、学習や授業に関する評価が高い。○地域資源の活用によって、生徒が主体的に意欲を高めて学習活動を行っている。 ●「主体的・対話的で深い学び」「問い」が生まれる授業の実現に向けた、更なる授業力の向上。●「指導と評価の一体化」に向けた、校内研修の充実と共通実践。●生徒の自己肯定感を高めるための授業の工夫や学校生活の取組の工夫。
座間味村立座間味中学校
○職員の意識改革の推進○「経験の浅い職員の成長○幼稚園小学部中学部の連携の充実○座間味スタイルの方向性の確立 ●更なる研究の推進●児童会、生徒会の自治意識の更なる高揚●「自ら気づき考え行動する」ための取組の強化及びさらなる意識改革
糸満市立潮平中学校
○全職員が一人一授業三参観の計画を立て、授業前後の研究会を実践している。○沖縄県版児童生徒質問紙の調査結果を通し、生徒の実態把握と授業改善に向けて取り組みが進んでいる。○学推・校内研チームを結成して、より研究を深めることが可能となる。メンバーは、研究主任・生徒会顧問・授業改善アドバイザーである。 ●学習評価の在り方、テスト改善について継続して研究を進める。●依然と低い自己肯定感を、どのように高めいか、さらなる取り組みを検証する。●低い数値となっている自学自習力の向上の取り組みを検証する。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教育実践や、カリキュラムマネジメントによる教科横断的な学習指導など、創意工夫を凝らした取り組みが行われている。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の猛威に巻き込まれ、教育活動等は、多大な影響を受けている。

それでも学校現場では、諸事情における児童生徒の「学びの保障」に向けた取組やSociety5.0及びWeb3.0のグローバル化や技術革新の急速な変化に対応したGIGAスクールの推進、ICTを活用した個別最適な学びが求められている。

今後は、アフター&ウィズコロナと向き合い、新たな学校生活の様式を構築して、さらなる「魅力ある学校づくり」の教育活動を展開するであろう。

引用：令和3年度「島尻地区学力向上推進実践報告書」

第3分科会

研究主題

よりよく生きるための道徳性の育成と健康で安全な生活を実現するための教育の充実

提案書仲間丈二	鏡原中学校
地区共同研究者 與那覇 覚	小禄中学校
” 宮 良 安 剛	北大東中学校
” 望 月 雄 紀	南大東中学校
” 比 嘉 清 喜	立金城中学校

1 はじめに

学校教育のよさは、集団の中で協働的な学びが行われ体験する場である。令和2年1月以来、コロナ禍でソーシャルディスタンスを遵守し「新しい生活様式」が求められてきた。その結果、探究的な学習や体験活動等、子ども同士、あるいは多様な他者と協働する学びが難しく、一斉授業になりがちで、生徒同士の活発な交流が十分でない教育活動が見られる。このような状況下、日常生活の場面を意図的・計画的に設定し、集団と個の基本的な在り方や道徳性を段階的に身に付けさせていくことが肝要であり、他教科と関連を図りつつ、校長として豊かな人間性と社会性を育み、より良く生きぬく意思や能力を育む教育の展望を論じ共有していきたい。

2 主題設定の理由

コロナ禍の情勢困難下、道徳教育を要に「集団と個の関わり」について考え、集団生活の充実を目指していこうとする意欲を高める教育活動実践をおこなっていく。

3 研究の視点

- (1) コロナ禍での新しい生活様式が求められる中での道徳的実践力育成の工夫
- (2) これまで以上に安心安全な学校が求められる中での教育活動推進への校長としての働きかけ

4 研究の実際

【那覇市立金城中学校（生徒数550名）】

(1) 本校の取り組み

本校は、那覇市の都市計画と学園都市構想のもとに設立された学校で、広大な敷地が確保されている。

「心身ともに健康な生徒」「自らよく考えて実践する生徒」「情操豊かで思いやりのある生徒」の3つを学校教育目標に掲げ、創立以来36年間にわたり文武両道と友愛の精神を貫いて来た。

「特別の教科道徳」についてはこれまで指導計画の改善や評価等に関する研修、研究授業の実施等継続して取り組んできました。本年度は道徳的実践力を育てる取り組みを授業や生徒会活動、ボランティア活動等学校生活全般を通して行っている。

① 計画的なローテーション授業の実施

昨年度は道徳の授業を固定せずに可能な範囲でのローテーション授業を実施していたが、計画的な実施に難があったため本年度から時間割を固定し、計画的な実施が可能となった。

② 「考え、議論する道徳」の授業づくり

道徳科の授業の中で、段階的な思考を毎回促し、対話を通して互いの意見を交流させながら、考えを問い直す授業実践を行っている。（校内研テーマと連動）

③ 「いじめなくそう友の会」

生徒会生活委員会の取り組みで、校内からいじめを無くすため、会員証を作成配布やポスターの掲示を行いいじめ取り組みの啓蒙活動を続けている。



会員証

④ 「自分たちで考える校則」

校則の見直しが話題となる中、生徒会が中心となってアンケートや学級討論・中央委員会で話し合い、生徒の要望書として取りまとめ生徒会から校長へ提出、1月から3月の試行期間を経て本年度正式に改訂が行われた。



⑤ 「牛乳0プロジェクト」

本年度生徒会はそれぞれの委員会の活動とSDGsを関連づけ活動を行っているが、給食委員会は毎日山のように残る給食の牛乳を減らそうと取り組んでいる。放送委員会と連携しての啓蒙活動や各学級の余った牛乳を他の学級に配るなど日々の活動を継続し、残量は1/10程となり、学年によっては0の日もある。

⑥ ボランティア活動の推進

「ボランティアカード」の活用や保護者と生徒共に参加する「花咲かそう会」の実施によるボランティア活動の推進を行っている。



(2) 成果と課題

① 成果

○道徳の時間を固定し、計画的なローテーション授業を行うことにより、指導内容の充実や「交流場面の設定」「ICTの活用」など校内研修と連動した取り組みが行えるようになった。

○学校における様々な活動を「生徒主体」を意識して取り組むことにより自己肯定感の向上や実践的な行動力の育成に繋がった。

② 課題

○コロナの影響により家庭や地域との連携を十分に行うことができなかった。

【那覇市立小禄中学校（生徒数710名）】

(1) 本校の取組

本校は、在校生710名を超える大規模校である。本来であれば各種行事や部活動を通して頻りに他者との交流・体験活動が実施されていたが、他校同様コロナ禍で中学校期の大切な学びの場が大きく制限された状況が続いている。そのような中、本校の課題である、不登校やいじめの改善をはじめ、規範意識の向上、体験活動の活性化に向けて全職員で共通理解、共通実践に取り組んでいる。

① 日常生活の安心安全を確立する

他者理解をはじめ人間関係を形成する力を育む交流・体験活動が制限されているが、本校の教育目標である「健康で自他の生命を尊重する生徒の育成」の実現に向け、道徳教育と平和教育、生徒会活動をリンクさせ「学校生活の安心・安全」を取組の重点に置いた活動に取り組んでいる。

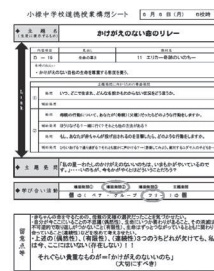
○平和教育

本校の平和教育は、例年であれば、悲惨な沖縄戦の体験者の体験談を、映像資料と合わせて直接お聞きする講演会形式の活動を通して、平和や命の大切さについて学んできた。安心・安全な学校生活の確立は、学校経営の一番の根幹であるが、前年度の、学校評価の中で「いじめ等がなく、安心してたのしく過ごせる」の評価が低かった事も

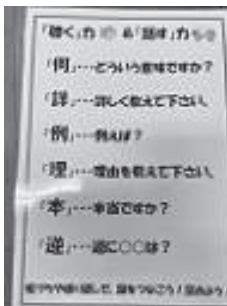
あり、「日常の学校生活を安心・安全に過ごせる事から、平和について考えよう」の視点で平和教育について取り組んでいる。生徒会中央委員と連携し各学年ごとに「いじめをなくそう」とスローガンを作成し学年フロアに掲示、校内放送で呼びかけるなど意識化を図っている。また、道徳、特活担当教師と連携を図り、「いじめをなくそう」の取組について指導案を作成し、全学級で授業を行った。



○道徳ローテーション授業
道徳教育の中心となる「特別の教科道徳」の授業の活性化に向け、本校では、今年度より学年職員によるローテーション授業に取り組んでいる。題材、指導観を含めた指導案づくりから事前に「授業構想シート」を活用して学年で共有する確認の場を設定し、授業実践している。



また、安心・安全な居場所として自他の思いが尊重し合える学級の雰囲気づくりを道徳の授業だけでなく、各教科でも「対話のルール」を意識した実践に努めている。



② コロナ禍の体験活動…他者理解を深めるために

諸行事や体験活動を通して他者との交流は、他者理解を含め他者と連携協働して課題解決を図る等の社会性を育む上、重要な取組であり、その学びを止めないよう職員で共通確認し工夫しながら活動を推進した。



(2) 成果と課題

① 成果

○学校生活の安心・安全が平和について考える
スタートとして捉え、道徳の授業の活性化や生徒会の重点取組として位置付け活動推進してきたことで、生徒の本校の課題改善への理解や職員の組織による適切な生徒支援への意識を高めることができた。教育活動全般でPDCAサイクルを生徒と協働で創り上げていくことは、より効果的な今

後の活動につながるものとする。

② 課題

- 生徒の人間関係形成能力や自己理解を高めるため、学校・家庭・地域が連携したより豊かな体験活動の工夫・充実。
- 不登校生徒への組織的対応の充実と学びを保障するための家庭との連携・共通理解。

【那覇市立鏡原中学校（在籍数651名）】

(1) 概要（学校紹介）

本校は1978年、小禄中一部分離と垣花中全員の生徒865名からなる学校としてスタートした。那覇市在の学校としては緑地、水域を伴った自然に恵まれた環境にある。創立44年を迎える現在、新校舎、新体育館、運動場整備を終え新生鏡原中として新たな歴史と伝統を築いていく気概にあふれている。

コロナ禍、集団と個の関わりが希薄となりがちなか中、「特別の教科道徳」の内容項目「C主として集団や社会との関わりに関する事」に視点を置き、道徳性の育成にむけ、道徳の教科書「あすを生きる（日本文教出版）」の関連項目を学習したあと、生徒ら自らが関連する活動を発案し、教師側がその他の教育活動と関連させて取り組んだ特色のある実践を2つ紹介する。

(2) 活動の実際

各学年道徳の時間において、内容項目「C主として集団や社会との関わりに関する事」を履修後、現在のコロナ禍の中だからこそ「必要なこと・できること」にしぼって生徒会がリードし素案をつくり学級学年での話し合いにつなげていった。素案の作成には、校長として「たたき台細案」を作成し、生徒の話し合いの道標となるようにはたらきかけた。

① しあわせの黄色いハンカチプロジェクト

家族愛、家庭生活の充実 (14)

郷土の伝統と文化尊重、郷土を愛する態度 (16)

ア 活動の目的

コロナ禍の中、行動自粛によって帰省できない方々への黄色いハンカチがもつ「メッセージ」と制限された日々の生活をおくる中、将来の自分へエールを送るために700枚のハンカチを掲揚する。

- ・コロナ禍の中での全校生徒参加、全校生徒共通の思い出を持たせ、帰属感を高める。
- ・活動の共通アイテムとして黄色いハンカチを用い、「想い」と「黄色いハンカチ」というキーワードの下、取り組み、黄色いハンカチをコロナ禍の学校生活のシンボルにする。
- ・年度中、今後の学校学年行事にも活用し、数年後の成人式までの「つながり絆」にする。
- ・社会的なメッセージ性等をもたせる。

- ・コロナ禍において、個人を含む学校で取り組みを行うことで、学校全体の一体感を感じさせ、この時代にしかできない「想い」を残す。

イ 教科等、PTAとの関連

- 道徳科：関連項目での学習
- 美術科：各自のハンカチデザイン画作成
- 家庭科：オリジナル郷土料理考案（オレンジページ掲載）
- 総合的な学習の時間：
 - ・ハンカチ作成及び掲揚

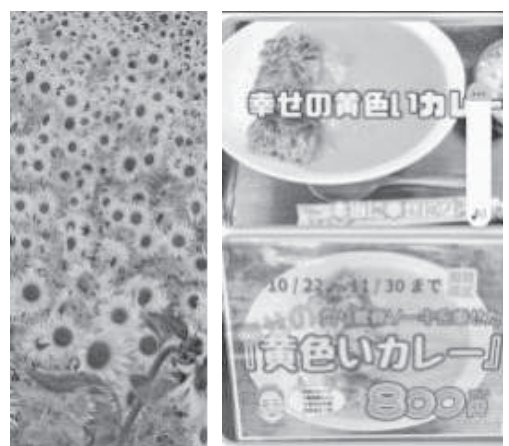
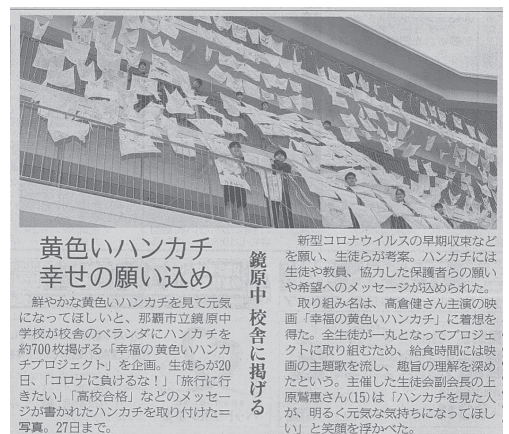


○PTA：

- ・ハンカチ縫製作業協力及び掲揚作業協力

○地域・その他：

- ・新聞に活動が掲載
- ・食堂がメニューコラボ「幸せの黄色いそば」
- ・農家さんによる「幸せの黄色いヒマワリ畑」



② 沖縄本島海岸における軽石除去作業

社会貢献、公共の精神 (12)

ア 活動の目的

2021年8月、小笠原近海海底火山噴火で多量

の軽石が沖縄の海岸線に漂着し、漁業やホテル観光業に大きな影響を与えた。生徒会の発案により、11月の



西原キラキラビーチでの遠足（全生徒）及び12月の本島内修学旅行（2年生）において、生徒による軽石除去作業をおこなった。

イ 教科等、地域との連携

- 道徳科:関連項目での学習
- 総合的な学習の時間
 - ・修学旅行事前学習
- 社会科：軽石漂流漂着による生活への影響
- 理科：火山、噴出物、海流について

(2) 成果

長引くコロナ禍の中、様々な行動制限がおこなわれ十分な教育活動もおこないにくく、集団と個の関わりが希薄になりがちであった。しかし新しい生活様式が求められる中「道徳の時間」を軸に、「今できること、今だからできること」を生徒らと一緒に模索し、上記の教育活動実践へとつなげることができた。さらに、校長として将来この時期を思い出したとき、負の想い出だけではなく「笑って話せる」活動となるよう、学校職員、保護者と協働で子どもたちの活動を支えることができた。

【南大東村立南大東小中学校（児童数87名・生徒数36名・計123名）】

(1) 概要（学校紹介）

- ① 南大東島は、沖縄本島から東へ約360km離れた太平洋上に浮かぶ、人口約1,200人の孤島である。緑に囲まれた自然豊かな島である。
- ② 教育目標の1つに「郷土を愛し、郷土を拓く子」がある。

(2) 「特別の教科道徳」に関する取り組み

- ① ローテーション授業の実施
- ② 校内研修の充実
 - ア 指導主事招聘授業研究会の実施
 - イ 「評価の在り方」理論研の実施
- ③ 道徳ノートを活用
- ④ 教材共有した特設授業の実施
- ⑤ 各教科・領域等との関連付けた取り組み

(3) 特色ある取り組み

- ① 豊年祭への参加（村主催）

郷土文化の保存、伝承発展に寄与する事を「ねらい」としているが、コロナ禍で2年間は実施できていない。（総合的な学習の時間との関連）

② 八丈島交流体験の実施（村教委主催）

コロナ禍で2年間中止を余儀なくされていた八丈島体験交流を、今年度は7月5日（火）～8日（金）の3泊4日で実施した。例年は中学1年生対象だが今回は体験できていない2、3年生を含めた中学校全体での参加となった。（総合的な学習の時間との関連）

ア 道徳科の内容項目との関連

- ・C主として集団や社会との関わりに関すること
- ・16郷土の伝統と文化の村長、郷土を愛する態度

イ 期待される効果

姉妹島である八丈島を体験することと八丈島町立の中学校との交流を通して、歴史的背景を学びながら、共通の伝統文化や生活、南大東とは異なる豊かな自然や独自の文化など、その魅力・よさの認識へ繋げる。そして、あらためて自分の住む島に対する愛情や誇りに気付かせることで、郷土の発展に寄与する児童生徒が育つと考える。

ウ 取り組みの実際

○縦割り4グループを編成

- ・南大東島紹介プレゼン班・三線班
- ・エイサー・踊り・大東太鼓班

○総合的な時間を活用した練習と準備

- リハーサルを兼ねた保護者向けの発表会
- 八丈島町立大賀郷学園大賀郷中との交流会



○八丈島学習・島内巡りの実施

○各宿泊施設でのマナー等

(4) 成果と課題

- ① 成果：発表後にはスタンディングオベーションをいただくなど賞賛され、子どもたちの自信や郷土への誇りの高揚を図れた。
- ② 課題：この交流で学んだことを今後活かしていくこと、今後の交流会の在り方を考えていくことが必要である。

5 おわりに

人格の完成を目指す学校教育の中核を果たす道徳教育を要として、日常の生活で様々な集団に所属した時に、その集団に適した人間としての在り方についても考えていくことが必要である。コロナ禍の情勢困難下に生きる児童生徒だからこそ、校長として望ましい「集団と個の関わり」を身につけさせ、集団生活の充実を目指していくこととする意欲を高める教育活動を牽引していく。

第4分科会

研究主題

自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める生徒指導とキャリア教育の充実

提案者	島袋勝範	(あげな中学校)
地区共同研究者	仲宗根政人	(伊波中学校)
"	鹿川義晃	(中城中学校)
"	山内ひとみ	(石川中学校)
"	大舩勝彦	(具志川中学校)

1 はじめに

平成30年6月に国会において議決された民法改正により令和4年4月1日から成人年齢が20歳から18歳に引き下げられた。

このことを我々校長はどのように捉えればよいのだろうか。

これまで18歳・19歳の国民は、民法や少年法において大人として扱われることなく、様々な点において保護・擁護されてきた。

しかしながら、民法改正による成人年齢引き下げによって、社会から1人の大人として見なされることになり、自己責任に基づく自己決定が求められることとなる。

そのことから、学校においては、生徒の自己指導能力をより育成していく教育活動の実践と推進が期待されていく。

本分科会では、生徒の自己指導能力の育成に向けた学校長の指導性について言及していく。

2 主題設定の理由

学校においては、不登校生徒への対応、いじめやスマホ等に起因するトラブルや問題行動への対処等多くの生徒指導に関する職務を抱えている。

生徒指導への学校の取り組みについては、組織としての対応が重要であることは言うまでもない。

その組織としての対応の原点には、生徒指導が学校教育の目的である教育基本法第1条及び第2条を目指す営みであることを忘れてはならない。

このことを具体的に進めていくためには、学校教育において、生徒自らが主体的に問題や課題に気づき、そのことに向き合う中で、自己の目標達成を目指して、主体的、自律的に考え、判断し、行動できるための「自己指導能力」の育成を実践していかなければならない。

このような観点から本ブロックでは、研究主題に迫る校長としての関わりについて、各学校における実践例を示しながら共有する。

3 研究の視点

本研究の視点は、2022年3月29日「生徒指導提要の改訂に関する協力者会議」の中で示された生徒指導の実践

上の視点を踏まえ、以下の4つの視点から研究主題へのアプローチを進めていく。

(1) 自己存在感の感受

生徒は、学校生活において学級や部活動など集団生活を通して学習活動に参加する。

その中では、時に「個」としての尊重されないという危険性が潜んでいる。生徒一人一人が個人として大切にされていると感じることは、学校生活をよりよく過ごしていくためには極めて重要である。

生徒が自己存在感を感受していくためには、生徒に対し自己肯定感や自己有用感を育むような教師の関わりや場の設定が大切である。

(2) 共感的な人間関係の育成

教師が学級経営、生徒会の委員会活動や部活動において生徒と関わりを持つ中で、その集団内で教師一生徒間、生徒一生徒間で互いに認め合い、励まし合い、支え合っている環境や雰囲気、いわゆる共感的な人間関係をつくっていくことは重要である。

そのためには、教師は支持的学級づくりや人間関係づくりをあらゆる場面で設定し実践していくことが求められていく。

(3) 自己決定の場の提供

生徒が上記(1)で示した自己存在感を感受するためには、授業の場面、係活動の場面あるいは生徒指導の場面等学校生活のあらゆる場面において自己決定させるしかけが必要である。

(4) 規範意識の醸成

生徒は、個人として尊重される一方で、集団の中で社会的存在として行動することが求められ、その中で自己実現を図っていく。

集団生活を送っていく上で、他者への配慮や必要最低限のルールを守っていくことは当然必要となってくる。

学校においては、そのための規範意識を醸成させるような教育活動を進めていくことは大切なことである。

4 研究の実際

(1) 具志川東中学校の取り組み（生徒数501名）

① 視点(1)について

生徒が自己存在感を感じる場面としては、授業や学級での係活動や生徒会の委員会活動、部活動である。教師はそのような場面において、生徒を励ましたり、生徒の活動のプロセスを価値づける等のボイスシャワーを多く活用することが重要である。

本校においては市教育委員会の取り組みの1つであるボイスシャワーについて、年度当初の校長の経営方針を職員と共有する中において明示するとともに、学校評価アンケートの教職員アンケートの項目の一つとして設定し、5月の段階で教職員に周知し、日常的な取り組みとして実践できるようにしている。

② 視点(2)について

生徒と教師、生徒相互の共感的人間関係を育んでいくためには、教師の発する言葉が適切に行われることが基本となる。

そこで本校では、4月の始業式の前日の校内研修において佐渡山美智子先生を講師として招聘し、教師の望ましい言葉遣いや表現の在り方について講話を聴く機会を設定した。

そして、適宜佐渡山先生の講義を振り返る場面を設定し、言葉の力の大切さを再確認している。

言葉の大切さに関しては、本校教育理念である「時を守り、場を清め礼を正す」の「礼」にいて具現化を図る上で、重要な要素の一つとして全職員で共有していきたいと考えている。

また、本校では令和4年度、5年度に市指定研究校として「いじめのない魅力ある学校づくり」について研究を進めている。その取り組みの一つとして市教育委員会の施策であるSEL-8Sの実践も共感的な人間関係づくりの育成に向けて試行錯誤している。

③ 視点(3)について

本校では、生徒の自己指導能力の育成や自己決定場の設定に向けて、「今、この時、この場で、自分は何をなすべきか。」を考えて行動するように、教師や生徒に繰り返し伝えるようにしている。

教職員評価面談の中でも、授業をもちろんのこと、生徒のあらゆる学校生活の中で、「今、この時、この場で、自分は何をなすべきか。」を繰り返し、生徒に伝え続けるよう教師に理解を求めている。

特に生徒指導の場面においては、このことが最も端的に求められることが多いので、生徒指導部会の中では常にそのことを生徒指導部の担当教諭とは共有している。

④ 視点(4)について

規範意識の醸成については、道徳や特別活動の中において実践している。

上述の③のSEL-8Sの実践や外部講師を招いての講話を通しながら、規範意識を高める取り組みを進めているが、今年度大きく方向性を変えたのが、「校則」の運用の見直しである。

本校では、「校則」そのものを抜本的に変更したり見直したりしてはいないが、教師の指導の場面において、生徒の自己指導能力の場、自己決定の場として捉えることを意識した「校則」の運用をするようにした。

外からの力によって自らの行動を振り返ったり、規範意識を高めさせたりするのではなく、正に「今、この時、この場で自分は何をなすべきか」を考えることを通して規範意識の醸成を図っていくことを目指している。

⑤ 今年度の成果と課題

みだしのことについては、本報告書の作成段階では十分な検証ができないが、年度を通した変容を見ながらPDCAサイクルを生かして次年度の取り組みに反映していきたい。

(2) 具志川中学校の取り組み（生徒数726名）

① 本校の現状

本校は週時程の工夫や特別支援教育における教育課程編成方針の見直しを進めた。また、生徒理解を根底にした生徒指導・教育相談を柱とした学級担任の生徒への声かけや保護者とのリレーションの再構築を行い、校内指導体制を改めることで学校が変容しつつある。

② 具体的取り組み

- ア 生徒指導・教育相談における生徒・保護者対応
 - 教師を主とした生徒とのリレーションの構築（ボイスシャワーによる自己肯定感の醸成）
 - 担任・保護者との間に関係職員(SSW・支援員等)を置くことで良好な関係性の構築が可能
 - 学校と関係機関（市関連機関等）との連携
- イ 生徒指導・教育相談部会受入れ体制の充実
 - 生徒の実態把握毎月のアンケート、Web-QUの実施
 - 部会の充実：週1回の部会開催と終了後の各部会報告書を作成し全職員回覧方式で確認の押印
 - 小中接続時におけるきめ細かな事前の情報連携（これまでの学校での様子や家庭状況、関係機関との関わり等の対応を詳細に作成し、情報共有）

○怠学非行系・情緒不安傾向生徒対処方針の確
認生徒に応じ個別ブースを設置、生徒の受入
れ対応。

ウ 特別活動における実践

○SEL-8Sを通した関わり

人間関係の基礎をなす社会的能力を育む活
動を実践継続中（年間計画作成、学級活動、互
見授業）

○生徒の規範意識の醸成へ

自己指導能力を意識した活動を各場面で実践

エ 生徒が中心となった自治的活動の推進

○学級活動と連動した全体班活動による充実

生徒会活動の取組を学級の話合い活動と連動

○学校行事を通した目的意識の向上

集団への所属感や連帯感を深め公共の精神
を養う

オ 特別支援教育の充実による指導体制の改善

○困り感のある生徒への情報収集・アセスメント

○学びの場の設定（進学・就労を見据えて）

○個に応じた教育課程の作成と見直し（支援計画）

③ 成果と課題

校内指導体制を改めることにより、生徒・地域・
保護者の信頼感へとつながった。今後は、学校課
題解決に向け学校の主体性・自立性をより発揮し、
学校力を高められるよう校長の指導性を発揮して
いきたい。

(3) 石川学校の取り組み（生徒数410名）

石川中学校では、「社会の中でより良く生きてい
ける力の育成」を掲げ、「自律し互いに尊重し合える
生徒、教育的愛情のある教職員、生徒と職員で作る
石川中」を目指している。その達成のために生き方
を深める生徒指導とキャリア教育の充実が大切であ
ると考える。

① 視点 (1) について

本校では行動のキーワードとして「GCET」を掲
げ、取り組んでいる。GはGoal(目標)、CはChallenge
(挑戦)、EはEffort(努力)、TはThanks(感謝)を意
味し、生徒の様々な活動が主体的な活動になる事
を目指している。また、活動後は振り返りを行い、
生徒個人の成長したことや嬉しかった事、達成感
を味わった事に着目した評価を行っている。さら
に、教職員から、結果ではなく過程に対しての「勇
気づけのボイスシャワー」を実践している。

② 視点 (2) について

生徒同士、また生徒と教師の共感的な人間関係
を育むためには、自分を大切にしながら、人のこ
とも思いやられる心の育成が必要である。そこで、
うるま市が推奨する「SEL-8S」子どもの社会性を

育て、怒りなどの情動のコントロールを学習する
(social and emotional learning)プログラムにつ
いて、理論研究と実践を全職員で取り組んでいる。

この学びを通して、自己への気づき、他者への
気づき、自己コントロールなどの社会的能力と、
問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能
力などの応用的な社会的能力を育みたいと考えて
いる。小中連携の授業研究として、6月に中学校
が公開授業を実施し小学校が参観、7月には小学
校が公開授業をし中学校が参観、授業反省会を实
施した。年間計画への位置づけや、校内研修を通
しての組織的な研修を、今後も実践していく。

③ 視点 (3) について

本校では、目指す生徒像にもう一つの視点「自
律」を掲げ、自己指導能力や、自己決定する力を
伸ばしたいと考えている。生徒に問題や課題が生
じたとき、教師はアドバイスはするが決定は本人
が行うという機会を繰り返し積み重ねていくこと
で、力を付けたいと考えている。

④ 視点 (4) について

授業での石川中学校「学びの姿勢5箇条」の徹底
や、全体集会や学年集会等での講話や、人権教育、
道徳等を通して規範意識の育成を行う。

⑤ 今年度の成果と課題

成果：SEL-8Sの組織的な取組み

課題：SEL-8Sについて小学校と連携した計画的
で継続的な実践や地域保護者への伝搬等を
通し、自己肯定感を高め、良好な人間関係
の育成に努めたい。

(4) 伊波中学校の取り組み（生徒数501名）

① 視点 (1) 自己存在感の感受について

ア 生徒会活動の自立・活性化

・毎月1回の生徒会専門委員会の活動の翌週に
学級活動の連動をねらいとして、朝の一斉係
活動の実施を行っている。

イ 生徒会主催のIHAグランプリ（パフォーマ
ンス大会）の実施

・毎年12月に、放課後の生徒会活動として歌やダ
ンス、演劇などを各個人、グループが舞台発表
をする。不登校生徒がボイスパーカッションを
披露するなど、生徒自身の存在感を満喫する催
しになっている。

② 視点 (2) 共感的な人間関係の育成

ア SEL-8Sの取組み

・うるま市が推進している「社会性と情動の学習
(SEL-8S)」の実践を実施している。年間指導
計画を作成し、年間10回程度道徳や特別活動、
総合的な領域の時間等の中で実施している。

- イ 朝の会での「イハトーク」の実施
 - ・朝の会の中で、テーマが書かれたカードを担当が引き、その内容でペアになって1分間トークを行う。様々な内容があるので、人間関係の形成に役立っている。

③ 視点（3）自己決定の場の提供

- ア 放課後補習の時間課題設定について
 - ・毎週水曜日の放課後に15分間の補習の時間を設けている。課題を生徒自身で決定し、教え合いや教師への質問等、自由な学習時間としている。

イ 制服選択制の定着

- ・2年前から制服選択制を導入し、定着が図られている。

④ 視点（4）規範意識の醸成

- ア 授業スタイルの徹底
 - ・伊波中授業スタイルを継続して実践できている。特に授業のふり返りを文章記述させることを徹底している。

イ 情報共有の充実

- ・生徒個々に応じた指導・支援を行うため、生徒支援部会や学年会等の充実を図っている。

⑤ 今年度の成果と課題

（成果）SEL-8Sの取り組みや日頃の道徳の授業等を通して、生徒同士の人間関係が醸成されてきた。

（課題）コロナ禍の中、行事等を通じた人格形成の機会が少なくなっている。感染対策を万全にしながらできることから取り組んで行く必要がある。

(5) あげな中学校の取り組み（生徒数803名）

本校では、「チャンス・チャレンジ・チェンジ」、「いいこといっぱい、あげな中」をスローガンに、生徒会自ら、よりよい学校生活に向けた、あげな中十箇条を掲げ、取り組んでいるが問題行動や不登校、SNSに起因するトラブル等は後を絶たない。課題解決に向けた一方策として、各校長のリーダーシップと連携の下、本市が推進する社会性と情動の学習SEL-8s等、小中で足並みを揃えた取り組みを継続的に実践することで自己指導能力等を育成する。

① 視点（1）自己存在感の感受について

- ア うるま市の重点取り組み事項である勇気づけのボイスシャワーの実践について学校経営方針と併せて共通理解を図るとともに授業参観、研究授業、行事、職員・生徒アンケート等から取組状況を共有、確認して意識的に取り組ませている。

イ 主体的な生徒会活動の活性化

コロナ禍にあっても生徒会の自主性を重んじ、親睦交流デイとしてドッジボールやカードゲーム、カラオケ、お笑いなど、生徒の個性あふれる催しで自己肯定感を高めている、また、リーダー研修会では企画力を高めるための内容に取り組みせ、異学年による学習交流やスポーツ大会等の実現可能な企画が提案されるなど主体性等の向上が図られた。

② 視点（2）共感的な人間関係の育成について

自己への気づきや衝動のコントロール、協働での作業、自分自身や周囲を思いやることができるようになると言われる「社会性と情動の学習SEL-8s」の計画、進め方等について研究主任とすりあわせながら効果的な実践へとつながるよう支援している。

③ 視点（3）自己決定の場の提供について

学校行事や生徒会活動における自己決定の仕掛けも大切だと考えるが日々の主体的・対話的で深い学びの授業実践の中で生徒自ら問題解決の方法を考えるなど試行錯誤を繰り返しながら自己決定の場を意識的に作り出し、経験を積み重ねていくことも重要だと考えている。校長として教師の授業実践力の向上を図る取組みを進めている。特に教科部会の充実を促している。

④ 視点（4）規範意識の醸成について

道徳や特別活動の充実、いいこといっぱいあげな中十箇条の推進をはじめ、学習規律を整える小中連携の取組み、市共通実践事項「あいさつ、返事、後始末」の徹底等を日々の教育活動や講話等において呼びかけながら校長自身も毎朝のあいさつ運動を実践し、規範意識等の醸成につなげている。

⑤ 今年度の成果と課題

（成果）特に成果としてあげられるものはないが「社会性と情動の学習SEL-8S」の授業実践まで取組めたことは今後の成果につながる。

（課題）SEL-8Sの継続的な取組。家庭との連携。

5 おわりに：成果と課題にかえて

本分科会では、研究主題の割り当て決定を受け、各学校における実践を進めてきているが、実践期間が実質2ヶ月ということもあり、具体的な成果と課題を示すことができない状況である。

今後は、各学校で研究主題に沿った学校経営を進めながら分科会としてその成果と課題を共有しながら、今後の学校経営に生かしていきたい。

第5分科会

研究主題

多様化した教育課題に対応できる学校経営と教職員の育成

提案者 垣花 秀明（久松中学校）

地区共同研究者 狩 俣 典 昭（下地中学校）

1 はじめに

宮古島は沖縄本島から南西に約300kmの距離、北緯24～25度、東経125～126度に位置し、大小6つの島（宮古島、池間島、来間島、伊良部島、下地島、大神島）で構成されている。

1992年に宮古島と池間島を結ぶ池間大橋、1995年に宮古島と来間島を結ぶ来間大橋が開通し、2015年には全長3,540mの伊良部大橋が開通した。伊良部大橋は通行料を徴収しない橋としては日本最長の橋である。

2005年（平成17年）に旧平良市、城辺町、下地町、伊良部町、上野村の5市町村が合併して現在の宮古島市が誕生した。宮古島市の総面積は204km²、人口約5万5,000人で、人口の大部分は平良地区に集中している。市町村合併後、旧町村部では人口の減少と少子化の影響で児童生徒数が減少し、合併当時、小学校18校、中学校14校、小中併置校2校、合計34校であった学校数は、宮古島市教育委員会の学校規模適正化方針により、2022年度は小学校14校、中学校10校、小中併置校1校、小中一貫校1校、計26校と学校統廃合が進められてきた。

2 主題設定の理由

中学校においては、令和3年度から今次学習指導要領が本格実施となり、「社会に開かれた教育課程の実現」、「主体的・対話的で深い学びの充実」、「カリキュラムマネジメントの確立」が求められている。また、GIGAスクール構想による児童生徒一人一台の端末配備が現実となり、授業や学習そのものが大きく変わろうとしている。さらには新型コロナウイルス感染症拡大の影響も加わり、学校が対応しなければならない教育課題はますます増加し、多様化の様相を呈している。

このような中、学校経営を円滑に進めていくためには、教育課題に柔軟に対応できる実践的指導力を持つ教職員の育成することが重要になってくる。そのためには、校長がリーダーシップを発揮して学校の教育活動の質を高めると共に、それぞれの教師の校務分掌上の役割に応じた主体的な取り組みを支援していくことが大切である。そこで本分科会では、学校における具体的な研修の取り組みをもとに、教職員の専門性と指導力の育成に向けた研修の在り方について研究を推進する。

3 研究の視点

学校が直面する多様な教育課題の解決に向け、教職員の専門性と指導力の育成を図ること。そして、新たな課題への対応力、実践力の育成を図るために次の2つの視点において研究を推進する。

- (1) 教職員の資質・指導力、専門性を高めるための校内研修の活性化について。
- (2) 新たな教育課題に対応するための研修と実践力の育成について。

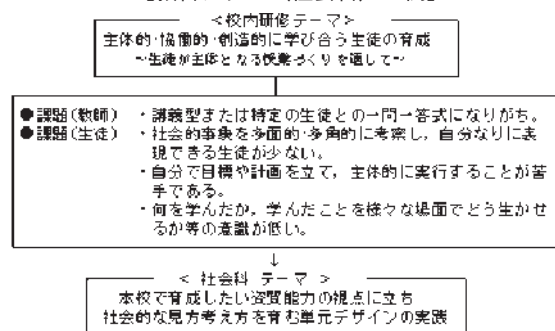
4 研究の実際

- (1) 教職員の資質・指導力、専門性を高めるための校内研修

① 組織的な授業改善

校内研修（研究）のテーマ「主体的・協働的・創造的に学び合う生徒の育成～生徒が主体となる授業づくりを通して～」を受け、各教科担当教員が「教科プラン」を作成し、各教科毎に授業改善に向けての取り組みを行う。

【教科プラン（社会科）の例】



実践（手立て）	仮説 ※本学は本校で育成したい資質能力（ ）は重点目標
① 単元を通して生徒が探求し続けたいと思う単元を置く「問い」の開発。	単元で重要になるキーワードを提示し、生徒と教師でそのキーワードについて探求したいことをいくつか生徒に選ばせることで、生徒が主体的に探求し続けたいと思うであろう。
② 「問い」や課題に対し、自力学習や協働学習で調べた内容を図や文章にまとめる活動の充実。（創造）	個で熟考する時間を確保し、考えを記述した図や文章について他者と交流する学習場面を設定する。この活動の充実によって深い学びへとつながるとともに、思考・判断・表現力または創造する力（創造）が育まれるだろう。
③ 「問い」や課題の追究で、資料等を多面的・多角的に読みとることや、友達や先生の考えを取り入れる等、自ら粘り強く思考する活動の充実（挑戦）	社会的事象に関する課題に取り組む際に、教師を頼るのではなく、教科書やノートを何冊も読み返したり、協働学習を通して多くの友達から学んだりする等の活動を充実させることで、難しい課題に対しても自分なりに粘り強く調整して主体的に学び、課題を解決しようとする力（挑戦）が育まれるだろう。
④ 毎時間の自分が学びを振り返りに記入して、単元の振り返りやその他の様々な場面で生かそうとする活動の充実。（自立）	単元を通して、どの資質能力を意識して課題解決に励んだのか、また、本時で学んだ社会的事象は単元の問いや将来にどうつながるのか等、本時または単元末の振り返りに記述させることで、主体的に様々な場面で学んだことを生かそうとする力（自立）が育まれるであろう。

このように、各教科毎に授業改善に向けた計画（教科プラン）を立てて実践研究に取り組む。そして、その取り組みを検証するための自己申告授業等を実施し、授業観察後の管理職や同僚職員との協議により、さらなる改善に向けて研究実践を重ねていく。

検証授業

研究実践事項	期 日	授業の ○成果・●課題
自己申告授業 ① 3年公民	月 日	○課題に対して、生徒の主体的な探究や考えを他者と共有し合う姿があった。 ●自分が書き出した答えを他者に伝える際、根拠を挙げて論理的に説明したり記述したりすること。
自己申告授業 ② 2年地理	月 日	○生徒が主体的に単元を置く問いの考えを記述していた。また、「学びを深める」という目的を明確に持って、他の生徒と主体的に意見交流をする場面があった。 ○単元の見直し振り返りシートを積極的に活用して、単元を置く問いの答えをまとめる生徒が増えた。 ●単元の見直しをもっと生徒に意識させること。（「置く問い」をまとめるために毎時間どのように振り返るかなど）

成果・課題・対応策（抜粋）

○成果・●課題	対応策
○単元プランシートを生徒の振り返りシートと連動させた活用で、生徒・教師ともに単元の目標や評価基準、身につけるべき資質・能力が明確になり、見直しを立てて単元の学習ができるようになってきた。 ○どの授業においても、主体的・対話的で深い学びのある授業をめざして疑問や授業の展開を工夫することで、授業改善が定着してきた。 ●単元を置く問いの追求をまとめるために、単元を通して毎時間どのように学習していくか見直しを持たせること。 ●単元を置く問いを「自分事」として捉え、単元を通して追求したいという動機付けを持たすこと。	・エリア研・中社研・校内研等で先生方の実践例を学ぶ。 ・単元毎に置く問いを設定し、単元を通して置く問いを追求していくためには、見直しを持って学習することが大事であることを、生徒達に浸透するまで粘り強く実践する。

2学期後半（12月）には、その成果・課題を持ち寄り、共有することで教職員相互の授業づくりにおける資質・能力や専門性の高まりを図りつつ、学校全体の改善につなげていく。

3学期以降は、全体共有した成果・課題をもとに、各教科毎に次年度に向けて教科プランの見直しを行い、PDCAサイクルによりさらなる授業

改善を目指す。

② 各学年所属職員による道徳ローテーション授業の実施

各学年所属教員（管理職を含む）により、学年2クラスの道徳授業をローテーションで実施する。学級担任だけでなく、同学年所属の教師間で授業づくりや発問の工夫のアイデアを共有したり、1つの題材を2回指導することで、指導の改善が行いやすくなったりする効果に加えて、学級担任の負担軽減にもつながっている。

③ 特別支援教育研修会

学校においては、特別支援学級の生徒のみならず、通常学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への支援のあり方、その子と周囲の子ども達との良好な関係性（支持的風土）づくりが大切である。

そこで、外部の専門家を招聘して次の2つの研修会を行った。

ア 通常学級における特別な支援を必要とする子ども達の理解と支援体制の構築についての研修会



イ 運動療育を活用した特別支援教育指導員による研修会



いずれの研修会でも、支援を要する生徒の見立てや、その特性に合わせた支援方法について学び、教師の専門性を少なからず高めることができた。

(2) 新たな教育課題に対応するための研修

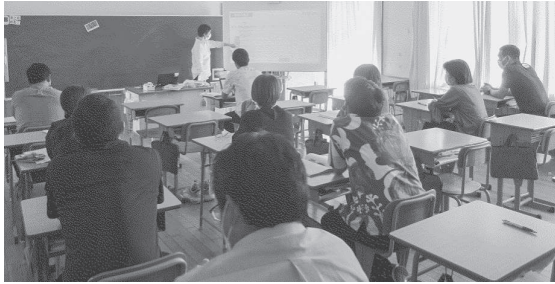
① 授業におけるタブレットPCの活用についての研修

本市においては、令和3年3月に市教育委員会より全小中学校へ児童生徒一人一台のタブレット型端末（Chromebook）の配備が完了し、令和3年4月より本格的な運用がスタートした。

生徒用端末を学習活動で効果的に活用していくためには、Googleのアプリケーション活用スキ

ルを高めていく必要があるが、個々の職員間に大きなスキルの差がある現状が見られる。

そこで、宮古島市立教育研究所で研究教員として授業におけるICTの活用に係る長期研修（6ヶ月）を終えた本校教諭を講師として、クラスルーム、ドライブ、フォームス、スプレッドシート、スライド、ジャムボード等の活用事例の紹介と、協働学習や振り返りシートの有効活用について情報共有を行った。



関心の高い教師同士は、普段から情報交換を行い、スキルを学び合っているが、そうでない教師達もこの研修を通して具体的な活用方法を知り、関心が高まったようである。

② 外部人材活用による情報モラル講習会

スマートホンやインターネットを利用する際の良さや危険性を伝え、より良い使い方や健康への影響についても考える機会となった。

教師も生徒と一緒に講話を聞き、今後の生徒への対応や指導について考えることができた。

ア サイバー犯罪防止講話

講師：宮古島警察署生活安全課職員

イ 情報モラル講習会

講師：子どものスマホ・スマイル協議会
代表 高宮城 修氏

③ 大学生との遠隔プログラミング学習

琉球大学教育学部の岡本牧子准教授と本校技術科教諭が連携し、以下のような協働実践授業を実施した。

○琉球大学教育学部の教員養成課程の学生と中学生をWeb会議システムzoomミーティングでつなぎ、大学生1人につき中学生2人のチームを作る。



○大学生の指導を受けて中学生が作成した遠隔プログラミング操作により、中学校の教室から大学の部屋にあるロボットカーを走らせ、その走行タイムを競うという画期的な授業であった。

プログラミングの学習については、本市の中校においてまだまだ実践成果が上がっていない中で市内の各中学校の技術科教諭にも授業見学参加を呼びかけ、良い実践授業となった。

また、本市には大学や専門学校がなく、普段大学生と交流する機会がない中学生にとっては、大学生から直接指導してもらったり交流したりすることができ、キャリア教育の面でも非常に有効な取り組みであった。

④ 新型コロナウイルス感染症に対応する取り組み ア オンライン講話

本校では、6月に外部人材を講師に招聘してキャリア講話を実施する予定の日が市の一斉臨時休業の期間に含まれてしまった。その対応について職員で話し合った結果、Google Meetを使って講話を実施することにした。講師の方に学校へ来ていただき、全校生徒150名は家庭で各自の端末からオンラインで講話に参加するという方法をとった。教職員も教室や職員室等各自の教師用端末から参加した。



当日はトラブルへの対応に備えて、市教委の情報担当職員とICT支援員にも応援に来ていただいた。

初めての試みで生徒達も少し緊張気味だったが、講話に集中し講師の呼びかけにチャットで反応したり、途中で質問したりする生徒も出てきた。体育館での一斉対面形式の講話では見ることのできなかつた生徒の反応が興味深いものとなった。講師の方も生徒達の参加態度にとっても満足したようだった。

この講話の実施をきっかけに、臨時休業終了後もコロナの感染状況等を考慮しながら、講師は別室で、生徒は教室で電子黒板や各自の端末を利用してオンライン講話を実施するようになった。

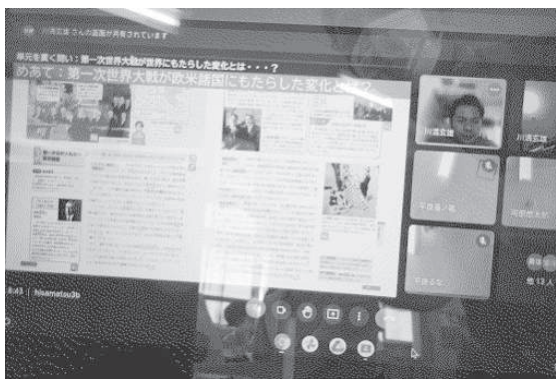
イ 保護者説明会

修学旅行についての保護者説明会も、各家庭で親子一緒にオンラインで参加する方式を取りコロナへの対応を含めた旅行の実施方法についてアンケートを行った。その結果、九州への旅行ではなく、宮古島内で修学旅行のプログラムを組むことに決定した。

ウ 逆オンライン授業

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、生徒の中にも感染したり、家族の感染により濃厚接触者となったりして登校できなくなる生徒が出てきた。そのような生徒の学びを保障するためにオンライン用の端末を各学級に1台もしくは2台設置して、Google MeetやClassroomを使って可能な限りオンライン授業を実施した。

そういう中で、家族に感染者が出て、教師が濃厚接触者となり、出勤できなくなるケースが出てきた。その際、場合によっては生徒達は教室、授業者（教師）は自宅から逆オンラインで授業を行うケースも出てきた。



そのクラスを廊下や教室後方でそっと授業観察すると、発問やめあての提示、生徒が個で学ぶ場面、ペアやグループで協働しながら学ぶ場面、Classroomで配布されたワークシートを記入したり、まとめの文章を考えたりしながら、しっかりと授業が進んでいく。多くの生徒が振り返りシートまで記入して授業を終えることができた。

これまでの教師の「教科プラン」の実践による成果を確信することができた。

5 成果（○）と課題（■）

- 「教科プラン」の取組みで、単元プランシートを活用することで、身につけさせたい力や評価規準等を明確にし、授業改善に繋げることができた。
- 全職員で授業づくりの振り返りを行うことで、教科の枠を超え、成果や課題を共有できた。
- ICT活用に関するスキルアップにより、授業や業務等でのタブレット端末の利用幅が広がってきた。
- 外部人材の活用により、情報モラル、特別支援教育における合理的配慮等、多様な課題に対する教師の学びを深めることができた。
- 学級の支持的風土醸成、学びに向かう集団づくりの工夫
- 授業改善に向けた共通実践事項の設定
- 年間を見通した研修会の計画立案
- 学校課題解決への参画意識を高める工夫

6 おわりに

社会の大きな変化に伴い、ますます多様化、複雑化する教育課題に対応していくためには、教職員の資質能力の向上が必要不可欠である。生徒の可能性を引き出す個別最適な学びや協働的な学びの実現に向けて、教師の専門性を高め、授業改善を推進するための校内研修の充実については、校長として学びながら、今後も真摯に取り組んでいく必要性を痛感している。

また、コロナ禍における対応を含め、円滑な学校経営を推進するためには、校長の意向のみではなく、教職員個々の役割遂行や課題解決へ向けての参画意識とアイディアが必要である。そういう意味で校長のリーダーシップとは、日頃から教職員とコミュニケーションを取り、様々な課題への対応に向けて、職員がその力を主体的に発揮しやすくなる環境を整えておくことではないかと考える。

第6分科会

研究主題

地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能強化
 学校と地域が連携・協働する「チーム学校」の構築のあり方

提案者	具志堅 勝 司	(東江中学校)
地区共同研究者	比 嘉 克 章	(伊豆味中学校)
"	金 城 健 一	(久辺中学校)
"	新 垣 博 文	(国頭中学校)

1 はじめに

近年、不登校、いじめ、SNSに起因する問題をはじめ、学校が抱える課題はより複雑化、多様化している。生徒をより良く育て、これからの時代をたくましく生きていく力を育成するには学校のみならず社会総がかりで教育を進めていく必要がある。そのためにはスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、相談員等専門性を持つ人々や地域との連携・共有が不可欠である。

また、コミュニティ・スクール等を通して地域でどのような生徒を育てるのか、何を実現していくのかを共有し、学校・家庭・地域が一体となって地域社会とともに教育を進めていくことが求められている。校長は「チーム学校」として教育活動に取り組む体制を創り上げ、学校のマネジメント機能の強化、教職員個々の力を発揮できる環境整備をし、家庭・地域・関係機関との連携・協力を一層強く推進していく必要がある。

本研究では、各学校の実践例をもとに、研究主題「地域や専門機関との連携・協働による『チーム学校』の実現とその機能強化」の視点から協議題に迫る具体的な方策を校長の関わりを通して研究を深めていきたい。

2 主題設定の理由

社会の大きな変化の中で、学校や家庭、地域のあり方やその機能も変化してきた。近年、家庭や地域の教育力の低下などが指摘される一方で、保護者や地域の自発的な意思を尊重しながら、新たな連携協力の仕組みを構築し、関係者が一体となって取り組む必要がある。

その一つにコミュニティスクール（学校運営協議会・以下CSとする）があり、さらに部活動の在り方や様々な地域人材等との連携・協働を通して、保護者や地域、関係機関を巻き込み、教育活動を充実させていくことが求められている。

このような視点から協議題に迫る具体的な方策を校長の指導を通して究明する。

3 研究の視点

- (1) 各学校の地域と連携した生徒支援の実践事例をもとに、今後のチーム学校の在り方や校長の指導性について研究する。

- (2) 地域等の人的・物的資源の効果的な活用。

- (3) 学校・家庭・地域が目標・ビジョンを共有しいかに推進していくか、その連携の在り方を研究する。

- (4) 学校教育目標具現化のための効果的な地域連携の在り方。

4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

〈実践例1〉名護市立久辺中学校（全校生徒数73名）

(1) 学校の実際

本校は昭和23年に創立された、全校生徒数73名、教職員数17名の小規模校である。

生徒は、比較的小となしき積極性に欠ける面があるが、生徒間の仲は良く相手を思いやる生徒が比較的多い。学校課題は、確かな学力の向上であり、学力面においては個人差が大きく二極化が進んでいる。自己肯定感を高めるため、全教育活動において生徒の活躍の場を意識的に設定する取組を「チーム学校」として全校体制で行っている。また、家庭・地域・関係機関との連携や協力を強化し生徒支援を推進している。

(2) 学校の取組

① 地域見守り隊との連携

登校・下校時間にあわせて、老人会を中心とする地域の方々が正門の横断歩道付近等、校区内5カ所で生徒の登下校時の安全を見守ってもらい、その都度、学校との情報交換を行っている。

② 児童養護施設との連携

校区内にある児童養護施設と連携して毎月1回、施設長、課長と小中管理職で情報交換会を行なっている。本校には各学年3名程度の割合で施設入所生徒が在籍している。それら生徒について共通確認を取りながら、指導や支援を展開している。

③ 久辺中学校区CS運営協議会の設置

令和2年度から2年間久辺中学校区のCS準備期間として、令和4年度からCS運営協議会を開催し地域と学校の連携を推進する。また、協議会では委員による小中学校での授業参観や学校評価への意見交換を通して地域の子どもの像の共通理解を図っている。

④ 久辺中学校区地域連携協働活動

学校周辺の教育機関（沖縄工業高等専門学校、国際海洋環境情報センター、名護市マルチメディア館）と連携して、施設見学、出前授業の実施、職業人講話等を計画し、各担当が専門分野を生かしてキャリア教育を推進している。

(3) 校長の関わりと指導性

- ① 地域関係機関との連携に向けての共通理解を自ら積極的に行い、連携・協働体制の確立を図る。
- ② 地域連携担当教師の育成と地域関係機関との具体的な連携に関する連絡・調整の充実を図る。
- ③ 学校便りの定期的発行を实践し、学校行事や生徒の活躍、活動状況を地域へ周知する。

【CS協議会】【地域見守り隊】



【CS協議会】



【地域見守り隊】

(4) 成果と課題

① 成果

- ・学校が地域や専門機関との連携や協働する意識を持つことによって、地域と学校の課題が認識され、地域施設の有効活用や地域の協力や支援が得られるようになった。
- ・校長の地域連携の意識が高まると、教職員にも浸透し、授業等の教育活動全体を通して地域人材の活用の意識が高まった。
- ・CS協議会等を通して、地域や学校の課題が共有され、それを改善する意識が高まった。

② 課題

- ・学校と地域との連携に向けての意識に温度差があり、当初の計画による連携や協働の実践が停滞することがあった。
- ・今年度は、コロナ感染防止の為、校外での地域活動や話し合いの実施が難しかったため、状況に応じた実践やICTを活用した取組のスキルを高める必要性を感じた。

〈実践例2〉本部町立伊豆味中学校（全校生徒数20名）

(1) 本校の実態

本校は、山間集落の一区一校の小中併置校である。各学年1学級、特別支援学級（知的、情緒）2学級である。地域では「わった一学校」の気持ちが強く協力的である。また、教育委員会を中心に学校への支援体制が整っている。その反面、地域や専門機関と学校が有機的な繋がりが弱い。生徒は素直でまじめ、学習へ

前向きに取り組む生徒が多数である。一方、主体的な活動や粘り強さやたくましさ欠缺、自分の考え意見を伝える力に課題がある。そのため、小規模校の強みを生かしながら課題解決を図る学校経営にあたる。

(2) 学校の取組

- ① グッジョブ協議会との連携（キャリア教育の推進）本部町を支える人材づくりをめざすグッジョブ協議会と連携し、キャリア教育の一環として職場体験学習に取り組んでいる。これは、目標を持ち生き生きと学ぶ生徒の育成をめざし、夢や希望を育む取組の一環ある。具体的には、はじめに「動機づけ」を行い、人はなぜ働くのかについての講演を行った。次に「企業人講話」「職場体験」「発表会」へと続く。



【グッジョブ協議会による企業人講話】

② スクールソーシャルワーカーとの連携と推進

全幼児児童生徒62名中支援を要する子ども達が約15名ほど在籍する状況である。そのため、学校経営の重点の一つに教育支援体制の構築がある。週1回の運営委員会、月1回の教育支援委員会の定期開催を実施している。町のSSWには随時、学校訪問をしていただき、子どもの見立てや保護者や教員との相談体制、教育支援会議の参加や校内研修の講師を務めている。

③ ICT指導員の活用

本部町は、各学校1名のICT指導員が週1回の割合で学校訪問する。GIGAスクール構想の取組もあり有効活用にも努めている。支援内容として、ICT操作やトラブル支援、T2としての授業支援、学校HP支援、校内研修の講師などである。

④ 学習生活支援員や学力向上推進教師の活用

本校は教育支援を要する子ども達の割合が高い。そのため、組織体制の強化を図り、困り感のある子ども達への支援を実施している。

(3) 校長の関わりと指導性

- ① 学校経営方針を明確にし、学校課題解決のために随時「学校グランドデザイン」を活用して外部支援者と学校経営の繋がりを伝え、有効活用を図っている。
- ② 学校教育全般を定期的にまとめた冊子「伊豆味校の教育」を全職員に随時示し、教育効果の見える化を図る。

- ③ 外部人材活用と学校課題解決を繋ぎ、実効力の高い教育活動になるよう指導助言を行っている。
- (4) 成果と課題
- 地域関係機関との連携を図ることで学校課題解決に繋がった。
 - 外部人材の有機的な活用に向け組織体制の構築が図られてきた。
 - コロナ禍で上記以外の外部人材を積極的に活用することができなかった。

〈実践例3〉名護市立東江中学校（全校生徒数262名）

(1) 本校の実態

本校の生徒は、全体的に人懐っこく素直である。その反面、互いの思いをきちんと伝えられず、関係を悪化するケースも少なくない。本校生徒の学力は、入学時より既に「学力の二極化」の傾向を示す。また「特別支援学級6,通級指導教室1」あり、個々の生徒の困り感への対応も本校の大きな課題である。

本校は昨年度からCSがスタート。本校が中心となり校区内小学校2校と共に学校と保護者、地域住民等が学校の運営に参画し、地域とともにある学校づくりを進めている。

(2) 学校の取組

① CSの導入（2年目）

ア 学校運営協議会の開催

CS制度化の背景・導入後の期待される効果・CSに期待される役割や今後の流れについての確認を行った。

イ 熟議の開催

多くの当事者(保護者、教職員、地域住民等)が集まり、1回目は「15年後の名護市」について議論を深めた。2回目以降、何を実現して



【第1回熟議】

いくのかという目標・ビジョンを共有するために「熟議（熟慮と議論）」を重ねていく。(R4年度1回目は生徒も参加)

② 地域の「ヒト・モノ・コト」をいかした効果的な教育活動の推進。

本校では、「子どもの関心や意欲を喚起する。」「教員にはない専門知識・技能が学習できキャリア教育にもつながる。」等のねらいで、地域の人材・学習素材を生かした授業実践に取り組んでいる。市教委のキャリア教育コーディネーターのお力添えをいただきながら、地域の教育資源（「ヒト」「モノ」「コト」）を生かした教育課程の質の向上（＝社会に開かれた教育課程）を進めている。（職業

人講話、職場体験、Catchyour Dream、博物館「名護学習会」、社会科授業「防災」での活用、部活動における外部指導者の積極的な活用等々）

- ③ 特別な支援を要する生徒の情報連携と行動連携
学校だけでは対応しきれない生徒の問題行動に対して、関係機関と協力し、問題解決のために相互支援をするために、SSW・スクールカウンセラーを交えての話し合いを毎週実施している。対応策を協議し、必要な関係機関との連携を図っている。

(3) 校長の関わりと指導性

- ① 目標や重点実践事項の共通理解、共通実践（学校経営・運営ビジョン作成への教職員の参加の促し、体制づくり）
- ② 職員への周知・理解（目的・目標等の明示、共通理解に向けた説明、指導・支援等）と力を発揮できる環境づくり
- ③ P T Aや地域との連携、協働の推進（積極的な交流による協力体制づくり、学校への理解を深めるための学校便り・HP等広報活動の推進）

(4) 成果と課題

○コロナ禍の中であったが、市教委の協力を得ながら、総合的な学習の時間を主に、各教科等で外部人材の効果的な活用が図られた。

○教職員の「CS・熟議」への理解が深まってきた。
○関係機関との連携により、支援の必要な子供たちへのアプローチの幅が広がり、改善する事案が増えた。

●保護者、地域住民のCSについての理解へのさらなる取り組み。

●CSの持続可能な組織体制づくり

〈実践例4〉国頭中学校（全校生徒数125名）

(1) 学校の実態

学校教育目標「進んで学びよく考える生徒」・「人権を尊び支え合い助け合う生徒」・「心身ともに健康でたくましい生徒」のもと、知徳体のバランスの取れた生徒、郷土に愛着と誇りを持ち持続可能な社会の創り手となる生徒育成を目指している。

そのために、職員の共通理解を図り、保護者や地域にもめざす子供像を発信し、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めている。

(2) 学校の取り組み

- ① 教師との連携・協働による地域人材・機関の活用
村教育委員会と連携し「チャレンジウィークin国頭」（職場体験）を行っている。今年で22年目を迎え、年を重ねるごとに村内業者の協力も広がり、地域が一体となって子どもたちを育てていこうする気運の高まりにも期待ができる。

なお、事業所訪問前のアポイントとりや事前打ち合わせなどをした後に体験を行う。事後学習は、業者を招待しての報告会を行っている。

② 文化財保存調査委員との連携

1学年のくんじゃんタイム（総合的な学習の時間）において、村文化財調査委員長を招聘し「国頭村の歴史講話」を毎年行っている。国頭村の歴史や先輩方の功績を知ることによって身近な地域を見つめ、郷土についての興味関心を高めることを目的としている。また、学芸員と連携した、やんばるの森についての講話や自然体験学習も実施している。



【学芸員と連携した自然体験学習】

③ 行政（村教育委員会）との連携

居場所づくり事業の一環として、中学校3年生を対象にラストスパート塾（無償）を開催している。

一般社団法人教育振興会に講師を依頼して、村のふれあいセンターで週3回程度学習している。また、今年度より、村雇用の学習支援員や学生ボランティアによる放課後学習会や夏休み学習サポートウィークも開設した。

④ 村福祉協議会との連携

福祉課、社会福祉協議会及び教育相談委員と連携し、不登校や登校しぶりの生徒たちの居場所として、スマイル☆キッズルームを開設。園庭で異学年同士仲よく遊ぶ様子や登校しぶりのあった生徒が居場所として継続して利用したことにより、学校に登校する回数が増えたケースもある。

(3) 校長の関わりと指導性

- ① 地域の集まりや行事に積極的に参加することや各関係機関との連絡調整に努める。
- ② 地域コーディネーターとの連携及び校内支援体制の構築と指導助言。
- ③ 生徒の活動状況を周知するため、学校だよりやホームページ・職員通信の定期的な発行を行う。
- ④ 学校運営委員会の創設に向けて、PTA、評議委員会、教育委員会との連絡調整。

(4) 成果と課題

- 自校の子ども像を保護者や地域の方々と共有し学校経営に参画してもらうことで、子どもたちの学びや体験活動が充実している。
- 「チーム学校」の取り組みの推進には、地域や関

係機関等との日頃の交流や情報交換が大切であることを再確認することができた。

- 学校運営協議会設置に向けた教職員・保護者・地域の方々に対して、設置する目的や仕組みなどの周知を図ること。
- 学校と地域等が目標を共有できる関係性をさらに築き、マネジメント機能の強化を図る。

5 おわりに

令和3年度～4年度の各中学校の取り組みを持ち寄り、その分析をしてまとめる形で研究を進めた。国頭村、本部町、名護市南・東地区と各地域の特色ある取り組みの中で、学校と地域が連携・協働する「チーム学校」の構築のあり方という共通した視点で研究を共有できた。また、校長の関わりと指導性という点においても情報共有できたことは大きな成果であった。

名護市は、小中一貫教育校の2校において、平成30年度からCSをスタートさせた。その後、両校をモデルとして、段階的にCSを拡充し令和4年度には市内全小・中学校を対象にCSを導入している。様々な情報や問題が氾濫している現代社会において地域・家庭との結びつきは必要不可欠であり、課題解決の糸口としてのCSが進められていくと考えられる。

今後、名護市以外の自治体でもCS導入に向けて取り組みが推進されると予想される。名護市以外の自治体において、どのようにCSの導入を図るのか、名護市においては、校長や教職員の異動があってもCSによって組織的な連携・協働体制がそのまま継続できる「持続可能な仕組み」をどう構築していくのが重要な課題である。

「社会に開かれた教育課程」の再認識、併せて学校・家庭・地域が目標やビジョンを共有し連携・協働するCSを推進していくことを通して、本研究主題の「地域や専門機関との連携・協働による『チーム学校』の実現とその機能強化」に迫っていくものとする。

あ と が き

本研究大会の目的は、「校長の職務並びに教育活動について研究を深め、資質の向上を図るとともに、教育課程の取り組みを通して沖縄の現状を直視し、小・中学校教育の本質に立って、より充実した教育活動の展開を図る」事であります。

その目的を達成するために、第63回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会の開催に向け、県校長会では役員会や理事会において運営等の基本的な事項を確認し、事務局は各部との綿密な連絡調整、開催地区である島尻地区との連携を取りながら分担して準備を進めてきました。

しかし、今年度もコロナウイルスの感染拡大が収束せず、一昨年、昨年に引き続き「書面開催」となりました。ただ、過去2カ年は要録の作成のみでしたが、これまでのコロナ禍においてオンライン授業や会議・研修の取り組みが進められ、参集することなく様々な活動が可能となったため、今回の大会は各分科会提案地区の発表動画等をホームページに掲載し、沖縄県教育長講話や教育講演を動画配信することになりました。

本年度の小学校の大会主題は「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな者を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、副手大を「心豊かでたくましく生きる力を育み、活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性」と設定しました。中学校では大会主題を「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」のもと研究を進めてまいりました。

校長として、コロナウイルスの感染防止対策や臨時教員の未配置など多くの課題に対応しながら提案資料を作成して頂きました。本年度も研究協議はありませんが、本要録に掲載された実践や成果・課題、また、web掲載の動画資料等を会員全員で共有するとともに、更に創意工夫を重ね充実した実践が展開されることを望みます。

最後に、会員並びに関係者の皆様のご協力により、大会要録の編集が滞りなく終了できましたことに対して、心より感謝申し上げます。

令和4年11月

沖縄県小・中学校長会研究部

○小学校

宮 里 晋 (小研究部長：牧 港 小)	島 袋 洋 (国 頭：嘉 芸 小)
平 良 好 光 (中 頭：嘉手納小)	佐久田 悟 (那 覇：小禄南小)
前 城 光 告 (島 尻：佐 敷 小)	與那覇 修 (宮 古：下 地 小)
金 城 一 石 (八 重 山：大 本 小)	

○中学校

比 嘉 清 喜 (中研究部長：金 城 中)	永 野 正 也 (国 頭：東 中)
與那嶺 哲 (中 頭：沖縄東中)	上 原 仁 (島 尻：佐 敷 中)
平 良 良 嗣 (宮 古：池 間中)	下 地 和 美 (八 重 山：竹 富 中)

第63回沖縄県小・中学校長研究大会 島尻大会

大会宣言文

沖縄県小・中学校長会は、これまで本県の学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ねると共に教育条件の整備に努め、着実に成果をあげてきた。

今日の社会は、技術革新やグローバル化の加速度的な進展に伴って、教育を取り巻く環境は急激かつ複雑に変化している。さらに学校では、学力・体力の向上、いじめ・不登校の未然防止、特別な支援を要する児童生徒への対応、家庭や地域における教育力の向上等、様々な教育課題への対応が急務である。

このような中であって、これからの時代に夢や希望を抱き、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する人材の育成は、本県に課せられた大きな命題であると言える。

一方、教職員の長時間勤務の実態は深刻であり、学校教育を維持・向上させるために、また魅力的な職場づくりによる人材確保のために、より踏み込んだ「働き方改革」を早急に進める必要がある。

このような現状を認識し、沖縄県小・中学校長会は、全国連合小学校長会が設定した「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、全日本中学校長会が設定した「新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を主題に掲げ研究協議を進めてきた。

私たちは校長として、これまでの研究と実践を踏まえながら、小・中学校教育の更なる充実を目指し、強いリーダーシップの発揮により学校マネジメントを向上させ、家庭や地域社会の信託に応える決意である。

ここに、次の事項を決議し、その実現を期する。

決 議

- 一、 人間尊重の精神を基底におき、「時代を切り拓く力」を養成する教育の推進に努める。
- 一、 先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進に努める。
- 一、 学習指導要領の趣旨を踏まえた学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営、並びに学校教育の充実を図る評価・改善の推進に努める。
- 一、 教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努める。
- 一、 家庭・地域社会・関係機関及び関係団体との連携を深め、信頼される開かれた学校づくりの充実を努める。
- 一、 教職員研修の充実を図り、教職員としての使命感の高揚と資質・能力の向上に努める。
- 一、 ICTの活用をはじめ、多様な教育活動を充実させるため、人的措置を含む教育諸条件の整備・充実を努める。
- 一、 教職員が心身ともに健康でその意欲と能力を最大限に発揮できるよう、「働き方改革」を総合的・計画的に推進する。
- 一、 命を守る安全教育・防災教育の推進及び様々な危機への対応と未然防止の体制づくりを推進する。

令和4年11月11日

第63回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会

第63回沖縄県小・中学校長研究大会

－ 島尻大会要録 －

令和4年11月10日(休)・11日(金)

発行者 沖縄県小・中学校長会

電話 (098) 943-9747

FAX (098) 943-9748

E-mail:

oki-koutyukai2@kca.biglobe.ne.jp (事務局長)

oki-koutyukai1@kpe.biglobe.ne.jp (事務局員)

印刷 株式会社 国際印刷

那覇市宮城1丁目13番9号

電話 (098) 857-3385 (代)

F A X (098) 857-3892

E-mail:kokusai@herb.ocn.ne.jp

